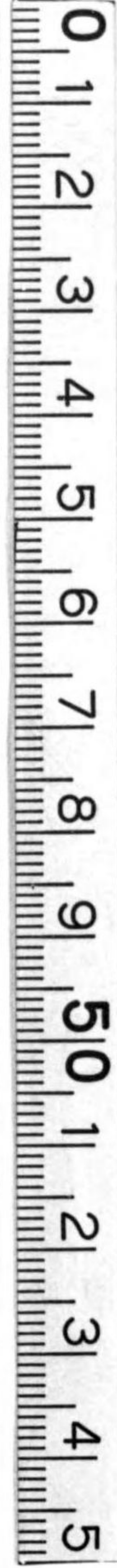


F13-Ta843-(2)ウ

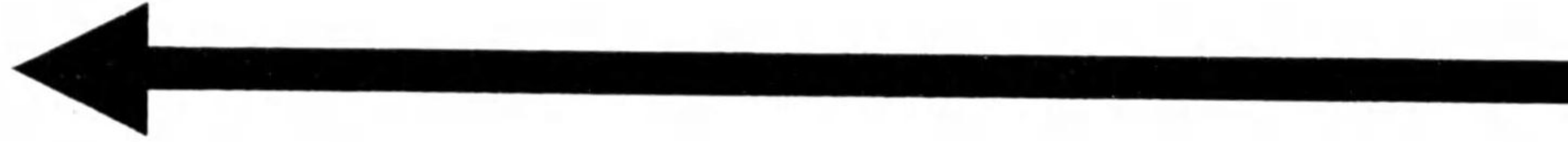


1200800308385

F13
A843
(2)ウ



始



25.11.30



旋

F13
TA843
(2)

時代

田中真太郎著



旋風時代

第二卷

装幀 田中咄哉州

65/7

神田の二つ橋取内に屯營してゐた土佐の親兵は、晩秋の夕陽を浴びて庭上に散ばつてゐた。オランダ式の訓練がすたれてフランス式になるとともに、陣羽織のやうな長いマントルを脱して、膝取マントルを着、髪もじやんぎりにしてサアベルを佩びた兵士は、三人五人と群をして、歩いてゐる者、蹲んで輪になつて話してゐる者、譚を唄つてゐる者、ふざけてとつ組みあひをやつてゐる者などがあつた。皆夕飯の前の時間つぶしであつた。其處の塀には柳がぼつぼつあつて、黄ろになつた其の葉が音もなく散つてゐた。其の柳の梢の向ふには七月十八日に置かれた文部省の建物がそびえてゐた。それは元の大學の後であつた。其處の二階の某室に二三人の女の白い顔が見えた。それは歌妓か權妻か時をり見る岡で敢て珍しくはなかつたが、檻の中の獸のやうな境遇におかれてゐる壯い男達は、忽ち興味をそれに集中した。

「おウイ、もんぶしやうウの、べつびん、」

「おウイ、べつびん、」

「なにかア云へエ、」

「××賣りイ、」

「そこで、そんなことウしよるとウ、××××をかくぞウ、」

「えとうウしんべエに、云ふぞウ、」

「もんぶしやうウの、なりあがりイものウ、」

政府では三月末に親兵が到着し、四月二十三日になつて兵制を定め、東山、西海の兩鎮臺を置いて、東山道鎮臺は石巻に本營、福島、盛岡に分營、西海道鎮臺は小倉に本營、博多、日田に分營を置いて國內の鎮撫に備へたが、物情の騒然たるものがあるので、内閣の改造を急いで、六月二十五日、大久保利通、木戸孝允、大隈重信、佐佐木高行、齋藤利行の參議、有栖川宮熾仁親王の兵部卿、萬里小路博房の宮内卿、大木喬任の民部卿を罷めて、西郷隆盛を參議に任じ、尋いで木戸孝允をもとの地位に復し、七月十四日になつてまた大隈重信に復任さすとともに、新に板垣退助を參議に任じた。此の七月十四日はかねての懸案であつた廢藩置縣を斷行した日であつた。此の日天皇は、小御所に出御して、薩知藩事島津忠義、山口知藩事毛利元徳、佐賀知藩事鍋島直大、高知知藩事山内顯範を召見して、版籍奉還を首唱した功を賞し、熊本、名古屋、徳島、鳥取の四知藩事へは、先年郡縣立制の建言をしたことを嘉せられ、つづいて大廣間に出御あつて、在京の諸知藩事を召見して、廢藩置縣の議を親諭した。翌十五日には岩倉、徳大寺、嵯峨の三大納言職を罷めて、岩倉を外務卿となし、又十八日には大學を廢して文部省を置き、江藤新平を文部大輔とし、吉井友實を宮内大丞として宮中の肅清を期し、越えて二十九日に太政官制を改めて、新に正院及び左右兩院を置き、太政大臣、左右大臣、參議以下は正院にあつて諸政を總判し、左院に議長及び議員を置いて立法の事を議せしめ、右院は諸省の長官が當務の諸案を草し、諸省の議事を審調するところとし、右大臣三條實美を太政大臣に任じた。そして、引き續いて民部省の廢止、××非人の解放を行ふなど、新日本の基礎を確立することに努めたが、薩長の浮浪と公卿の一部によつて組織せられてゐるやうに見えてゐる政府は、嫉視憎惡的となつてゐた。それに兵卒とは云へもともと維新の際に國事に奔走した志士であるから、親兵の頭には、神聖な官衙を怪しい女に踏みじらす官吏の不謹慎な行爲に對する憤りもあつた。親兵達は

皆其處へ集まつて来て口ぐちに叫んだ。すると女の一人が窓から顔を出して、兩手の指を兩斷へやつて舍を出した。

「彼奴、」

「けしからん、」

「阿房、」

「××賣り、」

「だんつめえ、」

續いて石が飛んだが石は窓へはとどかなかつた。

「のえくれで、繰りこむか、」

「さうぢや、のえくれぢや、」

「のえくれで、繰りこめ、」

親兵の一人は僚友の後へまはつて、僚友の洋袴をつるした兵士帯へ兩手をかけてつなると、他の僚友が来て其の後へつながつた。するとまた他の僚友がそれにつながつて、みるみるうちに長い長い行列ができたのであつた。

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえ、」

蛇の尾を執る、處によつては子を執ると云はれてゐる遊戯であつた。それは前頭に立つた者が最終の者を捕へ

ることになつてゐるので、前頭の者は右に左に廻はつて最終の者を捕へようとするのに對して、最終の者は捕へられまいとして右に左に逃げまはるが、其の日の前頭は最終を捕へる必要がなかつた。のえくれの一行は蛇の走る時のやうにうねうねとなつて庭の中を廻はつた後で、本門の方へ延びて往つた。行列の長さは一町にあまつてゐた。

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえ、」

一行は口ぐちに叫びながら本門を出て往つた。夕陽の光は亢奮してゐる悪戯漢の顔を照らしてゐた。

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえ、」

一行はそれから文部省の正門前へ押し寄せた。當時の官廳は陽の入る比まで事務を執つてゐたので、正門の口には二三人の關人が嚴然と控へてゐるが、御親兵の一隊であるし、どうせ血のあまつてゐる壯士のふざけだらうと思つて、笑ひながら見てゐるうちに行列は忽ち門の中へ侵入した。關人は驚いて支へようとしたが支へることができなかつた。一行は大手の門を破つて難なく敵の城中へ入つた時のやうに喊聲をあげた。喊聲の下から行進の掛け聲が起つた。

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえくれ、」

みるみる前頭は玄關前へ往つた。喊聲の音を聞いて出て來た十人ばかりの官吏の顔があつた。

「のえくれ、のえくれ、」

「のえくれ、のえくれ、こじやんとのえくれ、」

「のえくれ、のえくれ、こじやんとのえ、くれ、」

行列はますます勇氣が加はつたやうに見えた。顔を見せてゐた官吏達は一行のけんまくに恐れたやうにばらばらと引込んで往つた。喊聲がまた湧きたつた。喊聲の下からのえくれの行進曲。

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえくれ、」

「のえくれ、のえ、」

前頭は玄關へあがつてしまつた。省内は恐慄した。官吏は行列をさけて右往左往した。行列は廊下の板の間を踏みならして蛇行した。

「のえくれ、のえ、」

「二階ぢや、二階ぢや、」

「江藤の室ぢや、」

「××賣りをあげた奴を、だんつめえ、」

「こじやんとやれ、」

「のえくれ、のえ、」

一行はそれから二階の階段をあがりだした。さうした行列の上へあがることはひどく骨の折れることであつた。皆顔に汗を見せてゐた。一行はあはあと呼吸を吐きながら二階へあがつたが、階段をあがつてゐるうちは何人も何も云はなかつた。行列の最終がやつと階段をあがりきつた時に、先頭は廊下の中央へ往つてゐた。一行の顔には勝ちほこつたやうな色があつた。

「このへんぢやないか、」

「このへんかも判らん、××賣りがをつた室は、」

「一つのえくれ、」

「さうぢや、のえくれ、」

「のえくれ、のえくれ、」

前頭は其處に入口を見せてゐる左側の室の扉を開けた。

「のえくれ、のえ、」

「のえくれ、のえ、」

入口の扉の陰に五六人の者が隠れて暴漢の容子を覗つてゐた。覗つてゐた者はそれと見て横手の隣の室へ通ずる扉を開けて逃げた。のえくれの行列は室の中へ入つて往つた。みるみる桌は倒れ椅子は飛んだ。

「のえくれ、のえ、」

「をらんか、のえくれ、」

「××賣りは、をらんか、」

「江藤はをらんか、」

「だれでものえくれ、」

「のえくれ、のえ、」

天井も落ちよと床板を踏み鳴らす音、器物のたふれる音、人聲、省内は轟轟嗷嗷たる音にとざされてしまつた。

「何人もをらんぞ、」

「逃げたか、何處へ往た、」

「逃げたか、逃がすか、」

「押へてだんつめえ、」

其の時陽はすでに入つて一方の窓に映つてゐた晚霞の色が崩れてしまつた。騒擾の渦まきの中にある一行の眼にもそれがわかつた。

「日が暮れかけた、」

「暗うならんうちに探せ、」

「××賣りを探せ、」

一行はぞろぞろ其の室を出て次の室へ入った。桌が倒れる椅子が飛ぶ、轟轟嗷嗷たる音がまたおこつたが、對手になる者は何人もみなかつた。みないと云ふよりも室のなが暗いので、在否を見きはめることができなかった。

「のえくれ、のえ、」

「もう日が暮れたぞ、」

「もう逃げてしまふたぞ、」

「のえくれ、のえくれ、」

「もうええぞ、」

「ええことがあるか、まつとのえくれ、」

「いんにや、もうええぞ、」

行列は何時のまにかこはれて皆が頭をあつめた。

「もう歸の、」

「これでええ、ちつくと灸になつたぞ、」

「文部省のなりあがり者も、これで阿房をええせんぞ、」

「それに、江藤が知つて、薩摩と長州へ云うて、執りしづめに來たら、めんどろぢや、めんどろにならんうちに歸のぢやないか、」

「さうぢや、また彼の藏の中へ入らにやいかんぞ、」

一橋邸の中にある一つの古い土藏は、失敗のあつた土州兵の自刃するところであつた。

「こんなところで、藏の中へ入らされちや、わりがわりぞ、」

「さうぢや、もう歸の、」

一行はばらばらになつて暗い廊下を通り、二階の階段をおりて女關の方へ往つた。其處には處どころに挑燈の燈があつて暴漢を監視してゐるやうであつたが、そばへはよつて來なかつた。一行が近くなると其の燈の位置がかはつて往つた。一行はがやがや云ひながら女關口から出た。庭にも四つ五つの燈が散らばつてゐたが、それも一行のそばへは寄らなかつた。

「腹がひついた、」

「早う歸んで、飯ぢや、飯ぢや、」

「隊長に知れたらおこられるぞ、」

「決して云ふなよ、」

「云はにやあ、何人がしたと云ふことはわからんぞ、」

一行の中には夢がさめたやうになつて刑罰について心配しはじめた者もあつた。一行は何時の間にかだまつてしまつて前後して一橋邸へ歸つたが、朝になつて朝飯が終つたところで、平生より早い訓練はじめの喇叭が鳴つた。

それはどんよりと曇つて春のやうにほかほかする朝であつた。時間はづれの訓練の喇叭によつて整列した兵士の眼には、好奇的なそれで皮肉な色が漂うてゐた。其の兵士の前には土佐出身の校尉が集まつてゐた。土佐から

獻兵した親兵は、歩兵二大隊、砲兵二隊、騎兵一中隊、工兵一中隊で、一橋邸と土居邸の二箇所に分れて屯營してゐるのであつたが、一橋の方の兵士の一部が暴行したので、其の夜のうちに土佐關係の有志が集まつて善後策を講じた結果、其の朝の糺察となつたものであつた。其の時集まつてゐる校尉の中から靜に出て往つて兵士の前へ立つたものがあつた。それは右の眼が眇になつてゐた。大隊長の山地元治であつた。

「諸君、諸君は昨宵、ちくと悪戯たさうなが、あんなことは、壯いうちには、ありがたのことで、叱るほどのこともないが、物の見さかひをつけんと困る、云ふまでもなく、文部省は一國文教の府である、其の文教の府へあばれこんだことは、天朝をないがしろにしたと云はれてもいたし方がない、」

寡言であるが一度口を開くと、意をつくさないではおかなかつた。

「それに諸君も知つちよるとほり、親兵は薩摩からも長州からも來てをつて、何の藩の兵士の軍律が正しいかと云ふことは、皆から眼をつけられてをる、其の場合にあつて、こんなことをすることは、はなはだよろしくない、」天保十三年、高知城北小高坂の越前町に生れた忠七元治は、文久元年二十歳で容堂の御側動となり、明治元年正月には四小隊をもつて、幕府との親和のために開戦をほつしなかつた容堂の命を待たないで幕兵を攻撃したので、土佐藩をして倒幕軍の第三位におくことができた。元治の背後にゐる校尉の中には、軍務局員で土佐出身軍人の領袖の觀ある陸軍大佐谷干城、砲隊長で陸軍少佐北村重綱、陸軍大佐谷重喜、陸軍少佐池田應助、陸軍少佐武市熊吉、陸軍中尉武田秀山、陸軍少尉下村義明、陸軍少尉武市喜久馬、陸軍曹長中山泰道などの姿が見えた。「それに、軍隊には軍律がある、諸君の悪戯は單なる悪戯で、普通なれば罪につけるほどのこともないが、今云つたやうな事情であるから、斷乎として罰することにした、昨日、のえくれで繰り込んだものは、手をあげえ、」

元治の聲とともに整列してきちんとしてゐた兵士の體がぐらぐらと動いて、囁きあふ者もあれば傍視をする者もあつた。元治は眼を右から左へつらつらとやつた。

「よし、そんなら手をあげたものは前へ出て來い、」

手は其處此處に僅にしかあがつてゐなかつた。手をあげた者は肩を怒らし胸をそらして昂然として前へ出た。それは十五人ばかりで、のえくれの行列に加はつてゐた者の十分一にも足りるか足りないか足らぬものであつた。

「そればあか、そればあでもよし、今から護身を申しつける、罪は陸軍糾問司へ伺うてからおつてつける、それまで己の室へ引きとれ、」

陸軍糾問司はあつても獻兵をしてゐる藩の勢力が強いので何にもならなかつた。護身を申しつけられた者は、一齊に苦笑しながら右の方へ逃げるやうに歩いて往つた。元治は引返して校尉の集まつてゐる處へ往つて、何か云つて笑ひ顔を見せてゐたが、其のままいつしよになつて左の方から營舎の方へ歩いて往つた。

暴行事件は後藤板垣の手によつて各方面を糊塗し、のえくれは土佐一流の遊戯で、文部省に敬意を表したものであると云ふことにした。従つて暴行兵士も、手をあげた者へ形式的に護身を命じて、他は不問に付したのであつた。

谷重喜は表神保町の街路を駿河台の方へ歩いてゐた。重喜は駿河台の後藤象二郎の許へ暴行兵士處分の顛末を報告に往くところであつた。其の比一橋通りから神保町へかけて、旗下邸を除き拂つた址に料亭や茶坊が出來てゐた。重喜は伴だつて出て來た武市熊吉下村義明中山泰道の三人から、神保町の萬屋と云ふ料亭へ往くからと云

つて勝はれたが、後藤邸へ報告に往かなければならぬので、残念であつたが一行と別れて来たところであつた。もう午に近かつた。板垣邸に同居してゐる重喜は、其の昨夜暴行兵士の善後策のことで軍務に關係のある土佐の校尉が板垣邸へ呼ばれた時、これも呼ばれて駆けつけて来た谷干城が軍律のことをやかましく云ひだしたのを板垣が押へつけたので、干城が不快な顔をして黙つたことを思ひだしてゐた。學究的で狷介な其の時の干城の顔が浮んで来ると重喜は思はず笑つた。

(守部草が怒つたぞ)

守部は干城の通稱であつた。重喜は明治三年干城が土佐藩を改革しようとして容堂の怒りに觸れ、後藤と板垣のために蹴倒されんばかりの目に逢つたことを思ひだした。

(守部草が、また何かもくろむぞ)

心の大きな重喜は干城に對して好悪はなかつたが、象二郎と退助が容堂の命を帯びて土佐へ歸つて、干城一人を除外にして高知城の二の丸で會議を開いた時、干城は獨りで南會所の藩の政廳へ出勤したが、三日間諸執政も同僚も出て来なかつたので、いよいよ決心して辭職したことを思ひだした。其の時から人力車が来て重喜を追ひ越さうとしたところで、車の上にもたが聲をかけた。

「谷君ぢやないかよ、」

重喜は顔をあげた。車には大藏大丞の岡本健三郎が乗つてゐた。

「岡本君か、」

「どうぞよ、昨夜、悪戯たと云ふが、どうぞよ、始末がついたかよ、」

「つけた、つけた、やかましく云や、うちの恥ぢや、」

「守部草が、おつかうに云やせざつたかよ、」

「それよ、それよ、おつかうに云ひよつたが、板垣の大將が、唾を飛ばして、机をたたきたてて押へつけた、」

「さうかよ、さうぢやらう、やつつろ、やつつろ、やつたと思ふ、」

「やつたぞよ、」

「それで守部草は、どう云うたぞよ、」

「どう云うたところで、うちの恥になることぢやもの、しかたがないぢやないか、」

「それや、さうとも、それに女子が二階から、戯弄たと云ふぢやないかよ、」

「さうぢやと云ふことぢや、それで××賣りを、だんつめえと云うて、それが原ぢやさうな、」

「よかつた、よかつた、のえくれでよかつた、あれが普通にあれば込んだら、ちつとむつかしかつたが、のえ、

れでよかつた、」

「さうよ、のえくれでよかつた、ぞんぐわい智慧があるきにのうし、重喜は思ひだして、「後藤の大將かよ、」

「さうよ、役所にをつたが、厭になつたきにやつて来た、君も大將かよ、」

「さうよ、報告に往きよる、」

「すましちよいて、一ばいやろぢやないか、」

「やろ、」

「そんなら、一足、さきへ往ちよる、やつて来い、」

後に武者繪のついた車は風をきつて走つた。重喜は其の後から靜に歩いて西紅梅町の後藤邸へ往つた。後藤邸には健三郎を乗せて來た車夫が、門の内の微陽の射したところで、車の蹴込みに腰をかけて淡巴菰を喫んでゐた。

重喜は玄關へ往つた。玄關には顔なじみの食客の一人が控へてゐた。

「今岡本君が來たらう、他に客があるかよ、」

「林さんが來てをります、」

「なに、はやし、重喜はちよつと考へて、林有造かよ、」

「さうです、」

「林ならかまうまい、土佐の郷黨ぢやきに、西洋室かよ、」

重喜は持ちまへの如才ない口のきき方をしい靴を脱いであがり、食客の嚮導を待たないで、應接室へ往つて扉を叩いた。

「何人だ、」

それは象二郎の聲であつた。重喜は大きな聲でそれに應じた。

「谷重喜ですが、」

「ああ、谷君か、はいれ、」

重喜は扉を開けて入つた。圓い桌を据えた室には、主人の象二郎が二人の客と對談してゐた。客の一人は健三

郎で一人は林有造であつた。願のすつこけた鷹のやうな感じのする有造は、高知縣の權小參事として上京してゐるところであつた。其の有造の背後には暖爐があつて、其の上には二頭の獅子の鑄造物によつて捧げられた置き時計が置いてあつた。重喜はまづ主人の象二郎に挨拶した。

「昨夜は御迷惑をかけた、」

象二郎は軽くそれを受けた。

「旨くいたのか、かけたまへ、林君が來ちよる、」

有造は土佐の幡多郡宿毛の生れである。土佐の國老伊賀氏の世臣岩村有助の子で、山内家の倍臣として明治戊辰の役には板垣退助に従つて奥羽に轉戦した。重喜は有造と板垣邸で時どき逢つてゐるので珍らしくはなかつた。

「やあ、今日は、」

「やあ、昨夜から御苦勞ぢやさうなが、旨くいたかよ、」

「十五六人、手をあげた奴だけ、講身さすと云ふことにして、けりをつけましたが、重喜はさう云つて傍の椅子に腰をかけたが、健三郎に挨拶した。今、失敬、」

象二郎は思ひだしたやうに云つた。

「谷は土佐へ、兵學校の始末に歸ると云ふことぢやが、何日歸るだらう、」

其の谷は谷干城であつた。各藩で兵學校を設立した時、土佐でも谷干城の發意で陸軍幼年學校と云ふのを設けたが、政府で兵學校を設立することになつて既に設立を見たので、干城は土佐の兵學校の俊才を選んで、政府の兵學校へ入學させやうに、兵部大輔山縣有朋に相談して、御用有之之大阪鐵道へ被差遣と云ふ辭令をもらつて、

士佐へ歸ると云ふことは重喜も知つてゐた。

「さあ、何日ですか、日は聞きませんが、」

「さうかね、」

健三郎がそれに口を挟んだ。

「山縣に相談せんと定るまいて、」

象二郎には健三郎の云つた詞の裏が直ぐ判つた。

「なににせよ、めんどうな男ぢや、」

明治二年二月、土佐藩政の大改革の際小参事兵局掛となり、深尾丹波を首座に戴いてゐる干城は、藩の財政の窮迫してゐるにもかかはらず、東京詰の藩吏が遊蕩のために藩金を費すうへに、容堂の浪費が多く、其のうへ象二郎と退助が容堂を笠に著て東京から藩政を左右するのは不埒だと云つて、翌年片岡健吉と東京へ出て、容堂はじめ在京の關係者を訪うて、藩の窮迫を訴へて改革のやむべからざることをほめかし、七月になつて土佐へ歸るや否や、十八箇條の改革意見を提出して改革に著手した。藩内の勤儉廉潔を保つとともに、容堂はじめ東京方面の浪費をばぶき、藩政相談の下に象二郎に與へてある多額の報酬を削り、退助は藩の大参事、有造は權小参事であるから、東京の居住を禁じて土佐へ呼びもとすと云ふのが其の眼目で、見方によつては象二郎と退助の權勢を根本的に削除せんとする陰謀のやうにも見えた。普佛戰役視察のために洋行の内命があつて、不日出發することになつてゐた退助は、此の報に接するとともに洋行を辭退して、象二郎と同行して土佐へ歸り、二の丸會議の結果、干城を兵局から追うて改革を中止した。そして、二人で東京へかへる時、象二郎が退助に、

(谷を土佐へおくといかん、東京へ出すやうにしよう、)

と云つた結果、谷が兵部省に出仕するやうになつたことは一座の者の知るところであつた。

「守部草に、くさまん、くさと名のつくものは、皆、めんどうぢや、のうし、」

重喜は健三郎に眼をやつて微笑した。くさまんとは佐佐木三四郎の高行の渾名であつた。土佐吾川郡長濱村の瀬戸に生れて、城下の杓田へ移り、窮困のために洗濯しない衣服を著てゐたので臭まんと云はれたものであつた。高行は其の時司法大輔で洋行の直前であつたが、干城の改革に策動してゐた。健三郎は重喜の云ひ方がをかしかつたので笑ひだした。

「さうよ、さうよ、くさは困らあ、のうし、」

象二郎は有造の顔を見たが、ふと思ひだしたことがあるので聞いた。

「土佐の形勢は、どうぢやらう、」

土佐では高岡土佐吾川三郡の北部山間が、流言蜚語によつて動搖してゐた。

「流言蜚語がますます盛んで困つてをります、」

「やつぱり、脂採りか、」

「さうです、病院の寢臺が鐵架ぢやと云ひだしたさうです、」

「寢臺が鐵架か、こいつは奇抜ぢや、だが、騒がれぢや困るが、」

「さうですよ、高知の士族までが、こんなことを云うて、縣廳へ談判に来るさうですから、」

「舊弊な奴は、困つたものぢや、」

「さうですよ、ぢやから、わたしも、早く一件の方をかたづけしておいて、いちど、インおきたイと思うちよります、」

有造が己の土地の詰つた詞のつかひ方をしたので、重喜は健三郎の方を見て微笑した。健三郎は早く出たいと思ひだした。

「谷君、お暇をしようぢやないか、どうぞよ、」

重喜も健三郎と約束してをることを思ひだした。

「さうぢや、お暇をしよう、」

象二郎がそれをとめた。

「待ちたまへ、吾輩はこれから、林君と柳橋へ飯を喫ひに往くことになつてをるが、君達もいつしよに往かないか、」

重喜は先輩におぶされることはいいが、象二郎が酒を飲まないで面白くないと思つた。すると健三郎が率直に云つた。

「僕と谷君は、中村樓へ往て、一ぱいやることになつてをりますが、」

「さうか、そんなら兩國まで馬車でいつしよに往かうか、」

「さうですか、それでは、さう願ひませうか、」

一行は直ぐ支關へ出て、既に準備の調うてゐた馬車に乗つて出發した。それは二頭立の眞新しい舶來の馬車であつた。健三郎と重喜は其の馬車で兩國橋の袂まで送つてもらひ、其處から降りて前岸の中村樓へ往つて酒を

命じた。

其處は二階の階段に近い室であつた。健三郎と重喜は時をり其の家へ来て、婢達とも面友であるし、室のことも知つてゐるところから、左隣になつた床の間つきの廣い室へ入らうとしたが、其處にはもう客があつてふさがつてゐるので、しかたなしに其の室へ入つたところであつた。健三郎はふと床の間つきの室を占領してゐる客のことを思ひだした。健三郎は盃を控へた。

「何人だ、隣のお客さんは、」

婢は重喜の盃へ酒を注いでゐた。

「山縣さんでございます、」

「なに、山縣」と健三郎は興味をそれにやつた。「長州の山縣か、」

隣では何か話す聲がしてゐたが中音で靜に話してゐるので、何を云つてゐるか判らなかつた。

「官員さんの山縣さんですよ、」

「一人か、」

「井上さんも御いつしよですが、も一人の方は、一二度お見かけしたことはございますが、何方ですか、」

「さうか、どうぞ山縣や井上の妖怪といつしよに來てる奴だから、長州あたりの奴だらうよ、のうし、」

健三郎の眼は重喜へ往つた。重喜は笑顔を見せた。婢は己の考へを云つてしまはなくては氣がすまなかつた。

「何方ですか、ひどく丁寧な詞でしたよ、」

「胡麻をすつてる奴だらう、官員にでもなりたいたらうよ、」

「をうさんに逢つちや、かなはないわね。」

「なに、男の悪口は云ふが、女の悪口は云はんぞ、」
健三郎の詞を重喜が受けた。

「女の中でも、わけてお松さんのことは云はんよ、」
健三郎がそれにつけ加へた。

「云はんとも、情婦のことは云はんぞよ、のうし、」

四

健三郎は小さな聲で笑つて重喜を見た。重喜は久しぶりに忘れてゐた方言を聞かされて喜しかつた。婢には其の方言が判らなかつた。

「といちつて、なあに、」

重喜が對手になつた。

「といちとは、とうにひとつちや、」

「その十に一つつて、なんなの、」

「それが情婦ぢや、」

「そのさ、情婦と十に一つつてことは、なんなの、」

「そいつは、口では云へん、禪のやうなもので、さとりより他に途がない、」

重喜の詞の中に隣の室から女の大きな笑聲がした。それは何人かに悪戯をせられて嬌つたれてゐるやうな聲であつた。健三郎が耳をたてた。

「あ、あれや、何人だ、歌妓か、」

婢はちよと考へた。

「常吉さんでせうか、今来たのでせうか、」

「来たから、聲かしてをるぢやないか、来んに聲がすれやあ、」と健三郎はだらりと両手の指をさげて見せた。「いれぢやぞ、」

「いやあよ、をうさんは、それでなくてさへ、びくびくしてるのよ、」

「なにかあるのか、」

「ありますよ、へんな小坊主が、此の比出るのですよ、」

「何處へ出るのだ、」

「歌妓衆なんか、夜、おそく歸つてると、出て来て抱きつくのですよ、」

「君も抱きつかれたのか、」

「わたしは、抱きつかれないが、お島姉さんが抱きつかれたのですよ、」

「彼の婆あに抱きつくなんて、よつほど好奇ぢやぞ、」

「まあ、」

其の時隣の室でまた女の笑聲がした。健三郎はふいと起つて奥の襖の方へ往つた。

「およしなさいよ、そんなこと、」

婢は悪い冗談はよさせようとしたが、健三郎は耳にも入れないで襖の真中の合せ目の處へ行き、一方の引手に手をかけてそうと透かした。そして、健三郎は其處に何か珍しいものを見つけたのか、ちよつと眼を見すゑてゐたが、やがて重喜を隠んで引返して来た。

「何人ぞよ、」

重喜は健三郎を待ち受けるやうにして小聲で聞いた。健三郎は重喜の顔へ近く己の顔を持って来た。

「守部草ぞよ、」

「なに、守部草、」

「さうぢや、」

「また、何かやりよれやすまいか、のうし、」

「さうよ、」と云つて健三郎は元の席へ座つた。「どうも、いかんぞよ、」

「いかん、のうし、」

「また昨宵のことを根に持つて、云ひよれやすまいか、のうし、」

「さあ、のうし、もともと兩大將の豪いことが楯にさはつてたまらいで、くさまんとやりよるきだ、」

「それや判らん、なんとも云へん、」

二人の話は婢には判らなかつた。

「なに云つてらつしやるの、」

健三郎はそれを押へるやうにした。

「さて、さて、大きな聲を出すな、向ふに堅い男がをる、知れると具合がわるい、僕達のをることを聞かれても、云うぢやいかんぞ、」

「さう、こはい方なの、」

「さうとも、僕達の先生ぢや、」

「何の先生、お手習、」

「まあ、そんなものぢや、」

重喜がそつと起つた。重喜は婢の顔を見た。

「ちくと、先生を拜うで来ス、」

「でも、すかし見は、よくないわよ、」

「それも、さうぢやが、先生の顔は見たいからね、」

「でも、うちの家風にかかはるわ、すかし見なんかするのは、」

「まあ、さう云ふな、」

重喜がわざとらしく足を爪だてて襖の方へ寄らうとした時、入口の方が開いて二人の歌妓が入つて来た。歌妓の一人は重喜の怪しい容を見つけた。

「何してらつしやるの、」

重喜は笑つてみせた。重喜はそれが隣へ聞えてはいけないと思つたので、直ぐ己の席へ歸つた。

「お隣に昔の先生がゐらつしやるつて、大騒ぎしてるところよ。」

婢は健三郎の詞をほんたうにしてゐた。歌妓は二人とも時をり喚ぶ女で、年をとつた方は小仙、壯い方は千代香と云ふのであつた。健三郎は己と重喜の間へ座つた千代香に悪戯さうな眼を向けた。

「おい千代香、君は昨宵、小坊主に抱きついてもらつたと云ふが、ほんたうか。」

「まあ、いや、ねえ、何人がそんなことを云つたの。」

「皆がさう云つちよる、お松だつてさうぢや。」

千代香は健三郎にお酌をしてゐた。

「姉さんが、そんなことを云つたの。」

お松は笑つた。

「うそよ、お鳥姉さんのことを云つたものだから、そんなことを云ふのですよ。」

「さう、ほんとに厭な方ねえ。」

「さうよ、ほんとに悪戯坊主よ。」

「悪戯坊主は、怪しからんぞ。」

重喜の詞を小仙が押へた。

「ほんたうよ、谷さんは悪戯坊主よ。」

「おい、ますます怪しからんぞ、よつてたかつていぢめるとは、怪しからんぞ。」

お松の眼が笑つた。

「それは、ちくと怪しからんぞ。」

お松が土佐訛で云つた時、健三郎はひよいと起つた。健三郎は手で女達の頭の上のはうを押へつけるやうにした。

「何も云ふな、云ふな、先生をちくと見て来る。」

お松がまた止めようとしたが、健三郎は耳をかさないで襖の透してある處へ往つてそつと眼をやつた。お松もそれをやかましく云つて健三郎の透し見を隣室へ知らしたくないので重喜へ話を持つて往つた。

「ほんとに、二人とも悪戯坊主よ。」

隣室では谷干城が山縣有朋と井上馨を對手にして酒を飲みながら話してゐた。それは有朋が干城のために催した祖道の宴で、主賓席に干城が床柱を背にして座り、馨が其の右側、有朋が左側に座つてゐた。其處には歌妓の常吉と婢の一人とがゐて、杯盤の間を周旋してゐた。干城の詞は樓のやうに續いて絶えなかつた。干城は有朋を見てゐた。

「如何に腐敗墮落してゐるかは、家老の深尾丹波が、市外の上の新天地へ、丹吉樓と云ふ料亭を建てて、如何か美しい婦女子を抱へて商賣をしてをるに徴しても判ります。」

「ほう、それはすこしひどいな。」

「實に言語道斷です。」

其の時馨の口が重く開いた。馨は民部少輔で財政の樞機に當つてゐた。

「土佐の財政も、ひどいと云ふぢやないか、林有造が来て奔走してゐるやうぢやが。」

「さうです、干城は藩政を改革しようとして、後藤象二郎と板垣退助から足蹴にせられんばかりの目に逢つた不平に燃えてゐた。隈山論議録によれば、——去三年に財政の紊亂を救はんと却て大失敗を招きたる遺憾あれば黙止すること——がでなかつた。「言語道斷」です、それでわたくしは、それを改革しようと思つた、せんたい高知の歳計豫算は、東京の方の費用が主になつてをりまして、高知の方は、二の丸と四軒の連枝の入費一切で二萬兩であります、東京では容堂老公の月づきの入費が三千兩で、それも財政困難の事情をうつたへて、漸く三兩になつたもので、まつたくお手許の入費で、臨時の事は素より、召遣の者の俸給は皆別であります、そこでわたくしは、片岡と二人で東京へ出て、容堂老公、智鏡院様をはじめ、後藤板垣にも逢つて、それとなく改革のやむべからざることをほのめかしておいて、高知へ歸るなり、軍人の同意を得て、改革に着手しましたが、將來のことを考へない後藤と板垣は、三百萬圓ばかりの國札を刷つて、まづ景翁大老公の邸宅を城外へ新築し、五臺山の西端に洋風の煉瓦の病院を建築して、外面的な文明開化を装はうとしてをつたのを中止さしました。」

「三百萬圓も刷つたらうか、大膽なことをやるなあ、」

「まだ三百萬圓は刷つてをりませんが、確なことはわかりませんが、百五十萬ぐらゐちやと云ふことであります、」

「さうか、」

五

「是はまただまりこんだ。干城は平然として盃を持つてゐる有朋の方に氣を配つてゐた。」

「わたくしどもの改革も、財政の逼迫を救ふためでありますから、まづ紙幣の發行を止めるとともに、景翁大老公の邸宅の新築も猶豫を顧ひ、五臺山の病院も中止し、一切の新趣向を排斥し、奢侈を禁じ、勤儉廉潔の風に引き返すとともに、東京の冗員冗費の削除に着手しました、それに政治と云ふものは變故百出するもので、其の時に従ひ、其の事に應じて處分せんければならんものであります、後藤と板垣は東京を根據にして、時どき土佐へ歸つて叱言を云ひますが、二人には容堂老公の後盾がありますから、土佐には豊範公がをられ、大參事以下百司が備つてをるけれども、東京の鼻息を窺はないと何事もできんと云ふ有様で、實に不都合であります、今も申しましたやうに、冗費が多いから、東京語の役人は、福岡藤次と土方利左衛門の二人を残して、板垣、林の大參事、御仕置役の間患藏、公用人の下村桂太郎、毛利恭助の大頭はじめ、冗員と認むべき者は、皆呼びかへすことにしたうへで、藩政御相談の名の下に、すくなからざる報酬を與へてあつた後藤の報酬を削ることにしましたから、東京ではわたくしが謀反でも策てたやうに云つて、板垣は洋行をやめて、後藤と二人で歸つて来て、わたくし一人を除外して、二の丸で會議をした結果、それを中止したので、わたくしは、やることをやつて倒れたのですから心のこりはありませんが、實に言語道斷です、」

健三郎は干城の一言一句も聞き漏らすまいとした。健三郎は自國の缺點を人もあらうに山縣、井上に暴露するとは言語道斷だと火のやうになつて怒つてゐた。健三郎がたち聞きしてゐるとは知らない干城は、心ゆくまでに

「それで君を投げ出して、改革を中止したのだね、」
山縣の眼には笑ひがあつた。

「さうです。」

其の時響の口がほころびた。

「それからどうなつたね。」

「それから役人の黜陟があつて、勤儉主義は全く排斥せられ、中止してあつた景翁大老公の邸宅も建築にかかり、五臺山の病院も亦建築にかかりましたが、それは昨年十一月のことで、士の常職を解いて、士族の祿を祿券にして、賣買を許したうへに商法を許しましたから、士族は吾も吾もと商法をするし、わたくしが中止した紙幣は増發せられるし、一時火の消えたやうになつてをつた東西の兩新地は盛になるし、實に無秩序になりましたが、これは皆後藤のやることで、板垣は、經濟の頭がないから、こんな計畫は皆後藤であります、其の一方で後藤はイギリス人マイヤと云ふ者を雇うて来て、吸江へ英學塾を作り、開成館を擴張して、藩自から商業に力を入れ、岩崎彌太郎に云ひつけて、大阪から金を二十萬ばかり借りて来て、紙幣引替所を設けて、紙幣の信用を回復しようとしたが、何人も信用せんから、紙幣を擔いで引替所に詰めかけると云ふありさまで、所詮二三十萬の金では信用を回復することができず、またたく間に窮地に陥つて、大阪で引替へると云ふことにして、岩崎が引きあげますと、人民は紙幣を持つて北山通り大阪へ押しかけましたから、大阪でも困つて、たうとう引替へを中止しました。」

「全部で、土佐で刷つた紙幣はどれくらゐだらう。」

「それはどうも判りません。」

「書類があるだらう。」

干城は此處そとばかり力を入れた。

「其の書類は、後藤と板垣が焼いてしまひました。」

「なに、焼いた。」

「さうです。」

「それは亂暴だなあ。」

響はちよと驚いたやうに云つた。

「不始末を覆うためです、言語道斷です。」

有朋の笑ひ聲がした。

「後藤のやりさうなことぢや。」

響は重おもしかつた。

「しかし、亂暴ぢや。」と云つてから、「土佐の紙幣は例の鯨札だな。」

「さうです、慶應二年に桃色金札を刷りましたが、それは五箇年限のものですから、銀券を刷つて替へました、それが大黒札ですが、信用がありませんから、金券に替へました、それが鯨札です。」

「それぢや六七年の間に、三種の紙幣を刷つたことになるが、だいぶん苦しいな。」

「困つたものです、干城の氣もちはやや緩んで來た。干城は其の時小南五郎右衛門起用のことに就いて、今一度だめをおしておかなければならんことのあるのに氣が注いた。干城は勤王家で先輩である五郎右衛門と藩政の改革に當つてゐた關係もあるので、佐佐木高行の賛成を得、有朋に交渉した結果が、南歸の際五郎右衛門の内意を

探ることになり、井上馨にも同席してもらふ必要があつて、有朋の命で中村樞の前岸にゐる驛を呼んだものであつた。干城は有朋を見た。「それで、今の小南のことでございますが、」
有朋は盃を空へた。

「ああ、」

干城は両手をきちんと膝へやつて、もちまへの猜介な風貌を見せてゐた。

「わたくしが、かうして小南のことをお願ひいたしますのは、わたくしの先輩に對する情義もありますが、小南は御承知の勤王家で、東征の役には大目附として従軍しました、其の時小南は大監察でありました、板垣が大隊長で、片岡健吉、祖父江可成が半大隊長、森權次が仕置役、谷更毛とわたくしが小目附、小隊長は、今洋行してをります眞邊波作、それから日比虎作、野本平吉、横田祐造、宮崎合作、谷神兵衛、谷口傳八、平尾左金吾など云ふものがをりました、」

「彼の時、板垣は藩命も待たないで、藩廳に迫つて、兵を率ゐて出發したと云ふぢやないか、」

「さうです、それがために伊豫の馬立で、松山高松追討の命が降つたと云ふ早打に逢ひましたが、藩公の命を受けないで、兵を出したものですから、暴凌の嫌疑を受けて兵を進めることができず、しかたなしに、更めて藩の命を受けることにして、わたくしが引返しましたが、幸にして松山も高松も降服しましたから何事もなかつたやうなもの、板垣はどうも過激で、前後を考へないで困ります、」

「さうぢや、われわれも粗暴過激ぢやが、板垣君は、われわれより、まだ一層うへのやうぢや、」

「板垣は、御一新になるまでは、容堂老公から平生斥けられてをりましたが、時勢が違ひましたから、老公も板垣を大事にしてをりますが、しかし、御内心はどうですか、板垣が入京した時のことでございますが、何處まで

も傲慢不遜な板垣は、老公の前へ出て、老公は平生、此の板垣を、粗暴過激ぢやと云うて、お斥けになりましたが、今日はかへつて其の粗暴過激者の天下になつたではございせんかと云ひましたから、老公も苦笑したと云ひますが、」

「それは板垣君の云ひさうなことぢや、しかし、天下非常の際は、濃厚篤實の君子人ぢや間に逢はん、馬上で天下を定める時には、どうしても馬上の人がなくてはいかん、會津の攻略は、佐佐木高行君や福岡孝悌君ではできん、やつぱり板垣君でなくぢや、」

「それはさうです、要するに豪傑であつて、思慮周密な經世家でなくては、天下は治まりません、それに就いて小南は、豪傑であつて、決斷があり、經世家としても立派な男でありますから、どうかよろしくお願ひいたします、」

「それはいい、小南君さへ出る腹なら、井上と二人で骨を折る、とにかく小南君の腹を聞いてもらはう、と、有朋は驛の方を見て、「なあ、井上、」

驛は常吉と顔を見あはして何かしら笑つてゐた。驛はびつくりしたやうに有朋を見た。

「なんぢや、」

「小南君の話さ、小南君に出る腹があるなら、二人で何時でも骨を折らうと云つてるところぢや、」

「さうだ、とにかく本人の腹を聞いたうへにしよう、」

干城は感激してゐた。

「お二人の御厚意のある處を開かしましたなら、小南はよろこんで朝官になることをお願いいたします、わたくしは小南の氣もちをよく知つてをります、それではよろしくお願ひいたします、」

「それは大丈夫ぢや、小南君の腹さへきまれば、今度は響が有朋を見た。「なあ、山縣、」

「さうとも、有朋はさう云つてから干城を見て、「それで、何時出發しなさる、」

「明日横濱へまゐりまして、明後日の蒸氣船で出發したさうかと思ひまして、」

干城はさう云つて顔をあげた。隣室との境の襖がすこし開いてほのかに人の顔のあるのが見えた。干城は氣が咎めて眼を睜つた。同時に襖が新らしく五寸ばかり開いて、ほのかに見えてゐた顔がはつきり見えた。干城はびっくりとしたやうにした。其の干城の耳に、

「失敬、」

と云ふ聲が響くとともにびしやりと襖が締つた。

六

襖を締めたのは健三郎であつた。健三郎はどたと引返して來た。健三郎の透し見のさまたげをさせないやうに、女達の心を此方へ向けさして冗談口を利いてゐた重喜は、健三郎が襖に音をさせながら失敬と云つた詞を聞くとともに揮り向いた。

「何をしよるぞよ、」

「何も蕪もあるかよ、」健三郎は重喜に衝つかかるやうに云つた。「實に怪しからん、」

「なんぞよ、」

「たかで、やちがない、」

「なんぞよ、まあ座り、」

「あわてても、しようがないが、けんど怪しからん、」と云ひ云ひ元の席へ座つて、「去年の改革のことは、ちつとぎやうさんぢやないかと思ひよつたが、さうぢやない、やつぱり守部草は、士大夫の風かみに置けん奴ぢや、邪智奸佞の小人ぞよ、」

「どうしたぞよ、」

「待ち、己のはやる心を己で押へつけるやうにした健三郎は、半無意識に盃を持つて、「あわてな、」

「また、てんがうかよ、」

小仙は健三郎の手にした盃へ酌をしたが、何かめんだうな事情がありさうであるから何も云はなかつた。健三郎はふとそれに氣が注いだ。

「おい、小仙、何を云ひよれや、」

健三郎の口元に微笑が漂つてもう平生の面白いお客さんになつてゐるので、小仙も氣をおく必要がなかつた。

「わたしよりか、あなたは何を云つてらつしやるの、」

「僕か、僕は、其の、ちくと僕達の先生が、怪しからんことを云ひよつたから、憤りよら、」

「何を云つてらしたの、」

お松の聲がそれからんだ。

「悪戯坊主のことよ、」

千代香が狂氣のやうに手をたたいて甲高な笑ひ聲をたてた。

「さうよ、さうよ、悪戯坊主のことよ、悪戯坊主のことを云つてらしたのだよ、」

健三郎は咽喉の乾いてたまらない人のするやうに、矢つぎばやに三ばいの酒を續けて飲んだ。重喜はそれをおと見まもつてゐた。

「どうしたぞよ、」

健三郎は緊張した顔をした。

「待ち、此處ではいかん、駿河臺へ往かにかやあ、いかんが、大將は今晚遅うないと戻るまい、まあ、飲まう、ちよと室の中を見まはして、要するに例の十八箇條の復讐ぢやよ、」

「さうかよ、山縣と井上に云ひよつたかよ、怪しからん、のうし、」

「言語道斷、詰腹ぢや、」

「ええとも、」

「まあ、飲まう、朝のことよ、」

二人はそれつきり話題を他へ移して飲んでゐたが、其の翌朝、それは霧の深い朝であつた。二人は八時比、駿河臺の後藤邸へ人力車で乗りつけ、至急に逢ひたいことがあると云つて、執りついでもらつて象二郎の室へ通つた。

「まさか、馬ぢやあるまいな、」

象二郎は机へ向つて書翰を書いてゐるところであつた。二人は苦笑した、

「大丈夫ですよ、」

健三郎は書生の置いて往つた茶碗を持つて飲んだ。

「歸りは歸りだらう、」

「それや、さうですが、今朝は平生の酔たんぼうぢやありません、大事件があります、」

「なんだ、」

「昨日、中村樓へ往つてみると、谷が山縣と井上と三人でやつてをりまして、」

「さうか、」

象二郎は健三郎の顔を見た。しかし、象二郎の顔はいつものあいそいい顔であつた。健三郎は勢ひこんでゐた。

「後藤さん、谷は腹を切らさんといきませんか、」

「何かやつたのか、」

「やりよつたどころか、えらいことをやりよりました、昨日あれから、中村樓へ往てよかつた、」

「さうか、」

「土佐の改革のことで、あなたと板垣さんが、谷をやつつけたことは、すこしやりすぎたやうに思つてをりました、なるほど彼奴は、いかん、彼奴は邪智奸佞の徒ですわ、」

「どんなことをしたのか、」

「土佐の事を密告してをりました、あなたが藩札をこしらへたことから、書類を焼いたことから、土佐藩の弱點と缺點を、輪に輪をかけて讒言してをりました。」

象二郎は手にしてゐた筆を置いて、向けるともなしに健三郎の方へ體を向けた。

「聞いたか。」

「隣の室へ三人の客が来ちよると云ひますから、聞いてみますと、一人は山縣で、一人は井上、他の一人は二度来たことのあるが、名はわからないが、ひどく二人へ丁寧に物を云ふと云ひますから、好奇に襖をそつと開けて、のぞいて見ますと、谷ですから、また何かしよれやせんかと、立聞きしてをりますと、それですよ。」

「さうか。」

「原因はやつぱり、十八箇條で、あなたと板垣さんに、ひどい目に逢はされた復讐ですよ。」

「さうか、それで山縣と井上は、どんなことを云ひよつた。」

「山縣はあまり何も云はざつたが、彼の井上が藩札を幾何刷つたとか、時どき衝つこんだことを聞いてをりましたよ。」

「それで谷が、藩札を幾何刷つたと云うたのか。」

「三百萬圓と云ふが、證據になる書類を焼いたから、はつきりしたことは判らんと云ひました。」

「さうか」と象二郎は考へて、「君が聞いたことを、もすこし精しく話してくれ。」

「さうですか、それでは。」

健三郎は記憶のままに干城の云つたことを話した。象二郎はのびのびしてゐるやうな顔をしてそれを聞いてゐ

た。其のうちに健三郎の話は終つた。健三郎は九番してゐた。

「實に言語道斷ぢやありませんか。」

象二郎は微笑を見せた。

「板垣におこらすか。」

健三郎は象二郎が他事のやうに平然としてゐるのが物足りなかつた。

「あなたは、どうなされるつもりですか。」

「板垣に怒らせ、それがええ。」

「あなたは、何も云ひませんか。」

「俺が云はいても、板垣に怒らしや、十分ぢや、板垣を怒らせ。」

「さうですか。」

「參朝しちよるかも知れんが、ともかく板垣へ往てみよ。」

「無論ありますが、それでよろしうございますか。」

「それでええ。」

象二郎はあいそがいい顔をしてゐた。健三郎は象二郎が飽くまでも平然としてゐるので拍子ぬけがした。健三郎は其の氣もちを板垣によつてつくはなくてはをさまらなかつた。健三郎は重喜を伴れて象二郎に別れ、待たしてあつた人力車に乗つて板垣邸へ向つた。

「谷君、どうぞよ、大將は。」

「それよ、」

「ちくと、うへぢやあ、のうし、」

「うへぢやあ、板垣に怒らしや、よかろ、二人も三人も怒らんでも、板垣一人でよからう、のうし、」

「それよ、怒りきるきに、」

「つばけをつつウ吐いて、桌をとんと叩きたてて怒るぞよ、」

「それよ、やりきるぞよ、」

「なるほど、板垣に怒らすかは、ええのうし、」

「うへぞよ、」

「うへぢやあ、」

「さうでなうて、薩長が血眼になつてやつちよる横合から、飛びだして往て、政權を奉還さすと云ふやうなことはできんぞよ、」

「できんとも、うへぢやあ、駿河臺の大將は、なんと云うても役者が一枚上ぢやあ、のうし、」

「それや上ぢやあよ、」

「これで坂本が生きちよつて、駿河臺の大將と二人でやらすと、土佐はうんと勢力があつたらうが、のうし、」

「それこそ、龍に翅を添へたやうなものぞよ、」

「坂本が殺された日、おまんは醬油屋に往ちよつたは、のうし、」

「往ちよつたとも、」

「まつとをりよつたら、おまんもやられちよつた、のうし、」

「それやわからんとも、坂本と中岡が鶏を喫ていかんかと云うたけど、先輩の傍は氣づまりぢやし、情婦の處へ往く約束をしちよつたきに、菊屋の小僧と伴れだつて出たが、鶏よれや情婦の方がええきにのうし、」

「それや、ええとも、」

「情婦のおかげで命が助かつたかと思つと、あれや、やめられんきに、のうし、」

「それよ、」

二人は大聲を出して笑ひあつた。二人は二人乗の人力車に並んで腰をかけてゐた。其の人力車には前挽が一人ついてゐた。健三郎はまた暫く坂本龍馬と中岡慎太郎の遭難の日のことに就いて話した。坂本と中岡の二人が刺客の手に斃れたのは慶應三年十一月十五日のこと、場所は京都河原町の西側になつた酒や醬油などを賣つてゐる近江屋と云ふ家の二階であつた。其處は坂本が下宿して引越して往つたばかりの處であつた。其の日の夕方、健三郎が遊びに往つてみると、菊屋に宿つてゐた中岡も遊びに来てゐて、鶏で一ぱいやらうと云ふことになつたが、健三郎は女の處へ往きたいので、中岡の用使をしてゐる菊屋の小僧の峰吉と云ふのが鶏の肉を買ひに往くといつしよになつて外へ出たところで、其の後で刺客が来て二人は横死したのであつた。

七

人力車は外濠に添うて走り、やがて木挽町の板垣邸へ著いた。其の時板垣邸には二頭立の馬車が勢ひよく門外へ出ようとしてゐた。それは主人の退助が参朝しようとしてゐるところであつた。健三郎は門の外で人力車を止

めて飛び下りるなり、御者の方へ向いて両手をあげ、掌を前方へ向けて物を突きもどすやうな容子を試してみた。と馬がびたり停まつた。健三郎はそれを見ると急いで馬車の横へ往つた。馬車の中には退助が馬の不意に停まつたのを見て眼を睜つてゐた。

「板垣さん、板垣さん、」

健三郎の聲と同時に退助は馬車の扉を開けた。

「岡本君か、どうしたぞよ、」

「たいへんなことがあります、」

「なんぞよ、」

「守部草の陰謀をみつけました、まあおりてくれませんか、」

退助の眼がきらりと光つた。

「なに、谷がかよ、」

「さうですよ、守部草ですよ、」

健三郎は對手の顔の動きを注意してゐた。心に餘裕のある此の才人は、三分の悪戯心をもつて先輩に臨んでゐた。退助はもう腰をあげた。

「さうか、とにかくおりよう、」

退助はおりて御者に馬車を其のままにしておくやうに命じ、躍躍と體を運んで玄關の方へ引返すので、健三郎と重喜の二人は其の後から跟いて往つた。數人の食客とともに夫の參朝するのを送つて出て玄關に立つてゐた夫

人は、何事だらうと思つて不審した。

「どうかなされましたか、」

退助はめんどくささうに靴を脱いだ。

「うん、」

夫人は嵐のやうな感情を持つてゐる夫の氣もちをよくのみこんでゐた。夫人は夫の後に立つてゐる健三郎と重喜を愛想よく迎へた。

「いらつしやいませ、」

健三郎は軽くおじぎをした。

「朝からお邪魔をします、すこし板垣さんのお耳に入りたいことがあります、」

「さうですか、御苦勞さまでございます、さあ、どうぞ、」

夫人はそれから重喜の方を見て微笑を見せた。

「お歸りなさい、おつかれでございます、」

重喜は苦笑した。夫人はついと身を翻して玄關へあがつた退助の傍へ往つた。

「何處にいたませう、書齋にいたませうか、」

退助は頷づいて見せた。

「うん、」

夫人は退助に引添うて歩いたが、書齋の口へ往くと前へ出て襖を開けた。一行は靜に中へ入つて鼎座した。三

人の顔があふなり退助は健三郎に聞いた。

「谷が、どうした。」

「どうもかうもありますか、板垣さん、守部草は言語道断な奴ですよ、腹を切らせんといきませんよ。」

「なんだね。」

「昨日、谷君と前後して駿河臺へ往きますと、林さんが来てをつて、話してをるうちに、後藤さんと林さんは、柳橋へ往くと云ふきに、兩國まで馬車でいつしよに往て、わたしと谷君は、中村樓へ往たところで、隣室へ、守部草が井上と山縣とで来てをつて、わたし達のをることを知らんきに、土佐のことを輪に輪をかけて讒言しよりました、實に言語道断ですよ。」

退助はもう膝へおいた手に拳をこしらへてゐた。

「土佐のことを、井上と山縣に讒言しよつた、ど、どんなことを云ひよつた。」

「五臺山へ病院を建てたりして、くだらんことに金を費ふもんぢやきに、藩札を三百萬圓も刷つたが、後へ證據が残らんやうに、あなたと後藤さんとで、帳簿を焼いたとか、有ること無いことを云ひよりましたよ。」

退助は膝を叩いた。

「け、けしからん、そんな怪しからんことを谷が云ひよつたか、怪しからん。」

「去年の復讐ですよ、十八箇條のことを云うて、あなたと後藤さんが、老公を笠に被て、土佐の國政を左右してをると云ふやうな、聞いてをられんやうなことを云うてをりましたよ。」

「よし、そんなことを云うたか、よし、もう赦さん。」

「實に邪智奸佞の徒です、士大夫の風かみにおけん奴ですよ。」

「おけんとも、獅子身中の蟲ぢや、赦さん、が、それは確かかね。」

「確ですとも、婢が三人で来てをるが、井上さんと山縣さんは知つちよるが、もう一人の方は、一二度来たことはあるが知らんけん、二人に丁寧な物云ひをすると云ふきに、井上と山縣に執り入つちよる奴だらうと思つて、好奇に覗いてみると、守部草がやつちよるぢやありませんか。」

「よし、判つた、我輩と後藤を陥れるためぢや、赦さん、もつと精しくなつてくれたまへ。」

健三郎は退助の詞に従つて干城の云つたことを話したが、其の云ふことの一つ一つが如何にも干城が陰險で奸悪で、後藤と板垣を陥れるに日もこれ足らずとしてゐるやうであつた。しかし、干城は武人で儒者で、狷介ではあるが、苟もしないと云ふ廉潔の士であつて、藩の改革のことでも其處に一點の私心はなかつたが、性格として其の行ひに繊細な神経の動きがあつたので、後藤板垣の同志の眼には邪惡の小人として映つてゐた。それに退助の赫怒する容を見たいと云ふ健三郎の意識した詞つかひが、一層ことを大きくしていやがうへにも退助を怒らした。退助は炎のやうな息を吐いた。

「さうか、さうか、そんなことを云ひよつたか、怪しからん、不屈き千萬ぢや、」

口から飛沫が出さうに思はれた。健三郎は重喜との話柄を作るため、それに注意しながら對手になつた。

「さうですよ、不屈千萬、言語道断ですよ、腹を切らませう。」

「あんな奴は、切る腹も持つてをるまい、怪しからん奴ぢや、あんな奴を政府におくことは、善良なる政治を害うて、人民の怨府となることは判つてをる、それに土佐人としても恥ぢや、あんな奴は、一刻も早く葬らんとい

かん、君達は後藤へ此のことを知らしたか、」

「後藤さんの方が路が近いきに、知らして来ました、」

「後藤はどう云うた、」

「板垣に話してくれと云ひました、」

さすがの健三郎も象二郎の云つたとほりには云へなかつた。板垣に怒らすか。健三郎は其の詞を思ひ浮べて心に笑つた。

「さうか、ええとも、吾輩がやる、」

吾輩がやると云つて退助はちつと黙つた。それは燃えあがる感情をぐつと押へながら其の處置に就いて考へてゐるやうであつた。健三郎は重喜と眼を見あはした。

「よし、吾輩に考へがある」と云つて退助は思ひだしたやうに「谷は、それでは、まだをるか、土佐へ歸ることになつてをつたが、」

健三郎は干城が今日横濱へ往つて船に乗ると云つてゐたことを思ひだした。

「今日、横濱まで往くとか何とか云うてをりましたが、はつきり判りませざつたが、」

「さうか、しかし、歸つてもええ、證據人は君ぢやから、」

「さうです、わたしが證據人です、」

「さうぢや、」

板垣はさう云つて室の隅の机の前へ往つて、其處へ勢ひ込んで座るなり、傍の書架から半紙のやうな紙を取つ

て、それに向つて筆を走らしはじめた。健三郎と重喜は其のほうへ注意しながら黙りこくつて顔を見あはしてゐた。退助の鋭い聲が其處に聞えた。

「岡本君は參朝するぢやらう、」

健三郎も重喜も役所へ出なくてはならなかつた。

「さうですが、もし、なんなら休んでもよろしうございますが、」

「いや、往きたまへ、往て晩に集まつてもらう、話があるから、谷君は、山地と北村君達にさう云うて、今晚集

まつてもらうてくれたまへ、」

二人が前後して返事をした時、退助は筆をからりとおいて、洋服の衣兜を探り探り印形を出して押した。

「吾輩は、これから後藤の處へ往て、それから政府へ往て、三條さんに逢う、」

「さうですか、それでは晩にお眼にかかります、」

「それではいつしよに出よう、」

退助が出て往くので健三郎と重喜は跟いて出て、家人といつしよに退助の馬車の門を出るまで支關に立つてゐた。

八

太政官の正院に付屬した一室では、退助が太政大臣の三條實美とさし向つたところであつた。

「何か複雑な話ですか、」

實美は心配しながら緊張してゐる退助の顔を見た。實美は退助が正院に出るなり別室へ往つてくれと云はれた時から、其の顔色のただごとでないのを見てゐた。退助のきつと結んでゐた口元がばかりと開いた。

「複雑と云へば複雑ですが、政治むきのことになしに、私のことですが、」

「他でもありませんが、わたしは、政府の中に肩を並べるのを屑としない者がありますから、辞任したいと思ひまして、退助は片手を衣兜にやつて「葉の書類を取りだして前へ置いた」此處に辭表を用意してをりますが、」

實美は困つてしまつた。せつかく官制を改革して政府の基礎も固まりかけたところで、板垣に辭職せられては勢力の均衡を失して、亂階になるかもはかられなかつた。

「そ、それはいかん、板垣さん、そんなことをしては、たいへんぢや、」

「それに就いては、なんとも申しわけがありませんが、わたしも士人として、己を汚すやうな處にをることができませんから、やむを得ず、辭任いたしますから、どうか悪しからず御承知を願ひます、」

「それはいかん、板垣さん、流言蜚語がこんなに盛んで、世間が動揺してゐる際に、就任したばかりのあなたに辭任せられては、流言蜚語がますます盛になつて、ますます動揺します、」と云ひかけたが、其の原因を極めないうで、周章してゐる己のそそかしさに氣が注いだ。「とにかく、あなたが肩を並べることを屑としないと云ふ事情は、どんなことですか、あなたの氣のすむやうにしますから、話してください、」

「わたしの氣のすむやうになれば、一方を政府から放逐することになりますから、わたしが潔く辭任いたします、」退助の押へてゐる感情が忽ち燃えあがつた。實美は當惑した。

「とにかく、話してください、あなたにさう云ふやうにせられては、政府が困りますから、あなたと兩立しない人と云ふのは何人ですか、まづ其の人を話してください、」

「それでは申しますが、軍務局員の谷干城です、」

「ほう、谷君、谷君がどうかしましたか、」

「谷がわたしと後藤を陥れるために、あらゆる手段を弄してをります、それも單にわたしと後藤を陥れるならよいが、其のために藩の讒言をして、藩の面目を失はしめようとしてをります、言語道斷な奴です、」

退助の手は握りかためられて卓の上に並んだ。實美は謹嚴荷もしない干城が同志を賣るやうなことをするはずがないと思つた。

「しかし、谷君は君士人ぢやありませんか、」

退助の拳は卓の上に音を立てた。

「奸物です、邪智奸佞の徒です、」

實美は眼をばちくりさした。

「邪智奸佞、谷君がさうですか、それには確な證據でもありますか、」

拳はまた鳴つた。

「證據も證據、それには立派な證據人があります、」

「何人ですか、それは、」

「山縣君と井上君です、」

「山縣君と井上君、」

「さうです、山縣と井上に讒言してをりましたから、これほど確な證人はありますまい、」
讒言してをつたと云ふからには、讒言してゐたところを何人かが聞いたものであらう、實美は其の人は何人だらうと思つた。

「何人ですか、それを聞いたのは、」

板垣はまた卓をどんとやつた。

「岡本健三郎です、」

「ああ、岡本君ですか、何處でそれを聞いたでせう、」

「兩國の中村樓です、昨日の晝、岡本と谷重喜が中村樓へ飲みに行く、隣へ谷が井上君と山縣君と伴れだつて飲みに来てつて、わたしと後藤を中傷しよるところを、岡本がすつかり聞いて來ました、あないな小人と、わたしは肩を並べることができませんから、わたしが辭任します、」

岡本健三郎は大蔵大丞である。其の岡本が聞いたと云へば、いかげんな當て推量ではないだらうが、しかし、實美は君子人の谷がそんなことをするとは思へなかつた。

「まあ、待つてください、谷君がそんな怪しからんことを云つたとしたら、罪は谷君にあります、あなたが辭任することはない、まあ待つてください、實美はとにかく井上と山縣に聞いてみなくてはならんと思ひだした、」
「さうですか、それでは井上君と山縣君に聞いてもらひませう、昨日のことぢやから、覺えてをりませう、」

「それでは、ちよつと待つてください、」

實美は起つて出ていつた。退助は谷や佐佐木高行と策畫して、土佐派の勢力を分裂させようとするやうなことをしてゐる井上と山縣が、實美にどんな返事をするだらうと思つて、燃えてゐる感情を其の方へ向けてゐた。退助はほかのことは考へなかつた。そして、半時間も経つたところで登音がした。退助は實美がどんなことを聞いて來ただらうと思つて嘲を含んだ眼をあげた。退助は其處に二人の姿を見つけた。それは實美と西郷隆盛であつた。隆盛は退助の前へ來て實美と並んで腰をおろした。文政十年十二月七日、鹿兒島城下の加治屋町に生れた巨漢は、退助と仲がよかつた。退助は隆盛を迎へた。

「おお、これは、」

隆盛は豹の眼に微笑をたたへてゐた。

「今日は、艾をすゑたもんぢやから、遅なつたみやし、そんうへ、また門鑑の忘れち執いけやしやもんぢやすから、すつたい遅なしたい、」と厚ぼつたい兩肩を揺つて大きく笑つて、「今、三條さんに聞きもしたら、汝がすつた腹けちおいやつちゆから、井上さんにも山縣さんにも逢て、尋ねつみもしたら、確に谷さんが、土佐のこと云うたこと云うたいどん、それ小南さんを政府へ入れやしたもさんかと云うて、井上さんと山縣さんに、頼んぢやうち、去年土佐へ改革をやいやつて、汝と後藤さんに酷い目に逢はされたちゆ話ぢやしたが、べつと汝や後藤さんを、中傷しやいやな話ぢやこははんぢやしたちもさ、それに谷さんも、今日、横濱から土佐へもどいやつたもんんで、わたしまかしてくれやいたもし、」

「それはどうも、あなたに迷惑をかけてなんですが、これはわたしの立場の問題ぢやから、どうか聞きながして

もらひたいですが、」

「まあ、そげんこと云はず、わたしまかししやしたもんさんか、山縣さんから谷さんに、早よもどいやいたもしごと尺牘をやいもすで、もどいやしたら詮議をして、谷さんがやつばい中傷しておいやいよなふうなら、汝の氣のすんごつしもさ、」

本人がゐないとなれば證人になつても直に善悪を定めることはできなかつた。退助は不快であつたが、他ならぬ隆盛の云ふことでもあるから、其のうへやかましく云ふこともできなかつた。

「さうですか、」

「まあ、そげんこと云はず、わたしまかししやしたもんさんか、」

「それでは、今日は此のままにしておくことにしませう、」

九

うとうとしてゐた篤介は、はつきり眼が覺めたので、仰向けになつたまままで頸をもつたてゐるやうにして、鹽漬の眼のやうに赤ただれのした眼を枕頭の障子の方へやつた。微びて鼠色になつた障子に午後の冷たい陽が佗しくさしてゐた。

(もう二時か、)

五六日以来、足の向くままに飲み歩いて、體も足もどろどろに疲れた篤介は、木賃宿の眼に注ぐままに飛び込んで、混沌たる眠におちてゐたところであつた。

(よく寝えたぞ、)

篤介はひどく嬉しかつた。望んでゐたフランス留學の志望も達して、其の十一月には岩倉大使一行に隨つて出發することができるとなつてゐる壯い學徒の心もちも朗であつた。篤介は身のまはりに眼をやつた。袴を穿いたままの己の體は、石のやうに堅い、縮目の判らないやうに汚れた蒲團を敷いて、これも黄八丈まがひの木綿の汚い蒲團をかけて寝てゐるのであつた。

(これが特別室か、)

合宿のない室でゆつくり寝たいと思つた篤介は、其の室を選んで宿錢を拂つた時、水を持つて来ておけと云つて、定めの宿錢より幾何か多く出したことを思ひだした。篤介は氣が注いで枕頭を見た。枕頭には口の缺けた赤い土瓶に茶碗をそへて置いてあつた。

(水があるか、)

篤介はいきなり腹這ひになつて土瓶を執り、缺けた其の口から口うつしに飲んだ。水は酒に焼けてゐた咽喉をうるほして醍醐味以上のうまさであつた。

(これぢやあ、これぢやあ、)

篤介は思ふさま水を飲んで土瓶を置いたが、まだすこし物足りないのでもた土瓶を持つた。其の時隣の室で何かぶつぶつと小聲で云ふ聲が聞えた。篤介は耳をたてた。

「——これで、どだいができた、これから、はしらをたてる、——これが、とこばしら、——これがすみののはしら、」

其處には小さく小さく銭か何かの金剛の相觸れるやうな音がするのであつた。

「—これも、はしら、—これも、はしら、—これは、とこのはしら、—これは、ちがひだな、」

篤介は何をしてゐるだらうと思つて眼をやつた。其處には四枚の破れて穴の處どころ見える襦があつた。篤介はそつと起きて往つて其の一つの穴から覗いた。廣い室の疊が醬油色になつた室の此方へ寄つた方に、汚いどんつくを著た瘦せた老人がゐて、それが胡座をかいて座りながら、前に置いた量ばつた財布から天保銭や文久銭などを出して、それを疊半帖ぐらゐの處へ碁石を置くやうに置いてゐた。其の老人の右側には洗ひざらしの唐草のついた大きな包巾が置いてあつた。

「—これが、えんがは、—これが、えんがはのはしら、」

老人は隣とともに財布の中の銭を一枚一枚執つて置いた。篤介には其の意が判らなかつた。老人は口と手をやめなかつた。

「—これから、やねをふかんといかんぞ、やねをふくべい、」

老人は並べてある銭の頭の方へ置きだした。

「—これが、むなぎ、—これも、むなぎか、むなぎは、かねがかかる、—これもむなぎ、—これもむなぎ、さんじふさんげんだうのむなぎのせい、をなごになつて、こどもをうんだ、いへをたてるには、むなぎがかんじんぢや、—これも、むなぎか、」

篤介は老人が所持金で家を建てる氣もちをこしらへてゐることを知つた。

「—むなぎは、これでいいや、これから、かはらか、—これが、かはらか、—これもかはらか、—これ

も、かはら、—これも、かはら、—これも、かはら、」

篤介はをかしくなつたが、まさきかみたいので黙つてゐた。

「—いへは、これで、できた、—それから、あまど、しやうじ、ふすまがいる、—よし来た、それで、これが、あまど、—これも、あまど、—これも、あまど、—これは、しやうじ、—、これも、

しやうじ、—これも、しやうじ、—しやうじとあまどは、かすがおほいぞ、」

老人は銭を持つた手をちよと控へて、胡麻鹽の小さな櫛のつかつた頭をかき上げるやうにした。

「—それでは、これも、しやうじか、—これも、しやうじか、—これは、あまど、—も一つ、これも、あまど、—あまどは、これだけにして、これから、ふすまだが、まてよ、」

老人はまた銭を持つた手を控へた。

「—其の、ふすまのかみは、きんべうぶのやうな、かみで、それには、まつにつるの糸をかけたものもいいぞ、かめの糸もいい、めでたい糸でないといかん、—よし、それでは、めでたい糸のふすまにするとして、」

老人は銭をおきだした。

「—これをおくぞ、—これもおくぞ、—これもおくぞ、—きんのふすまは、ねがはる、—これもおくぞ、—これも、ふすま、—これも、ふすま、—まだこれも、ふすま、—ふすまは、これと、これから、たたみだ、が、たたみも、うんけんべりの糸をたたみだ、—それでは、これがたたみか、—これもたたみか、—これもたたみか、—これもついでにたたみにしよう、—これもたたみか、—おつと、もう、かねもなくなつたぞ、—」

老人は財布をさかさまにして、五つ六つ入つてゐた天保銭をひらつた。

「——これも、ついでに、いへにかけとけ、」と云つて、銭の並んでゐない處へかためておいて、「よし、これで、げんじふらうさまの、おやしきができあがつたぞ、りつばなふしんだ、」

篤介は老人が如何にも楽しさうであるから、笑つて其の空想をこはすやうな心ないことはできなかつた。篤介は數瞬もしないで老人のするのを見てゐた。老人はちよつと其の建築物をながめてゐたが、やがて黄ろくしなびたやうになつた兩頬に皮肉な笑ひを見せた。

「りつばなふしんだが、えどは、くわじが、おつかない、——それ、くわじだ、みつばんだ、おやとなりだ——ひのこが、とんできた、かぜがでた、」

老人は兩手を張つて銭の上をぎろぎろと見た。

「あぶない、あぶない、いへはあぶない、」

老人は不意に張つてゐた兩手を疊の上へおろして、銭をさらざらと振りよせた。

「いへは、あぶない、いへをたてることは、かねをもすやうなものだ、」

老人は前へ集めた銭を掴んで財布の中へ入れはじめた。

「やつぱり、かねでもつてをれや、やけることはない、いへはおつかない、かねでもつてをれや、やけることはない、」

篤介は老人の氣もちが判つた。篤介は老人の性癖がおもしろかつた。老人は間もなく銭を財布に入れてしまつて、それを懷の中へ入れて腹巻か何かにしまひ込んだ。篤介は老人がこれから何をするだらうと思つて好奇の眼

をはなさなかつた。老人は軽い疲勞をおぼえたでも云ふやうにしてぢつとしてゐるので、篤介は一度水を飲まうと思つて眼をはなさうとしたところで、老人の片手が動いて傍の包巾づつみへかかつた。篤介ははなさうとした眼をすえた。老人は包巾づつみを前へ引き寄せて其の結び目を解きにかかつた。篤介が何を入れてあるだらうと思ふまもなく、結び目が解けて中の物があらはれた。それは古い赤い衣をたくさん疊んで重ねたものであつた。其の衣には一つ一つ小紐が著いてゐたが、篤介は一眼見てそれが皆女の禪であることを知つた。

篤介は眼を睜つた。老人は禪の積みの中から一枚の禪を選びだして手にした。それは緋色のまだ變つてゐない縮緬の禪であつた。錢で空想の家を建てて楽しんでゐる此の老人は、また何をするのであらう、篤介は店頭に釣した壺の中へ入つて寝る老翁を見つけた費長房のやうな氣もちになつて見てゐた。

老人は手にした緋い縮緬の禪をさも懐しいもののやうにして見てゐるうちに、小さなくしゃくしゃしてゐる兩眼がちかちかと光を帯び、それがやがてとろりとするとともに、黄ろくしなびたやうに見えてゐた顔が心もち報くなつて來た。篤介は呼吸をこらしめてゐた。

老人のすることはますます奇怪であつた。篤介は持まへの開けすけの氣もちを執りもどした。篤介は襖を開けて老人を驚かしてやらうとした。篤介の手が襖の引手へかかつた時、一方の障子が開いてどかどかと入つて來たものがあつた。それは其處のお媽さんで、小肥満のした髪の濃い、富士額になつた額のあたりに脂のたまつてゐるやうな感じのする女であつた。篤介は女の容がものしいので、引手へかけた手を控へた。女は老人へ突つ

かかるやうにして進んだ。

「此の盗賊野郎、」

老人は彼の禪を持つたままで立ち縮んだやうに眼をきよときよとさした。

「どうも、をかしい、をかしいと思つてれや、さうなのなもの、おふざけでないよ、」

女は片手を出して物を受け執らうとするやうにした。老人は手にした物を隠すやうにした。

「な、な、なにも、乃公は、し、しや、しねえのだ、なにも、」

「なにもしないことがあるものか、わたしの禪をとつておぢやないか、およこし、」

老人は気が顛倒してゐるのか、きよときよとするのみであつた。女の一方の手は老人の襟がみにかかつた。

「此の盗賊、どうしてもよこさないのか、承知しないよ、」

老人は手にしたものを後にやつてゐた。

「お、乃公は、な、なにも、なにもしやしないのだ、乃公はきちやうめんな旅人だ、」

女は老人をこづきまはした。

「なに云つてやがるのだ、此の盗賊、盗んだ物を手持つて、なにもしやしないものだ、わたしの物だよ、わたしの物を盗んだことを忘れたのか、およこしよ、うす汚い、一昨日室へかけといたのに、無いものだから、蒲團の中へでも巻き込みやしないかと思つて、己達の蒲團から、客蒲團まですつかり出して見たのだよ、何時の間に盗みやがつた、よこしな、」

老人はそれでも禪を差し出すことができなかった。女は猛りたつた。

「よこさないの、此の盗賊、よこさなければや、來な、屯へ伴れてつて、屯の旦那から取つてもらう、來な、」

女は眼のくらんだやうになつてゐる老人を引き摺つて往かうとした。篤介は飛び込んで往つた。

「待て、待て、お嬢さん、僕が仲へはいる、」

女は振りかへつた。女の眼には炎があつた。

「なんですつて、」

篤介は老人の襟がみにやつてゐる女の手を除外せようとした。

「爺さんは、べつに、わるきがあつてやつたものぢやない、おほめに見てやつたら、どうぢや、」

女はつつかかつて來た。

「他の物を窃るのに、良い氣もないでせう、良い氣で盗賊する奴があるものですか、」

「それやさうぢや、良い氣で盗賊するものはないが、此の爺さんは、窃つてどうしようと言ふ、わるい考へはな

い、」

「悪い考へがなくつて、他の物を窃る奴があるものですか、窃つて賣るか、己の有にするか、だいち窃られたも

のは、困るぢやないかね、」

「それや、窃られちや困るが、此の爺さんは、なにもしやしないぢやないか、」

「なにもしないことがあるものかね、窃つて匿しといて、うすぎたなくつて、きみがわるいぢやないか、」

「それや、爺さんが、そつと持つて來たのは、わるいが、持つて來たところで、玩具にするくらゐぢやないか、

まあ、さう怒るまい、」

篤介は女の手へ己の手をかけた。老人はもう禪を下へ落してゐた。

「だめですよ、こんな奴、其のままにしとくと、癖になるから、ほうつといってくださいよ、屯へつきだすから、」
「まあ、まあ、お媽さん、僕だつて盗賊は嫌ひぢや、ぜんたい盗賊する奴があると、世間では、あれは、困つちよるからやつた、あれは、ちよつとした出来心でやつたと云ふが、困つても飢ゑ死んでも、せんものはせん、する奴は、皆、心のきたない奴ぢや、」

「さうですとも、盗賊する奴は、生れつきわるい奴ですよ、」

「さうさ、盗賊は生れつきぢやが、此の爺さんのは、性癖と云ふものぢや、まあ病氣ぢや、僕は此の爺さんが、家を作る眞似をして、うれしがつちよるところを覗いたが、それもやつぱり、病氣ぢや、」

女は篤介の話に耳を持つて来た。

「これが、ほんたうの盗賊なら、金でも衣服でも、手あたりしだいに窃るが、此の爺さんは、女の禪ばかり集めちよる、」

篤介が包巾の中の禪へ眼をやると女もいつしよに眼をやつた。

「世間には、盃ばかり集めて、違つた風がはりの盃があると、料亭のものでも、朋友の家のもので、手あたりしだいに持つて行くものがあるが、此の爺さんのすることも、やつぱりおんなぢやよ、」

女は篤介の詞に云ひくるめられた。女の手は老人の襟がみを放れた。

「そんなものかね、」

「さうとも、それに、他に數多禪があつても、他の奴はやらずに、お媽さんの禪ばかりやるのは、お媽さんが、

好きで好きでたまらんからぢやよ、」と篤介は笑つて小さくなつてゐる老人の顔を覗くやうにして、「なあ、爺さん、君はお媽さんが好きで、お媽さんにほれちよるぢやらう、」

女は苦笑した。

「ばか、ねえ、」と云つてから、「女の禪を集めるなんて、なんのためでせう、ばかばかしい、」

「それが病氣ぢや、病氣でなうても、好きな女のことになると、男は何をするか判つたものぢやない、女だつて

好きな男には、何をするか判らん、お媽さんも覺えがあるぢやらう、」

「そんなことがあるのですか、癪ばかしい、」

女はふきだしてしまつた。篤介も結喉を見せて笑つた。

「あるとも、あるとも、あるけれど、他が知らんだけよ、それにお媽さんは、どうしてもただの女ぢやない、」

「ばか、ねえ、わたしは、そんなものぢやないよ、わたしはこれでも、堅氣の生れだよ、男なんて云ふものは、

此方へかたづいて来るまで知らなかつたのですよ、」

女は辯解のやうに云つた。篤介は女の氣もちのかはるのを待つてゐた。

「どうだか、そいつは判らんが、お媽さんの云ふことぢやから、ほんたうとしておかう、其のかはり、此處は僕にまかしてくれるぢやらう、これから爺さんと一ぱい飲んで歸る、」

篤介は左の袂へ手をやつて何か握つて出して女の掌へ入れた。それは二分金の一つであつた。

「もう、これきりぢや、お媽さん、これで、酒を飲ましてくれ、酒は一二升飲むかも知れんが、着はどうでもええ、」

女は金を見て氣もちがすつかり癒つた。

「さう、これでお酒ね、ぢや、準備をして来るから、此の爺さんに、よくさう云つて、これからへんなことをしないやうに、汝さんから云ひきかしていただくさいよ、」

「それは、大丈夫ぢや、僕がきつと云ひ聞かしておくよ、」

「それぢや、準備をしますよ、」

一一

女は老人の持つてゐた舞をきみわるさうに撮んで執つて往つた。篤介は小さな體を老人の前へ落して胡座をかいた。

「おい、爺さん、君は、めうな道樂を持つちよるね、」

老人は小さな鬚の乗つかつた頭をさげておじぎをした。

「どうも、まことに、はや、面目しだいもございません、」

「なに、そんなことは、恥ぢるにおよばんことぢや、道樂ならしかたがない、雪隠の壁土を喫はんとゐられんと云ふ人もある、そんなことはかまんよ、」

「まことに、はや、なんとも、面目しだいもございません、あなたさまは、どうした方でございませう、ありがたうございます、」

「僕は土佐の諸生ぢや、そんなことは、どうでもええぢやないか、それより、君は、どう云ふ理で、そんなことをするやうになつたかね、参考のために聞きたいが、」

「それですか、それはべつに理と云ふほどのこともございませんが、わつしの妻が、男を、こしらへて逃げたものですから、ひとりぼつちになつて、彼方此方してゐるうちに、こんなことになりました、はい、まことに、なんとも、」

「さうか、性癖ぢや、西洋の學問には、それがあるが、どうもしかたのないことぢや、それぢや、君の細君は別嬪であつたと見えるね、」

「それや、かう申しぢや、なんです、わつしには過ぎてをりましたよ、」

「さうぢやらう、それにしても、そんなに思うてをる所天を棄てて、逃げるとは、けしからんね、」

「だまされましたよ、金時の房と云ふ、浪爺にだまされて、伴れ出されましたから、さだめて、女郎か歌妓に賣られてをりませう、生きてをれや四十三ですが、どうになりましたか、」

「さうか、どうせ、無頼漢に伴れ出されぢや、そんなことになるがおぢぢやらうが、それにしても怪しからん奴ぢやね、」

蒼ふくれのした婢が膳を持つて入つて來た。膳には銚子にそへて二つ三つの肴をつけてあつた。篤介はすぐ盃を持つた。

「まあ、酒ぢや、」

篤介は盃を老人の前へ出した。老人は手を觸れないで銚子を持つた。

「まあ、あなたから、」

「さうか、それぢやもらはうか、」と篤介はあつさり老人に酌をさして飲みながら、「それぢや、君は其の盃で、かつてに飲みたまへ、」

膳にはまだ一つの盃があつた。

「それでは、いただきます、」

老人は其の盃を執つて己で注いで口へ持つて往つた。篤介は老人へちらと眼をやつた。

「君は、酒が好きぢやね、」

「一合ぐらゐはいただけますが、獨りではいただきますせん、」

篤介は老人が錢を溜めて空想の家を作つて楽しんでゐることを思ひだした。

「溜める一方ぢやね、」

「ど、どういたしました、」

空になつた篤介の盃へ酒を注いでゐた老人は口をもぐもぐさした。

「さつき見ちよるが、僕は貸せと云はんから、大丈夫ぢやよ、君は、其の金で、ほんたうに家を建てたらどうかね、」

「江戸は、火事がありまして、チャンと云や、どんな立派な家でも、ひともしですから、」

「さう云や、さうぢやが、金があれば、己の家を建てるがええね、氣もちがちがふよ、」

「わつしの爺親は上方から来た俳優でしたが、口癖のやうに、己の家で死にたい死にたいと云つてましたが、たうとう家が出來ずに死んぢまひましたから、わつしは、どうかして家を作りたいと思ひましたが、旅藝人の一文

かせぎでは、とても出來ませんよ、」

「旅藝人と云ふと、どんなことをするかね、」

「茶番狂言をやつたり、こわいろをやつたり、なんでもやるのですよ、」

「今もさうかね、」

「今は兒の玩具を賣つてをります、」

「どんな玩具かね、」

「それは、」

老人は盃を置いて包巾づつみの禪の傍へ入れてあつた小さな木箱を出して、中から一つの玩具を出した。それは二寸ぐらゐある竹の圓みのある臺へ小さな土人形を乗つけたもので、それには一方に妻楊子ぐらゐの竹の棒を結びつけ、それをひつくりかへして裏の凹みにある膠へくつつけて置くと、竹の膠が棒から離れるとともに飛びあがつて恰も人形が心あつて飛んだり跳ねたりするやうに見えるのであつた。それは篤介も知つてゐた。

「飛んだり跳ねたりか、」

「さうですよ、」

篤介は老人の手から執つた。それは猿の人形であつた。篤介は竹の棒を膠にくつつけて傍へ置いた。

「何とか云つて、調子をとるね、」

「一つ長屋の佐次兵衛さん、四國をまはつて、猿になる、」

老人がさう云ひかけたところで、人形はぽんと跳ねあがつてついと落ちた。篤介は面白かつた。篤介は盃の酒

をくつと飲んで人形を執り、また竹の棒を膠にくつつけて置いて手をたたきたき調子をとつた。

「一つ長屋の佐次兵衛さん、四國をまはつて猿になる、か」と云ひかけたところで人形はもう跳ねあがつた。「飛んだり、跳ねたり、躍つたり、」

さつきの着ぶくれの婢が次の銚子を持つて来た。篤介は婢を見るとまた人形に膠をしかけて手をたたいた。

「一つ長屋の佐次兵衛さん、四國をまはつて猿になる、飛んだり、跳ねたり、躍つたり、」

人形は躍つたりに達しないうちに跳ねあがつた。婢は唇の厚い醜い顔に微笑した。

「どうぢや、別嬪、」

篤介は婢にあいそを云ひながら玩具を執つた。婢は銚子を膳の上においてそれに眼を持つて来た。

「それは、なんだね、」

「これか、これは、」と篤介は一方の手で空になつた盃を持つて「まあ、お酌をしてくれ、云ふぢやる、」

婢は銚子を持つて酌をした。

「わたしで、いいかね、」

「ええとも、上等ぢや、女が酌をせんと酒はうまうない、」と云つて一口飲んで老人の方へ眼をやつた。「なあ、爺さん、」

老人は顔をあげた。

「さうですとも、女にかぎりませよ、女の子の注いでくれた酒は、また格別でさあ、」

篤介は二度目の盃を婢の前へ出してゐた。

「それみろ、とうぢや、酒は女でないといかんぞ、」

婢はまた篤介に酌をした。

「そんなものかね、なぜだらう、」

「なぜはないさ、」篤介は笑つて老人の方を見て、「なあ、爺さん、」

「さうですとも、」

老人は盃を持つてゐた。篤介は氣が注いだ。

「爺さんにも注いでやれ、此の爺さんは、なかなか苦勞人ぢやから、面白い、どうぢや、君はまだ旦那がなから、此の爺さんに世話をしようか、」

「さう、ねえ、」

婢はとぼけたやうに云つて眼をそらしてゐる老人の横顔をぢろりと見、それから傍の荷物へ眼をやつた。荷物は何時の間にか包巾を結へてあつて婢は見えなかつた。篤介はそれに氣が注いだ。

「なに、さうねえ、おい、老翁ぢやと思つて癪にするな、此の爺さんは、持つちよるぞ、持つちよるぞ、」

それは金を持つてゐると云ふ意であつた。それを聞くと老人は本能的にとぎまぎした。

「じよ、じよ、じよだんだ、旦那はじよだんものだ、」

篤介はをかしかつた。

「見ちやある、見ちやある、さつき見ちやある、」と云つて婢を見て、「どうぢや、別嬪、ほんまで、僕が見ちやある、木賃宿の下女をするよれや、此の爺さんの細君になれ、金はあるし、それに可愛がつてくれるぞ、」

「さう。」

「さうぢやないよ、爺さんの細君になれ、此の爺さんはおもしろいぞ、」
「でも、あまりおもしろすぎてね、」

一一一

婢は意ありさうにやりと笑つてまた老人の横顔へ眼をやつた。篤介は眞面目な顔をした。

「君はまだ判らん、まだ苦勞がたらん、爺さんが、めうな癖を持つちよるから、君達は輕蔑しよるが、此の爺さんは、正直ぢや、正直ぢやから、めうなことをしよるが、人間は何人でも、癖を持つちよる、なくて七癖と云ふぢやないか、爺さんを笑ふ奴が阿房ぢや、」と云ひさして、氣が注いたやうに一方の手に持つてゐる玩具に眼をやつて、「これを、忘れちよつたぞ、」

篤介はまた棒を膠につけて疊の上へおいた。

「一つ長屋の佐次兵衛さん、四國をまはつて猿になる、飛んだり、跳ねたり、躍つたり、」
玩具は跳ねたりまで往つてぽんと跳ねあがつた。

「まあ、」

婢の心は玩具へ往つた。

「どうぢや、おもしろいぢやらう、これは、此の爺さんの作つたものぢやよ、どうぢや、爺さんは豪からう、」
「さう、此のお客さんがね、」

「作つたとも、作つて賣りよる、君も買へ、」

「買ひたいが、お錢がありませんよ、」

婢は空になつた方の銚子を持つて出て往つた。

「おい、爺さん、まつと飲まうぢやないか、」

篤介は盃の酒をぐつと飲みほして、それへ己で注ぎながら其の銚子を老人の方へ向けた。老人はあわてた。

「そ、それは、わたしが、お酌しなけれや、」

「まあ、いい、一つ注がう、」

老人はまだもじもじしてゐた。

「まあ、いい、注がう、」

篤介は老人の盃へ酒を注いでやつた。老人は恐縮した。

「旦那、かう申しぢや、なんですが、わたくしは、まだ旦那のやうな、お壯いに物の判つた方に、これまで一度だつて、お目にかかつたことがございません、旦那の御尊名をうかがひたうございますが、」

「なに、僕は名もない、一介の諸生ぢや、それも酒徒ぢや、」

篤介はまたがふりと酒を飲んで後へ注いだ。

「お酒はよろしうございます、お酒を飲まんものは、てんで話になりません、神様のえらいのは、お酒を飲むからでございますよ、神様には、きつとおみきをあげますから、」
篤介は老人の詞が面白かつた。

「なるほど、なるほどさうぢや、飲むからあげる、なるほどさうぢや、爺さん、うまいぞ、名言ぢや、」
婢がまた銚子を持って来たが、篤介はもう眼中になかった。

「うむ、面白い、篤介はまた勢ひよく飲んで其の盃を老人へさした。爺さん、なかなか話せる、一ばいやらう、」
老人はうれしかった。

「さうでございますか、それでは遠慮なくちやうだいいたします、」

篤介は老人に酌をしてやつた。老人は一口に飲んで篤介にかへした。

「ありがたうございました、旦那は、さつき土佐の謗生さんだとおつしやいましたが、土佐と申しますと、彼の山内様の方で、」

「さうぢや、山内ぢや、爺さん、土佐の御隠居を知つちよるか、」

「存じてをりますとも、兩國の大相撲に、女が見物に往けるやうになつたは、土佐の御隠居様が、乃公は、女を伴れて往かれないやうな處は、いやだとおつしやるものだから、年寄だちが相談して、女にも見物さすことにして、御隠居様に来ていただいたものです、今日、兩國の大相撲へ、女が往かれるやうになつたのは、土佐の御隠居様のおかげでございますよ、」

「ほんたうか、それは、」

「ほんたうですとも、わつしは、下足にをりましたから、演戯に出て来る殿様のやうな、立派な殿様が、柳橋の歌妓に執り巻かれて、見物にいらした時は、前代未聞でしたよ、」

「さうか、ほんたうか、そいつは初耳ぢや、」

「豪い、殿様でございますよ、御家来には後藤様、板垣様、福岡様、佐佐木様、英雄豪傑が雲のやうに揃つてをりまして、」

篤介は板垣に逢はなくてはならなかつた。

「さうぢや、其の英雄豪傑に逢はなくちやならんが、篤介は考へた。爺さん、此處は、いつたい何處ぢや、」

「此處は神保町でございますよ、」

「なるほど、さうか、」篤介は萬屋で飲んだことを思ひだした。「なるほど、萬屋で飲うだぞ、」

「旦那はこれから何處かへいらつしやるのですか、」

「板垣へ往かんといかんが、もう何時ぢや、」

「さあ、もう、申時でございます、」

「さうか、それぢや、もう出かけようか、爺さん、それぢや別れようか、」

「いらつしやるのですか、旦那、それぢや、わたしもいつしよに出かけませう、」

「君は何處へ行く、」

「わたしも、此處は氣もちがわるいから、河岸をかへます、」

「さうか、なるほど、それもよかる、新しい家へ往くか、それぢやいつしよに出ようか、」

「出ませう、お伴ませう、」

老人はもう起つて彼の包巾をやつとこさと首にかけ、其の傍にあつた筵の巻いたのを右の手に持ち、左の手に彼の玩具の入つてゐる木箱を持つた。篤介は盃を持つてゐた。

「爺さん氣が早いぞ、篤介は急いで飲んで、空になつた盃へまた銚子の酒を注いでぐつと飲み、」それぢや往かうか、」

篤介は盃をおいてひよいと起つた。

「爺さん、何處へ往くかね、君の往く家は、」

「まだ定つてませんが、これから一時、あきなひをしようと、何處か、そこいらへ、往かうと思つてますが、」

「あきなひ、あいつを賣るか、」と云つて篤介は、飛ばしてゐた玩具を思ひだして、「あれは、」

「其處にあるのですよ、旦那、」

篤介の眼の前に老人の指があつた。

「あつた、あつた、もらうてもええか、」

「どうか、もつてつておくんさい、」

「それぢや、もらつて往くぞ、」

篤介は疊の上にあつた彼の玩具を執つて、婢が開けてある障子の處から出て往くので、老人も後から跟いて往つた。

「一つ長屋の佐次兵衛さん、」

篤介は手にした玩具を見い見往つて、汚いぎいなる其處の階段をおりた。階段の下の夥計處にはお媽さんが座つてゐた。

「お媽さん、歸るぞ、爺さんもいつしよぢや、」

「もう、おかへりでございますか、またどうぞ、」

お媽さんは機械から出るやうな挨拶をした。篤介に引きそふやうにしておりた老人は、きまりわるさうに黙つておしぎをするなり、傍の下駄箱から禿び下駄を出しておりた。篤介も其の後から足駄を出して穿いた。

「毎度、どうも有りがたうございます、」

土間の隅の炊事場でちよきちよきと庖丁の音をさしてゐた男が聲をかけた。二人はそれを聞きながして巷へ出て、それから廣い街路へ出た。其處は裏神保町の街路で、冷たい夕陽を浴びて數多の人が往來してゐた。

「おい爺さん、飛んだり跳ねたりを、此處で賣つたらどうぢや、」

篤介は手にしてゐる玩具を通つてゐる人に見せたかつた。

「賣つてもいいのですよ、人出が多いから、」

「そんなら、賣れ、僕が口上を述べてやるぞ、」

「さうですか、それぢや、一つ店を出しませうか、」

老人は立ちどまつて四邊を見たが、直ぐ場所を見つけて指をさした。

「旦那、彼處がいいのです、」

其處は街路の右側になつた書肆の口であつた。

「よかる、彼の書肆の口か、」

「さうですよ、」

「ええ、彼處なら、ええ、」

二人は其處へ歩いて往つた。老人は直ぐ藪の巻いたのを解いて地べたへ敷き、其の端に包巾づつみと木箱を置いて、準備ができると木箱の中から玩具を出して十個ぐらゐる其上へ並べた。

「よし、出来たか、爺さん、やるぞい」

篤介が老人と並んで立つた時、もう三四人のものが立ちどまつた。篤介は手にしてゐる玩具を出した。

「諸君、これは西遊記の孫悟空から思ひついた玩具ぢや、孫悟空は一蹴ね跳ねると一萬八千里を飛ぶ、これはそれほどは飛べないが、其のかはり孫悟空よりは、飛び方が面白い、篤介は玩具の棒を膠にくつつけながら「しかし、これは、ただでは飛ばん、これを飛ばすには秘傳がある、諸君、其の秘傳を聞いてくれたまへ」

篤介は玩具を藪の上へおくなり、一つ長屋の佐次兵衛さんを唱へ唱へ手を叩いた。玩具はびよんと飛んでびよこりと落ちた。もう二十人ばかり集まつてゐた群衆かどよめいた。

「おい、中江君ぢやないかよ、なによしよるぞよ」

篤介は顔をあげた。篤介は其處に谷重喜を見つけた。

「やあ、谷君か」

一三

木挽町の板垣邸の近くにある高屋佐平の家へ、土佐の連中が五六人集まつてゐた。

板垣退助、岡本健三郎、島本仲道、河野敏鎌、それに其處の主人の佐平などであつた。此の佐平は退助の甥で兵部少丞であつた。

其の當時佐平の家は倶楽部のやうになつて土佐の連中が集まつてゐた。其の日も漫然と一人來二人來して集まつたものであるから、とりとめた話はなかつたが、議論好きの土佐人の中でも、わけて議論好きの人びとが集まつたから、例によつてかなり議論も出た。其のうちで一座を賑はしたのは、朝鮮問題であつた。朝鮮問題に次いで一座を賑はしたのは板垣と谷の確執の事件であつた。板垣と谷の事件は、山縣が責任上、谷を東京へ呼びもどして黒白を明にすると云ふことになつてゐるうへに、北村重頼と山地元治が、谷に不都合があると定れば切腹さすからと云つて板垣の辭表を控へさせてゐるところであつた。

其のうちに皆が話に飽いて來て、思ひ思ひに茶を喫んだり淡巴菰を喫んだりしだした。島本仲道が河野敏鎌に眼をつけた。

「河野君、二三日のうちに、僕の處へ來ないかね、碁を教へてやるが」

傲慢不遜、同人間におほへいな男として通つてゐる敏鎌は、例によつて不愛嬌な顔を見せた。

「往つてやつてもええが、僕はすこし體の具合がわるいから、熱海へ往きたいと思ひよるから、」

敏鎌は其の時司法省にゐた。退助は敏鎌の方を見た。

「河野君、熱海へ轉地療養に往くか、君が北奉公人町にゐた比は、腹が痛い」と云ふと、艾の粉と丹を飯粒でねりあはした赤だえんを飲むか、それで癒らにや、萬金丹を飲んだものぢやが、豪くなつたものぢや、」

敏鎌は苦笑した。高知城下の北奉公人町に生れ、武市瑞山の勤王同盟に加盟して參政吉田東洋の暗殺に策動し、文久元年、武市の一黨と共に藩の獄に下り、永久牢舎の宣告を受けて維新の際まで入獄してゐた豪傑も、それには閉口した。健三郎は其の容が如何にも面白かつた。

「河野君、どうぢや、一本まゐつたらう、」
敏鎌はまた苦笑した。

「うむ、」

仲道も面白かつた。

「さすがの河野君も、一言なしぢや、板垣さんも、なかなかやるよ、」

退助はどこまでも眞面目であつた。

「なに、そんなつもりぢやない、河野君が出世をして、昔と身分が代つたと云ふことを云うたまでぢやよ、」
健三郎は笑ひだした。

「板垣さんは、なかなか云ふ、眞面目な顔をしちよつて、やるから、しかし、ちつとやつてもええ、河野君は、やらにやあいかん、」

一座の者は皆聲を出して笑つた。敏鎌もしかたなしに笑つた。もう室には洋燈が點いてゐた。笑つてゐた者は其の洋燈の燈に氣が注いだ。退助は起つた。

「歸らう、もう燈が點いた、宍戸君、君は僕の家へ往かうぢやないか、」

宍戸直馬も退助に跟いて來てゐた。退助と直馬はいつしよに出た。外へ出ると退助が云つた。

「宍戸君、往こかよ、家を喫ても旨うないが、」

直馬はもとより厭でなかつた。

「往きませうか、」

「往かう、」

二人の足は木挽橋の方へ向つた。そして、二人がすこし歩いたところで後の方から聲がした。

「板垣さん、板垣さん、」

退助を呼んだものは谷重喜であつた。重喜は中江篤介と伴れだつてゐた。二人は微暗い中から顔を見せた。二人は神保町からいつしよになつて板垣邸へ來る途中で、退助の姿を認めたので追つて來たところであつた。

「中江君と二人か、ちようどよかつた、二人で飯を喫ひに往きよる、いつしよに往きたまへ、」

二人に異論のあるはずがなかつた。直馬が篤介の顔を覗くやうにした。

「中江君は、煩さうないかよ、」

篤介は笑ひ顔を見せた。

「煩さうても、交際ぢや、しかたがなかる、」

「云へる、これや云へるよ、」

直馬は冗談の中にも軒昂たる意氣の閃めきを見せた友人の詞がうれしかつた。其處に重喜の顔が浮いた。

「中江君は、とても云へる、」

四人は歩いてゐた。退助は右側を歩いてゐる直馬を見た。

「今日は、酒はなんぼでも飲ますが、あんまり悪戯んぞよ、」

退助は三人の悪戯者に騒ぎたてられてはかなはないと思つた。それに對して直馬が苦笑して何か云はうとしたところで、篤介の聲が聞えた。

「先生の邪魔はしませんよ、先生は彼の方ぢやから、」
重喜の肚の底を見せるやうな笑ひ聲が聞えた。

「さうぢや、さうぢや、中江君と宍戸君は、其の方に用事はない。」

一行は木橋を渡つた。橋の上には人力車が、威勢よく往きかうてゐた。一行は橋を渡つて濠端を往つた。柳の落葉が側の店から射した燈に虫の飛ぶやうに見えることがあつた。

「宍戸君、」

思ひだしたやうに重喜の直馬を呼ぶ聲がした。

「なんぞよ、」

「なんぞよち、中江君が、フランスへ往たら、何をするぢやらう、のうし。」

「さあ、それよ、あしも、フランスに繩暖簾があるらうかと思つて、心配しちやりよるが、今日は、何處でいつしよになつたぞよ、」

「其の今日よ、とても面白いことをやりよつたぞよ、」

「何處でよ、」

「神保町の大道で、彼の、それや、膠へ棒をひつつけちよいて、離れると飛ぶ、玩具かあらあ、のうし。」

「ある、ある、近比は、見んが、よくやりよつたぞよ、」

「さうかよ、それよ、それを、口上を云うて、やりよつたぞよ、」

「そんなことぢやらう、」

一行は何時の間にか新橋を渡つて、直ぐ近くの狹斜巷へ入つて往つた。三絃の音、謠の聲、某待合の癖の外では、一人の藝人が假聲をやつてゐた。

「おい、此處ぢや、此處でせう、板垣さん、」

前を歩いてゐた重喜は、假聲のゐた處から五六軒往つた右側の、格子戸の清潔な待合の門口へ立つて此方を揮りかへつた。板垣は重喜に頷づいて見せた。

「其處ぢやあ、」

其處は千歳と云ふ待合であつた。重喜がまづ入つて往つた。格子戸の音を聞きつけて婢が顔を出した。

「おい、今日は、大將を伴れて来たぞ、」

「おや、これはいらつしやいまし、」

婢は板垣の顔を見つけると、あたふたと裏へ入つて往つたが、入り違ふやうにして、でつぶり肥つた四十ぐらの女が出て来た。これは千歳のお媽さんであつた。輪廓のゆるやかな長手の顔をした女で、眉を剃つた痕がめうに眼にたつた。

「これは、板垣の御前様、ようこそ、」

退助は上へあがつた。直馬がもう冗談をはじめた。

「お媽、別嬪があるか、」

「どんな別嬪でもございますよ、まあ、どうぞお二階へ、」

其處に二階の階段があつた。お媽さんは退助を押したてるやうにして、二人で前へたつて其の階段をあがつて

往つた。そして、二人が階段をあがりつめた時、壯い女の奴かしい叫び聲がして、廊下の向ふからばたばたと走つて来たものがあつたが、あがつて来たものの影を認めたのかびたりと足を停めた。お媽さんがそれに眼をやつた。

「小清さん、どうしたの。」

其處には行燈の燈を受けて潰し島田の華美なお座敷著を著た壯い歌妓が立ちすくんでゐた。それはお多喜であつた。

「お客さんが、ふざけるのですもの。」

「あなたが、あんまりおとなしいからですよ、すこし、こつびどい目に逢はしておあげなさいよ。」

お媽さんは笑ひ笑ひ其の左側の室の襖をあけて入つた。退助の眼は瞬間、其の壯い妹な歌妓の顔へ貼いて動かなかつた。お多喜の小清はまぶしいやうにして眼をそらした。其の時後からあがつて来た直馬の聲がした。

「別嬪がをる、これや別嬪ぢやあ。」

退助は其の聲におびやかされたやうになつて室の中へ入つた。

「何處によ、別嬪が何處にをるぞよ。」

重喜は直馬の後からあがつて来た。直馬は顔を小清の方へやつた。

「此處にをる、とても別嬪ぞよ、洗魚落雁、羞花閉月、小野の小町か、楊貴妃か、どうせよ、眼をまはしなよ。」

重喜は困つて眼を伏せてゐる小清を見た。

「なるほど、これや、別嬪ぢや、美少年のやうぢや。」と云つてから「姐さん、姐さんの名は、なんと云ふぞよ。」

小清は名を云はないわけにゆかなかつた。

「小清と申します。」

「さうか、小清さんか、別嬪ぢや。」

篤介が其處へあがつて来た。

「これや、尤物ぢや、クレオパトラかナイト姫、おつとりした處は蘇小と云ふところぢや。」

一四

小清は身を翻へして引返した。

「逃げた、逃げた。」

「あんまり、皆がひやかすきに、困つた困つた。」

「あれが、日本の女子ぢや、しようがない、西洋諸國の女子のやうに、男女同權で、議論しあふやうにならんといかん。」

三人は室の中へ入つた。室の中には洋燈が點いて、中では退助が床柱を背にして脇息にもたれてゐた。直馬は退助の右横へ座つた。

「板垣さん、今、別嬪がをつたが見ましたか。」

重喜は退助の左横へ直馬と向きあふやうにして座つた。退助はお媽さんと何か云つてゐた。退助はちつと直馬を見た。



「見た、見た、」

「別嬪ぢやありませんか、」

「別嬪ぢやきに、聞きよるところぢや、」と云つて退助はお媽へ眼を注げ、「あれを呼ばうか、」
お媽さんは軽くあしらつた。

「すぐあくでせうから、其の時呼んでやつてくださいましよ、」

「すぐは呼べんか、」

「お客様に呼ばれてをりますから、」

退助の正面へ退助とさし向ふやうにして座つてゐた。篤介が口を挟んだ。

「お媽、もらうたら、どうぢや、」

お媽さんは篤介を見て、はじめて篤介のゐたことに氣が注いだやうにした。

「来たばかりですからね、それに平生最良になつてるお客様ですから、ちよつとね、」

「呼べなけれや、あいさつによこさしたらどうぢや、どんなお客様知らんが、此處へ呼ばれりや、名譽ぢやないか、呼べ呼べ、ぐずぐず云や、拳固ぢや、」

「まあ、亂暴、ねえ、そんなことを云つて、」と云つて退助の方を見て、「板垣の御前、あなたの諸生さんは困りますよ、」

退助は若輩といつしよに婦女子に執著するやうに思はれるのが氣はづかしくなつた。

「ええ、ええ、また今度ぢや、」

お媽さんは一度云ひ出したならそれを徹さずにおかない板垣が、あつさり出てくれたので安心した。お媽さんは篤介の方を見て笑つた。

「あなた、どう、板垣の御前の、おつしやつたことが、わかりますの、」

篤介はすましたものであつた。

「うむ、わかつた、わかつたきに、酒を持つて來い、」

お媽さんはえたいの知れない此の小男が面白くもあつた。

「まあ、」

「お媽、酒徒には磊砢がある、遅いと其の磊砢が脱けて、なんぼ飲んでも酔はん、早う持つて來い、其のかはり面白いものを見せちやる、」

篤介はさう云つて一方の袂を探つて何か出した。それは彼の飛んだり跳ねたりの玩具であつた。直馬がすぐ眼を注げた。

「それかよ、なるほど、」

「お媽に、ちつくと賄賂をせんといかんきに、これを見せちやる、」

篤介はもう竹の棒を膠にくつつけてゐた。

「それ、なんですの、」

お媽さんが眼を睜つた時、篤介は玩具を卓の上へおいて、例によつて一つ長屋の佐次兵衛さんを唱へた。そして、飛んだりまで云ふと玩具はぼんと跳ねあがつて落ちた。

「まあ。」

お嬢さんは笑つた。篤介は手早くそれを拾つて袂へ入れた。

「さあ、酒ぢや、大將は別嬪ぢや。」

お嬢さんは気が注いだ。お嬢さんは退助の方を見た。退助は婢の置いて往つた茶を喫んでゐた。

「それでは、彼の方を呼びませうか。」

退助はうなづいた。

「呼べ、谷君の奴も忘れな。」

「それや、もう、ちやんと心得てるのですよ。」

「それなら呼べ、酒も早く持つて來ちやれ。」

「承知しました。」

お嬢さんが出て往くと重喜が篤介の方を見た。

「中江君、君や、板垣さんに用事があると云ひよつたぢやないか、飲めやあ、もうええかよ。」

重喜は笑つた。篤介は何處までもすましたものであつた。

「用事は飲うちよいて、後でええ、わかつた話ぢやから。」

退助は茶碗を置いた。

「なにかね、中江君。」

篤介は板垣の顔色に注意した。

「すこし、お願ひしたいことがあります。」

「なにかね、どうぞろくなことぢやなからう。」

「つまらんことぢやありません、國家のことですよ。」

「ほう、國家のことぢや、國家のことは、なにかね、問題が太いが。」

「それや、太いですよ。」

「なにかね。」

「留學のことですが、とても、政府の手あてばかりぢや、たるまいと思ひまして。」

「酒を飲うで、放蕩すれやあ、たらんとも。」

「放蕩せえでもたりません、二三、留學する者に逢うて、聞きましたが、とても、政府の手あてではたらんきに、親類や先輩に、頼うでをるさうですが、わたしは、御承知のとほりですから、先輩にお願ひするより他に、お願ひするものはありません、ところで。」

「うむ。」

「これまで、先生にも後藤先生にも、時どき御厄介をかけてをりますから、お二人ばかりに御迷惑をかけてはすみませんから、先生と後藤先生にお願ひして、國家有用の人材を作るためですから、老公にお願ひしていただきたいと思ひまして。」

「おい、中江君、それや已のことよ、のうし。」

「どうですとも。」

退助は抑へた。

「待ち、中江君、ちつくと待ち、それや、あんまりひどからう、」
篤介はめうに生まじめな顔をした。

「それや、どうもすみません、なにかと云や、親や兄弟のやうに、一身上のことをお願いしてすみませんが、此の際、先生と後藤先生に、おすがりするより他に、おすがりする人がありませんきに、」

「それぢやない、其のことぢやない、」退助が抑へつけたのは、己のことを國家有用の材などと高言するがためであつた。「君が己を他のことのやうに云ふことぢや、」

重喜はにやにやして聞いてゐた。篤介は何處までも生まじめな顔であつた。

「それや、先生、僕が韓退之を學ぶは、よくないことですが、僕は獨力空拳ですから、しかたがありません、先生は徵士參與、高知藩の大參事、今は政府の參議として、天下諸生の羨望の的となつてをりますが、先生にしたところで、後藤先生にしたところで、名門の出であつて、生れながらにして、藩の大臣たるの資格がありまして、吉田東洋先生、殊に容堂老公の推挽がなければ、いや、それは二先生の、高邁にして偉大な器局の、」

「もうええ、もうええ、」退助はしらじらしく己のことを云はれるのがたまらなかつた。「もう、わかつた、わかつた、」

「それでは、僕の自薦をお許しくださいますか、」

「よし、よし、わかつた、わかつた、君に逢うたら負けぢや、なんとか後藤と相談しよう、」
篤介はびよこりと頭をさげた。

「どうもありがとうございました、」

重喜が笑ひだした。

「うへぢやあ、うへぢやあ、中江君はうへぢやあ、」

直馬が重喜にてうしをあはせた。其處へお嬢さんが婢に酒と肴を運ばして來た。直馬は笑ひ笑ひ云つた。

「國家有用の材に、早う飲ましてやつた、豪い國家有用の材ぢや、」

お嬢さんは退助に盃をさし肴を執つた。退助は酒よりも肴の方がよかつた。酒のいい三人の間には酒が次から次へとまはつた。退助は新しい肴に箸をつけた。

「これや青魚のたたきか、」と云つて退助は重喜を見て、「谷君、ちくとええぞよ、やつてみい、」

重喜は盃を持つてゐた。

「さうですか、青魚ははじめてぢやあが、重喜は箸を持つて己の前の手鹽皿に入れた、上つつらを燻べて魚軒のやうにしてある青魚のたたきを口にした。「なるほど、ええ、松魚ぢやなうても、青魚でも旨うございます、のうし、」

「さうぢや、」

松魚のたたきは土佐人の賞美する料理であつた。其の松魚のたたきには、かならず大蒜の芋をつけるのであつた。直馬はたたきの説明がしたかつた。

「板垣さんに、また憤られるが、たたきは、鹽をふらんと旨うない、焼くには鹽でないと、ばつと燃えあがらんきにいかん、」

退助は苦笑して聞いてゐた。友人でありながら先輩か何かのやうに云つて近づいて来る、たとへばすがりつかれてゐるやうな氣もちのする友人は懸然であつたが、其の饒舌には何時も困らされるのであつた。直馬はちよいちよい退助の方を見ながら、たたきの説明をつづけるのであつた。篤介が卒然聞いた。

「たたきと、なぜ云ふぞよ、小人ちゃん、」

直馬はちよつと困つた。

「さあ、焼いて、切る時に、酸をばたばたとたたきつけるきに、たたきと云ふぢやらうか、のうし、」
重喜が同意した。

「さうかも知れん、さうぢや、たたきつけるきにぢや、が、なんぞ、のうし、大蒜は臭い、のうし、」

「それよ、あれを喫て情婦の處へ往くと、まだ中へ入らんうちから、大蒜を喫て來ちよる、入りな入りなと云うて、きはれたぞよ、」

「それよ、美少年にも嫌はれたぞよ、」

其處へ五人ばかりの歌妓が入つて來た。

一五

小清は板垣の一行にひやかされて引返したが、客の眼がぶきみであるから室の中へすぐ入れなかつた。小清は室の外へそつと往つて立つた。室の中を走り出ながら周章して締めた際に、締めのこしてあつた襖が五寸ばかり開いて、明るい中の燈が漏れ、くんくんと云ふやうな鼻を鳴らす音がした。それは客が物を考へながら酒を飲む

時の癖であつた、小清は困つてしまつた。近くの室から三絃の音がしはじめた。小清はふと氣が注いだ。小清は開けかけの襖の口へ往つて中をのぞいた。客は銚子の酒を盃へ注いでゐた。小清は客にさうさすのがすまないやうに思つた。

「あさかさん、」

小清はお多喜の氣もちに歸つてゐた。横向きになつてゐた客の顔が此方を見た。客はまだ鬢を結うた四十前後の眉の濃い男であつた。

「小清か、あはうぢや、なう、」

「だつて、あなたが、ふざけるのですもの、」

「もうふざけん、入れ、」

「ほんたう、」

「ほんたうとも、」

「では、入りますから、ほんたうね、」

「ほんたうとも、」

「きつとね、」

「たいて、ねんがいるぞ、もうしやせんと云うたら、しやせん、」

「さう、小清は中へ入つて後を締めながら客へ笑顔を見せて、「ほんたうね、」

「ほんたうとも、」

小清は客の前へ往つて、座りながら銚子を持つた。

「今、さんさんひやかされたのですよ、」

客は盃の酒を飲んで酌をさした。

「何人にひやかされたのか、」

「お客さんよ、」

「知つた客か、」

「知らない方よ、だけど、あなたのやうな詞をつかふ方よ、」

「土佐人か、」

「さうでせうか、四五人でしたよ、姐さんの名は、なんと云ふぞよなんて、名を聞かれましたよ、」

「云うたか、」

「云はなけれや、わるいのよ、」

「さうか、其の土佐人は何人ぢやらう、」

「さあ、何人ですか、お嬢さんが、たいへんだいじにしましたから、御身分のおありになる方ぢやないでせうか、」

「へッ、」客は嘲けるやうな表情を見せて、「参議か、参議か、どうぜ、なりあがりものぢやらう、何人ぢや、名は聞かざつたか、」

「聞きませんでした、が、婢さんに伺つたら判るでせう、」

「判つたところで、藩の迷惑もかまはずに、國を飛びだして、はねまはつた奴が、うまく騒ぎあてて、要路へ喰ひこんだにすぎん、まあ木虱のやうなものぢや、」

客はまだ吐きつくすことのできない心の中にある礎に、苦しんでゐるやうに盃を持つて酒をあふつた。

「そんなに召しあがつてもいいこと、」

客は濃い眉を見せた。客の顔には自嘲があつた。

「酒はこんな時がうまいぞ、」

小清は己のしたことに客が怒つてゐるのではないかと思つた。小清は己に好意を持つてをつくれる客を憤らさなくてはならない己の境遇が淋しかった。お多喜としての小清には命にかへても己を守らなくてはならない械があつた。

「ほんとに、今晚は召しあがりすぎるぢやないこと、」

「さうでもない、」

客はさう云つてから小清の顔をぢつと見た。其の客の顔は蒼ざめたやうに見えた。婢が銚子を持つて入つて来た。

「ああさん、さつき小清さんをいぢめたつてね、」

客は驚いたやうにして婢の顔を見た。

「ああ、お梅か、」

婢は髪の毛の縮れた女であつた。婢は入口の方を背にして座つた。

「ああさん、さつき小清さんをいぢめたつてね、」

客は驚いたやうにして婢の顔を見た。

「ああ、お梅か、」

婢は髪の毛の縮れた女であつた。婢は入口の方を背にして座つた。

「ああさん、さつき小清さんをいぢめたつてね、」

客は驚いたやうにして婢の顔を見た。

「ああ、お梅か、」

婢は髪の毛の縮れた女であつた。婢は入口の方を背にして座つた。

「お梅かぢやありませんよ、」婢はあいそ憤りと云ふのをやつて、「あんまりお悪戯なされると、小清さんに嫌はれま
すよ、」と云つて小清の顔を見て「ねえ、小清さん、」

小清は淋しさに笑つた。客も其のばあひのきまりわるさを詞によつてつくらふことができなかった。客も淋
しさに笑つて習慣的にやつた手に盃がさはつたので、其のまま持つて口にしたが其の盃は空になつてゐた。小
清は氣が注いで酌をした。客はちつとして酌をしてもらつてゐるうちにふと思ひだしたことがあつた。

「おい、お梅、土佐の客があると云ふが、何人なら、」

「土佐のお客さん、板垣の御前よ、」

「なんだ、御前ぢや、」客は唾でも吐きだすやうに云つて、「あんな奴を、御前と云ふ奴があるか、」

客は安積彦太郎であつた。彦太郎の家は土佐藩のお馬廻で、板垣と同格であつたが、同輩から執りのこされて
ゐるものであつた。

「だつて、御前ぢやありませんか、豪い方ですもの、」

「さうか、豪いから御前と云ふか、さう云や、徴士、參與、今は參議で、後藤と肩を並べてをる、なるほど政府
の大官ぢや、彦太郎は嘲けるやうに云つて、「しかし、やつぱり木風ぢやぞ、」

「木風つて、なに、」

「木風か、木風た、木の風よ、木の中に喰ひ込む虫よ、」

「板垣の御前が、何故なの、」

「なりあがりもので、政府と云ふ木へ、喰ひ込んでをるからよ、」

「それぢや、あなたは、」

と云ひさして、云はうとしたことがぼんやりとなつたので詞を切つた。

「おい、云へ、それぢやあなたはが、どうなら、」

「云ひませうか、板垣さんが木風なら、あなたも小清さんに喰ひ込まうとして、男蟲ですか、」

男蟲は面白かつた。婢は人の云つたことのやうに聲をあげて笑ひながら、淋しうな笑ひを見せてゐる小清を
見た。彦太郎は眼を伏せて酒を飲んだ。婢は彦太郎が黙つてゐるのが物たりなかつた。

「どう、ああさん、」

「うむ、」

「なんとかおつしやいよ、」

小清は銚子を持つた。

「おあがりなさいましよ、」

小清はこじらした彦太郎の氣もちをなほす責任があると思つた。

「うむ、」

彦太郎は顔をあげて小清を見た。其の眼は充血してゐた。彦太郎は小清に酌をさして飲んだ盃を婢にさした。

「飲め、お梅、」

「くださるの、悪口のお禮、」

婢はさうして客を浮きたたせようとした。彦太郎は笑はなかつた。

「まあ、さうぢや、」

小清は其のばあひ其のままにしてはみられなかつた。

「お梅さんの姐さん、わたしにください、」

彦太郎からもらつて飲んだ盃を已にくれと云ふのであつた。婢は小清に酌をしてもらつて飲んでみた。

「あげるよ、」

婢の盃は小清へ往つた。彦太郎は酒に肩を擧げる小清が、已から盃を要求するのを珍しく思つた。

「珍しいぢやないか、」

一六

小清は彦太郎を見た。彦太郎は其處に女の優しい氣もちの動きを感じた。

「お梅、まあ飲ましてみよ、飲めるか、」

婢は銚子を持つてゐた。しかし、小清の酒の飲めないのを知つてゐる婢は躊躇した。

「ほんとにいいこと、小清さん、」

小清は莞とした。それはあでやかな笑ひであつた。

「一ぱいぐらゐは、飲めるわよ、」

「さう、豪いわ、ねえ、」

婢はひやかすやうに笑つて酌をした。彦太郎の顔にも笑ひがあつた。

「そいつは、豪いぞ、ぐつとやつてゐよ、」

「ええ、飲むわよ、」

小清は眼をつむるやうにして一息に飲んだ。

「豪いよ、ほんとに飲んだよ、」婢は室の中のこじれた空氣にゆるみの出て来たのを感じた。「ぢや、ああさんに、

それをあげなさいよ、わたし、銚子を持つて來ますから、」

「さう、」と云つて小清は其の盃を彦太郎へさした。「あげるのよ、」

「さうか、」

彦太郎が小清の手から盃を執つた時、婢は起つて出て往つた。彦太郎は盃を口にしながら小清の横顔を見た。

それは殊なよこしまのない顔であつた。

「小清、」

「は、」

「もう、悪戯はせんぞ、汝に嫌はれるから、」

小清はきまりわるさうにした。

「ほんたうだよ、もうせん、しやせん、」

彦太郎の詞は盟ひでもする時のやうであつた。

「そんなこと、かまはないのよ、」

「かまはんことは、あるまい、」

「かまはないのよ、かまひませんよ。」

「それでも、眼の色をかへて、飛びだしたぢやないか。」

「でも、それは。」

「それはが、どうした。」

彦太郎は笑ひかけたが、執情の迷るままに女を抱きすくめようとしたことが浮んで來るとともに、ふと其の笑ひが消えてしまった。小清はたゆたうた客の氣もちを見てとつた。

「おあがりなさいよ。」

「さうか、彦太郎は女のとりにしが喜しかつた。彦太郎の執著はまたしても動いた。」

「は。」

「おい、さう眞面目ぢや困るぞ。」

「お座敷がなれないものですから、へんなことになつて困るのですよ。」

「いや、さうぢやない、眞面目に越したことはないが、汝は、大家の婢のやうで、堅くるしいから、冗談も云へんことがある。」

「うちの姐さんにも、時ときそれを云はれるのですけど、べつに大家なんかにゐたことはないのですが、やつぱり性分ですうか。」

「さうかも判らんが、それはわるくはないが、ちよつと汝のやうに堅いと、冗談を云へんことがあつて困る、もうすこし陽氣になれ。」

「さうですよ、わたしも、他の歌妓さんたちのやうに、暢氣になりたいとつとめましても、それができないのですよ、どうしたらいいでせう。」

「生れつきならしかたがない、わしは、堅い眞面目な人間が好きで、とびあがりものの、でたらめを云ふ奴は嫌ひだが、どうも、さう汝のやうに堅く出られては、なにか云ひたくても云へない、もうすこし、陽氣になつたらどうぢや、わしは汝にいろいろ話したいことがある。」

話したいことはまたあれではないか。土佐のりつばな侍で、それもふんべつざかりの男から愛せられてゐることは、かうした境遇に身をおくものむしろ誇りとするところであるが小清は苦しかつた。

「は。」

困つたばあひにも不用意なばあひにも、小清は侍女のお多喜にかへるのであつた。

「さあ、それが堅い、彦太郎は盃をとつて口にやりながら、「それが堅いと云ふものぢや。」

小清は微笑より他に返事のしやうがなかつた。

「どうも、小清には、話しがしくうて困るが、小清。」

小清は銚子を持つた。

「まあ、お酌をいたしませう。」

「さうか。」

彦太郎は盃を持つて酒を注いでもらつたが、云はうとしたことを遮られたので氣もちがわるかつた。彦太郎は黙つて味のない酒を舌の上にくろがした。其の時新しい銚子を持つて來た婢は、室の外へ立つて襖の隙から中

を訝み見してゐる客の一人を見つけた。

「だあれ、そんなことをしてゐるのは、」

訝み見してゐた客は驚いたやうにして婢の方を揮りかへつた。それは安戸直馬であつた。

「廊下とんびなんかしちやいけないことよ、」

直馬は小清のある室を覗きに來て、安積彦太郎を見つけて眼を睜つてゐるところであつた。

「憤るな、憤るな、別嬪さんの醜かしよつたきに、覗きよつた、」

「だめですよ、そんなことをしちや、」

「まあ、さう憤るな、見たところで、べつに減るものぢやない、」

「だめですよ、そんな癡なことを云つたつて、だいち、此のお客さんに失禮ぢやありませんか、」

直馬は守舊派とも云ふべき彦太郎と親しくはなかつたが、それでも同じお馬廻で藩士としての交際があつた。

「まあ、さう云ふな、これや乃公の朋友ぢやあ、」

「さう、ほんたう、」

婢はほんたうにしなかつた。

「ほんたうとも、安積彦太郎ぢやないか、乃公の朋友ぢやあよ、」

客の名を知つてゐるうへに、同じやうな詞をつかふから、なるほど朋友かも知れないと思つた。

「さう、お朋友ですよ、」

さうなると直馬も、いきほひ彦太郎とものを云つて、朋友であると云ふ證を見せなくてはならなかつた。直馬

は襖をすざりと開けた。

「安積君、やりよるかよ、」

彦太郎はもう直馬の聲をききつけて入口の方を見てゐた。

「ああ、」

彦太郎はにがりきつてゐた。同格の家に生れながら板垣の幫間のやうになつてゐる此の柳下惠を輕蔑しきつてゐた。直馬は平氣で入つて往つた。

「安積君、大に悦ちよる、のうし、景氣はどうぞよ、」

彦太郎は直馬の云ふことの一つ一つが胸くそがわるかつた。

「まあ、座り、」

「飲ますかよ、」

直馬は何處までも平氣で彦太郎を左横にして座つた。彦太郎はしかたなしに盃を乾して直馬へさした。

「板垣の大前を執りまいちよるかよ、」

「大前は女はやれても、酒がやれんきに、酒の方は、あしが代りにやりよりやよ、」

一七

彦太郎は直馬の顔を見つめた。板垣の大前を執りまいちよるかよと云ふ、士人として黙つてゐられない誣辱の言を聞かされても、平然としてゐるばかりか、むしろそれを誇りとしてゐるやうな態度を見て、憤るよりは呆れ

た。

「突戸君、君の家は、お馬廻よ、のうし。」

「それよ、お馬廻よ、能なし猿よ、なんぞよ。」

直馬は小清の酌をしてくれた盃を旨さうに飲んだ。小清の傍には婢がゐた。

「なんぞよち、一つ君に聞きたいが、君の家もお馬廻、板垣の家もお馬廻で、同格よ、のうし。」

「それや、おまんくも同格よ。」

「さうよ、あしの家も同格よ、其の同格の家へ生れた者が、同じ同格の者を、君か主人のやうに、あがめたてまつつて、お鞆の塵を拂ふは、どうしたものぞよ、一つそれを聞きたいが。」

「それや、なんのことぞよ。」

「それが判らんかよ。」

「判らん、なんぞよ。」

「君は武士かよ。」

「文武の常職を解いたときに、もう武士はないぞよ。」と云つて彦太郎の後の床の間に置いた刀に眼をつけて、「まだ、庖丁を持つちよる、のうし。」

彦太郎は一方の拳で卓の上をとんと叩いた。

「癡、恥知らず、よくもよくもそんなことが云へたものぢや、己たちが立身出世するためには、藩も藩公も犠牲にして、顧みない、畜生のやうな奴といつしよにをりよると、そんな男になるか。」

「まあ、さう憤りな、憤りな、滄浪の水が濁りや、鯨でも捕るがええぢやないか、憤つたところではしまらんぞよ。」

「實になさけない、風上に置けん奴ぢや、君はなんと思うちよる。」

「なんとも思はんよ、あしは、酒を飲めやええ。」

「さうぢやらう、酒さへ飲ましてもらや、朋友を執りまいて、幫間の役をしてもええぢやらう、君と板垣は、朋友で、同格ぢやあよ、判つちよるかよ。」

「判つちよるとも、判つて、あしは板垣の門下になつちよる。」

「己の朋友の門下になる、呆れてものが云へんが、それで本氣か。」

「本氣とも、あしの爺親は、何時も、乾は同格で汝の朋友ぢやあが、あれや當世の英雄ぢやあ、とても汝などは脚下へもよれん、どんなことがあつても、乾の傍をはなれなと云はれちよる、あしは、何人がなんと云うてもかまん、板垣の傍をはなれんつもりぢや。」

「さうか、爺親の遺言か、へッ、あんな癡ぢや、なにが英雄ぢや、君の爺親は、豪い庭訓を遺したものぢや、へッ。」

「まあ、さう憤りな、と云つて直馬は笑つて小清を見て、「別嬪が心配する、こせいさんと云うた、のうし、別嬪の名は、」

小清は今にも二人が立ちまはりでもしさうに思つてはらはらしてゐた。小清は其の座の風雨を収めなくてはいけないと思つた。

「は、小清でございます、どうかちと御蟲貞に。」

彦太郎はちらと小清を見た。

「小清、蟲貞にしてもらひたけれや、板垣へ往てぢかに頼め、此の男は、板垣のおつきぢやから、蟲貞にしようと思つても、己ぢや出来んぞ。」

直馬は笑つた。

「これや、たまらん、たかでやれん、逃げう逃げう、直馬はひよいと起つて大聲に笑つてから、「安積君、怕いきに逃げるぞよ。」

直馬は其の室を出て一行のゐる室へ引返した。室の中では篤介が素裸になつたところであつた。

「どうなら、歌妓、僕の、此の肉體の、瘦せちよるが、筋肉が締つて、皮膚に弾力があつて、男性の力と云ふものを發揮しちよる、美、うつくしさが判るか」と云つて篤介は瘦せた體へ兩手をかけて、胸のあたりからはじめて下腹の方へ撫でさげ、「將來は、陰地に生えた冬瓜のやうに、ぶよぶよした奴は、いくら色が白うても、美人のうちへは入らんやうになるぞ、君達には判らんが、ギリシヤの彫刻は、此の人體美をあらはしたものぢや。」

歌妓だちは小ぼけな諸生の微汚い體を撫でまはして、其のうつくしさを誇るのがをかしくてたまらなかつた。

其の歌妓だちの笑ひあつてゐる傍には、板垣が苦い顔を見せてゐた。篤介はてうしに乗つてゐた。篤介は今度は兩腕をたがひちがひに撫でまはした。

「此の腕が見えるか、これは細いが、體につりあうて發達しちよる、女性は此の男性の人體美を見れば、とろとろとなり、男性は女性の人體美を見れば、とろとろとなる。」

直馬がずつと入つた。

「そんな、おまん、藝を三年も陰干にしたやうなものを見たち、とろとろするかよ。」

篤介は詞をふつつりと切つて仰向いて直馬を見た。

「穴戸の小父ちゃんか。」

「また唐人をはじめた、のうし。」

「人體美を解きよるところぢや。」

「人體美も鎮臺美もあるかよ。」

谷重喜が盃を控へた。

「穴戸君、待ち、中江君がうんちくを傾けちよる。」と云つて笑ひだして、「藝を三年も陰干にしたやうでも、云ふことはええきに、のうし。」

「さうかよ、其の言や可か、中江君は、云ふことは一人前ぢやあ。」

篤介は其の時、左の手で胸を二つぽんとたたいて、近くにある歌妓の顔を見た。

「おい、お勝、僕が盃をさすが、受けるか。」

それはもう四十に近い顔の小さな老妓であつた。老妓は對手になつた。

「いただきますよ、あんたの、にんたいびにとろとろしてるから。」

「さうか、ほんたうか。」

「いやに、だめを押すぢやないの。」

「ものごとは、いやしくもしてはならん、盃をさすには、さすで法式がある。」

「法式はぬきにして、盃だけくださいよ。」

「よし、さうか、いやと云ふな、篤介は其のまま仰向けにひつくりかへつて、両手の指で臍のまはりを撮んで凹みを作り、「お勝、これぢやあ、何人か酒を注げ、」

歌妓たちは歡聲をあげた。其の歡聲の中から老妓の聲がした。

「汚いよ、そんな盃。」

篤介はそれを抑へた。

「だから、だめを押しちやある、飲め。」

老妓は躊躇してゐたが、何か思ひつたのか傍にゐる壯い歌妓に耳うちした。壯い歌妓はうなづいて起つた。老妓はそれを見ると笑つて云つた。

「では、いただきますよ、何人かお酌をしてくださいよ。」

重喜の傍にゐた歌妓の一人が起つて来て、笑ひ笑ひ手にしてゐる銚子の酒を臍の凹みに注いだ。

「これでいいの。」

「ええ、ええ、さあ、お勝飲め。」

「いただきますよ。」

老妓は傍へにじり寄つた。

「わたしは、いただくが、あなたは返盃が飲めて。」

「飲めるきに、ささあ。」

「ほんたう。」

「ほんたうとも。」

「ぢや、いただきますよ。」

老妓は口を持つて往つて其の臍の凹みの酒を飲んだ。老妓はさうして一座の笑ひの中に座りなほした。其處へ老妓の命を受けて起つて往つた壯い歌妓が銚子を手にして来た。

「それぢや、返盃しますよ、きつと飲めて。」

「飲むとも。」

「さう、老妓は壯い歌妓の手から其の銚子をもらつて」では、返盃しますよ。」

一八

老妓はいきなり銚子を傾けて篤介の臍の凹みへどくどくと注いだ。其の酒のしたたりが臍の上にかかることも、篤介はあつと叫んで飛び起きさま、あわてふためいて臍あたりの痛みを拂ひのけるやうにした。篤介は老妓にはかられて煮たつた酒を注がれたのであつた。

「あつ、あつ、あつ、あつ。」

笑ひが其處に爆發した。篤介は苦笑して座つた。

「やられた、やられた。」

直馬が手を打つてはやしたてた。

「大出来、大出来、中江君、大出来ぢやあ、」

直馬が座らうとしたところで退助が起つた。退助の口元には苦笑があつた。お媽さんがそれを見て起つた。

「おしもでございますか、」

退助の眼が微妙に動いた。

「なに、」

「お媽さんは退助に引きそうた、」

「どうか、此方へ、」

「さうか、退助はそれから重喜の方を見た。『谷君、』

重喜は桌に凭りかかつてゐた。

「此處は、酒徒に任しておかうぢやないか、」

「さうですか、」

重喜が起つのをみると退助は歩いた。そして二人は、お媽さんに導かれて二階をおり、階下の離屋のやうになつた室へ往つた。其處には行燈の燈がほんのりと海棠のやうな光を見せてゐた。退助は室へ入るなり聞いた。

「おい、お媽、さきの歌妓ぢや、二階へあがつた時にをつた歌妓は、あれや、なんと云うたか、喃、」

重喜は女からはつきり名を聞いてゐた。

「あれや、小清と云ひますよ、」

「小清、さうか、小清と云うたか、喃、あれや何處だ、」

お媽さんはどうも女が眼にとまつてゐるやうだと思つた。

「金春新道ですよ、」

「どうだ、呼べないか、」

「今晚は、ね、まだ、さつきのお客さんがをりますから、」

「客はだれだ、」

退助は直馬から聞く暇がなかつたので知るはずがなかつた。

「土佐の方ですよ、」

「土佐、土佐のだれだ、」

「安積と云ふ方ですよ、」

「なに、あさか、」

「さうですよ、土佐ではりつばなお侍ですつて、本山さんが云つてましたよ、」

「本山つて、本山左近九郎か、」

「さうですよ、」

「ぢや、安積彦太郎ぢや、と云つて板垣は微笑を見せて、『同格よ、のうし、』

重喜はてうしをあはせた。

「さうです、ねえ、安積彦太郎ならお馬廻ですから、」

「俗論黨よ、のうし。」

「くさまん黨ですよ。」

「さうよ、退助は笑つてお嬢さんを見て、「お嬢、それぢや、小清と云ふ歌妓は、其の安積と關係があるか、」

お嬢は躊躇しなかつた。

「ありません、安積さんの方に、氣がありますが、小清さんの方で承知しませんから、」

「條件がむづかしいか、」

「べつに條件と云ふこともないでせうが、彼の妓はなかなかしつかりしてますから、將來の見込みのないやうな

ことはしないでせうよ。」

お嬢さんは、うすうす小清の素性は知つてゐたが、それとは云へなかつた。重喜が笑つた。

「あれは、いかんか、」

お嬢さんも笑つた。

「そいつは、ね、」

退助は其のお嬢さんの顔を見た。

「さうか、それでは、直ぐと云ふことには、いかん、嘯、」

「まだ、年がいかないものですからね、」

重喜はにやりとした。

「お嬢さん、年がいかいでも、ぢやないか、」

「それやあね、他の妓なら、」と云つてお嬢さんは抑へて、「彼の妓は、近ごろまで、何處か大家にあがつて、琴、三絃、茶の湯、挿花、なんでも、ひととほりできるのですから、看板を借りてるやうなもので、まるがかへでないから、他のものがなんとも云へないものですからね、」

「さうか、本人の意志しだいかな、なるほど、くどくに時間がかかるね、」

「さうですよ、だから氣ながくしなくちやいけないのですよ、」

「そんな悠長なことができるものか、」と云つて重喜は退助へ笑顔をやつて、「ねえ、板垣さん、兵は迅速をたつと

びますね、」

退助は頷づいた。

「さうとも、」

「あれぢやと、ひつ擔いで來ますが、ねえ、」

「それよ、後藤のやうにぶん撲つちよいて、やるが、嘯、」

お嬢さんには、はつきりした意は判らなかつた。

「それ、なんのことですの、」

「これかよ、」と重喜は笑つて、「これや、くだんの話よ、」

「くだんつて、なんなの、」

「くだんとは、よつて件のごしのくだんよ、」

「判らないわ、ねえ、」

「判つてたまるものか、判らんやうに云ひよるもの。」

二人の歌妓が入つて来たが、三人が顔をあはしてゐるのを見ると躊躇した。お媽さんがそれを見た。

「いいですよ、いらつしやいよ。」

二人は静に入つて来た。お媽さんは脊の高い顔のはればれとした歌妓へ眼を向けた。

「汝さん、旦那様を彼方へお伴して下さいよ、」お媽さんは重喜を見て、「もうくだんの話は、それにしといて、彼方へいらつしやいよ、」

「さうか、くだんの話は、それにしちよいて、奥方と彼方へ往くか、」

重喜は氣軽く起つて出かけた。退助が辭をかけた。

「谷君、いつしよぞよ、」

重喜はちよと揮りかへつた。

「よろしうございます、」

重喜は顔のはればれとした歌妓と伴だつて室を出て往つた。退助は傍へ座つた歌妓を見た。

「彼の連中は、やりよるか、喃、」

直馬と篤介のことを聞いてゐるのであつた。

「箸で拳を打つてをりますよ、りやん、三本、うめほん、」一方の手を後へやつて、掌に何か隠してゐるやうにして出しながら、「阿母と来い、」

歌妓は笑つた。それは土佐の拳の所作であつた。退助も笑つた。

「それをはじめたか、それをはじめたら、また寝やせん、困つた奴らあぢや、」

お媽さんが軽く口を入れた。

「寝ずの番でございませう、もうお寝みになつては、」

「さうぢや、喃、くだんの話は、今度にするか、」

「今度ゆつくりね、それがよろしうございますよ、」

「さうか、」

一九

退助が口をむすんだところで、襖の外で軽い物の音がした。お媽さんがきき耳をたてた。

「何人、」

同時に襖がぎぎぎと軋つて直馬が入つて来た。退助は煩ささうな顔をした。

「宏戸君、用事かね、」

退助は其のばあひ何人にも逢ひたくはなかつた。傍にゐるお媽さんにも歌妓にもゐてもらひたくはなかつた。

退助は獨りになつて充たされない心をおつとしてゐて充たしたかつた。直馬は何か大事件でもあるやうな顔をしながら、傍へ座つた。

「すこし、せひ、話したいことがあります、」

「さうか、不慮な朋友の詞をむげに斥けて、厭な氣もちを抱かすことも氣のどくであつた、」なんぞよ、」

「なんぞよち、板垣さん、えらい奴が来てをりますぞよ、」

「何人かね、」

「何人ち、中江が悪戯えよりましたきに、云ふ暇がありませんが、安積彦太郎が来てをりますぞよ、」

「安積のことなら、今、お嬢から聞いた、君は逢うたかね、」

「逢ひました、先刻、来た時、二階をあがつたところをつた、歌妓がありましたらう、彼の歌妓が何處にをるらうと思つて、尋りますと、安積の處にをりましたきに、入つて往くと、たぎりよりましたよ、」

「何か云ひよつたかね、」

「云ひよつただんか、僕は叱きすゑられましたよ、」

退助は微笑した。

「どう云うて叱かれたかね、」

「どう云うたち、やつぱり、己が立身のできん恨みですよ、それに守部草組ぢやきに、あなたと後藤さんのことが、續にさはつてたまりませぬ、」

「さうかね、どんなことを云ひよつたかね、」

「守部草のことは、口に出しませざつたが、なにしろ、あなたと後藤さんのことが、續にさはつてたまりませぬきに、わたし達まで叱きすゑられましたよ、」

さすがに、同格の家に生れながら板垣を主人のやうに尊敬するとは、武士にあるまじき所業であるといつて嘲けられたことは口に出さなかつた。

「さうか、そいつは面白かつたね、」と云ひかけて何か思ひだした退助は、「よし、すこし待ち、人がをつたらいかん、それからお嬢さんと歌妓の方へ顔をやつた。」ちよつと、はづしてくれ、話がある、」

お嬢さんと歌妓は直ぐ出て往つた。二人になると退助は顔を直馬の方へ出した。

「実戸君、密談があるが、」

直馬は不思議に思つた。

「なんでございますか、」

「其の、今の、安積の呼ぶぢよる女子よ、なんとか云うたね、」

「小清でございますか、」

「さうさう、小清ぢや、彼の女子を世話せんか、」

直馬の眼は輝いた。直馬が退助の左右に必要なのは覚ることであつた。

「よろしうございます、わけはありませんよ、」

「ところが、わけがあると云うよ、」

「どんなわけでございますか、」

「彼の女子は、まるがかへでないから、他の者が強ひて云うことができんと云うぞよ、」

「いや、なに、今の世に、あなたに可愛がられや、名譽ぢやありませんか、どうでもなりますよ、まるがかへでないきに、他の者が強ひて云へんとは、お嬢が云ひましたか、」

「さうぢや、」

「なに、そんなことはありませんよ、わたしが談判します。」

直馬は退助の傍を離れて室の外へ出た。直馬はお媽さんに逢ひに往くところであつた。廊下の曲りを曲つたところで婢の一人に行きあつた。それは安積の室を透し視してゐて叱られた婢であつた。

「おい、さつきの別嬪。」

「おや。」

婢は土瓶を益へ入れて持つてゐた。

「お媽は、何處にをる。」

「お媽さんは、影計處にゐるのですよ、御用。」

「ちつくと話がある、さうか。」

直馬は婢と別れて二階へあがる階段の横手になつた影計處へ往つた。其處にはお媽さんが退助の傍にゐた歌妓と長火鉢を挟んで話してゐた。歌妓はお媽さんの長羅宇の煙管で淡巴菰を喫んでゐた。

「おい、お媽、ちくと話があるが。」

お媽さんは微笑した。

「ちくと御用、それぢや、ちくと聞きませうよ。」

直馬は中へ入つて長火鉢の横手へ座つた。長火鉢の銅壺には銚子が浸けてあつた。

「ええものがある、お媽、話をするには、喉をしめさんといかん、一つ喉をしめしてからにする。」

直馬は片手を出して何かお媽さんからもらうとするやうな手つきをした。それは盃を要求するのであつた。

「おあがりになつて。」

お媽さんはさう云ひ云ひ傍の茶籠から盃をとつて直馬に渡した。

「飲むとも、ほけの出よる銚子を見て、飲まんは、別嬪に抱きつかれて、逃げるやうなものぢや。」

直馬は人の好ささうな笑ひを見せて、銅壺の銚子を執つて注いだ。

「なんでも酒と別嬪ね。」

「さうとも、英雄は色を好み、豪傑は酒を好む。」直馬は注いだ酒をぐつと飲んで、「そこで、其の英雄豪傑の話ぢや、ちくと秘密に話したいことがあるが。」

歌妓は其の時煙管の雁首を軽く火鉢の縁へ叩いて吹殻を落した。

「わたしがゐるぢや、ちくと邪魔になるの。」

女に往つてもらうにはいい機會であつた。直馬は其の機會をはづさなかつた。

「さうぢや、ちくと邪魔になる、他がをつてはいかん。」

「それぢや、わたし、御前の傍へまゐりますよ。」

「さうしてくれ、板垣さんが獨りぢや。」

「では、まゐりますよ。」

歌妓は出て往つた。お媽さんは直馬の盃へ酌をした。

「板垣の御前のこと。」

「わんざんま。」

「どんなこと、」

「どんなことち、それ、彼の安積の呼うぢよる歌妓ぢやが、何故、あれを板垣さんに世話をせんかね、」

「それがね、旦那、すこし、事情があるのですよ、それは、板垣の御前にも、谷の旦那にもちよつと、申しましたかね、」

「しかし、お嬢、どうかなるぢやないか、今日、板垣参議の鼻真になれやあ、歌妓としても名譽ぢやないか、なんとかならんか、なんとかなりさうなものぢやが、金のことなら、僕がどうでもするが、」

「板垣の御前の御身分なら、金はなんでもないでせうが、すこし、彼の妓は理由がありますから、」

「理由とは、どんな理由かね、安積とでも關係があるかね、」

「ありません、それは、わたしが保証します、安積さんの方には、氣があります、小清さんの方で承知しませんから、」

「それなら、どんな理由かね、それを云うてくれんか、」

お嬢さんは小清が金春新道の松葉屋から出るやうになつたのは、田之助との情事で有名なお國が介在してゐるうへに、客をとらないので興味を感じてゐた。

「理由ですか、」

直馬は其の理由をきはめなくてはならなかつた。

「さうぢや、其の理由ぢや、其の理由を聞きたい、」

しかし、お嬢さんも其の理由は知らなかつた。お嬢さんは困つた。

「箱屋町の相政假父の女さんのお國さんね、田之助の細君になつてゐるお國さんが口をきいて、まるかかへでなしに、分のやうにして出てゐるのですかね、どうしてもお客をとらないのですよ、」

「さあ、其のどうしてもお客をとらんことぢやが、なぜ客をとらんかね、それを聞きたいが、」

それは情夫があるか、一生藝ばかりでたつために客をとらないのか、そこはつきりしてゐなかつた。

「それがはつきり判らないのですよ、一生藝でたつてゆかうとするには、今から客をとつてはいけませんからね、」

好きな情夫があるかも判らないかと附けくはへたかつたが、それは口にしなかつた。

「それや、おたふくか、みつちやくちやで、客になる者がなけれや、藝でたんといくまいが、容貌がようて、客がなんぼでもあるなら客をとるがええぢやないか、それもただの客でない、立派な参議が客にならうと云ふに、」

厭と云ふことはあるまい、

「それやさうですとも、板垣の御前に可愛がられや、此のうへもないことですが、これまで一回も客をとつたことがないのですからね、」

「一つあたつてみてくれんか、」

「さうですね、」

「所天でもあると云ふなら、困るぢやらうが、さうでなけれやあ本人の名譽ぢやないか、なんぼ欲を知らんものでも、それくらゐのことは判るぢやらう、また所夫があつたところで、たかが歌妓になる女の所天ぢや、たいしたものぢやなからう、それよれや、板垣さんに氣に入られて、妾にでもしてもらや、一大出世ぢやないか、お嬢、」

お嬢さんは女の魂をみとめない僞父侍の詞にはあきたらなかつた。

「だが、旦那、人間は、女でも男でも、金や位にかへられないものがありますよ、あなただつて、厭な女は、殿様のお姫さんだつて厭でせう。」

「理窟を云やさうぢや。」

「だからさ、本人の腹を聞いてみたらうへでない、先方が御老中でも、太政大臣でも、厭なものはどうにもなりませんからね。」

「それやさうぢや、が、彼の女は、まだ板垣さんを知るまい。」

「それやあね、だから、これから板垣の御前が、ちよいちよいお呼びになつて、其のうへで、本人が、板垣の御前が厭でないやうなら、煮てたべやうと、焼いてたべやうと、御自由ぢやありませんか。」

「ぢや、今晚は駄目か。」

「それや駄目ですよ。」

「どうかなあ。」

直馬はわざとらしく歎息を見せた。階段をおりる數人の足音がした。お嬢さんがそれに耳をやつたところで、婢のお梅が顔を出した。

「ああさんが、お歸りですつて。」

「あう。」

お嬢さんは其のまま起つて婢の後から出て往つた。長い刀をさした安積彦太郎が玄關口へ立ち其の傍に小清が

蹲んで両手を突いてゐた。お嬢さんは愛嬌のある顔を見せた。

「もう、お歸りでございますか。」

「ああ、もうかへる、小清にきらはれるから。」

彦太郎は淋しさに笑つて沓脱の上にあつた下駄をはいた。

二〇

婢はすばしこくお入りて入口の障子を開けた。冷たい深更の風がもそりと動いた。

「寒いこと、婢は頸をすくめるやうにして、彦太郎を揮りかへつた。「籠か何か、如何、」

彦太郎は肩を揺つて歩いた。

「なに、歩く方がいい、氣もちがいい。」

「でも、寒いのですよ。」

お嬢さんが婢の詞を引きとつた。

「ほんとに、お風でもめすといけませんから、お籠か人力車かに、なすつては、」

彦太郎は敷居をまたがうとしてゐた。彦太郎は揮りかへつた。

「なに、酔がさめていい、ぶらぶら歩いて往く。」

お嬢さんはあいそ笑ひをした。

「そんなことをおつしやつて、また何處か、他へいらつしやるぢやありませんか。」と云つて婢の顔を見た。「ね

え、お梅、」

「さうですよ、ああさん、これで癖がわるいのですからね、小清さんに叱られますよ、」
彦太郎の顔に淋しい笑ひが見えた。

「小清には、始終叱られよる、彦太郎の眼は腫んでゐる小清の姿を探つた、なあ、小清、」

小清の白い顔がちりと見えた。小清は微かな笑ひをたてた。

「それや、小清が笑つたらう、それが叱りよると云ふ證據ぢや、叱られて、きはれて、俺もじゆつない、」
彦太郎はいくらか生じた笑ひ顔を見せておいて、其のまま外へ出て往つた。

「おや、もういらつしやるのですか、それぢや、またお近いうちにね、」

婢は彦太郎の後を追つて外へ出たが、ちよと間をおいて歸つて來た。玄關口にはお媽さんと小清が起つて笑ひ顔を見せあつてゐた。婢はあがつて二人に並んで立つた。

「ああさん、やつぱり酔つてますよ、」

お媽さんはもつともだと云ふやうな顔をした。

「さうだらうね、銚子がよつほどあがつてるのだから、」

「門を出るとよたよたしてましたよ、小清さんにきはれないやうに、うちにゐる時は、氣をはつてたのですよ、
ねえ小清さん、」

小清はまさかと云ふ返事を態度にあらはして笑つた。婢はお媽さんに笑ひかけた。

「ねえ、お媽さん、さうでせう、」

小清が皆の客から最上へせられて呼ばれることは、其處の繁昌することであつた。お媽さんはうれしかつた。

「さうさ、安積さんは、小清さんに首つたけなのだから、」

「ほんとに、傍で見ると、にくらしいほどですよ、」

「まあ、此の人は、やつかんでるよ、」

「だつて、さうなのですよ、でも、いい方ねえ、ああさん、」

「ほどがいいよ、ねえ、」

「さうですよ、土佐の兪父侍にしちや、珍しいのですよ、誰を唄うと云へば、しうらいしうらいか、よさこいか、
刀を揮りまはして怒鳴るか、拳を打つと云へば、漁師が喧嘩するやうな拳を打つたり、青樓も待合も區別のない
兪父の中で、ああさんだけは、鶏の中の鶴ですよ、」

其處に直馬の顔があつた。

「おい、別嬪、土佐の悪口を云ふは怪しからんぞ、」

婢がはつとして口をつぐんだところで、直馬の手が小清の一方の手首へ往つた。

「おい、安積ばかりにほれんと、ちくと來てくれ、」

小清は驚いた。

「あれ、」

お媽さんは眉を蹙めた。

「なにをなされるのですよ、あなた、」

直馬は笑つてゐた。

「なにもしやせん、安積をほめて、他の者の悪口を云ひよるきに、他にも良え男がをると云ふことを聞かしてやるつもりぢや、」小清の顔を覗きこんで、「おい、別嬪、土佐には、安積より良え男が、幾人もをるぞ、まあ、来てくれ、夥計處ぢや、」

夥計處ならお媽さんもをれば婢もをる、何も怕がるにはあたらなかつた。小清は氣もちがおちついた。「まゐりますよ、」

お媽さんは直馬の手を放させようとした。「お放しなさいよ、突戸さん、そんな手あらなことをなさらないでね、」

直馬はお媽さんの方を見た。

「男なら叩き切るが、女子は嘗めちやる、僕のやさしいことが判らんか、」笑つて軽く小清をひつばつて、「さあ、来い、僕が嘗めちやる、」

「ぢやあ、小清さん、いらつしやいよ、」

お媽さんに促されて小清は直馬のするがままになつて室の中へ入つた。二人の後からお媽さんと婢が入つた。中に入ると直馬は小清を放した。小清は脂ぎつた温ぬくした手の痕を拭ひたかつたが、それはできなかつた。直馬は火鉢の前へ座つた。

「おい、別嬪もざつてくれ、ちくと話がある、」

小清は躊躇してゐた。お媽さんが笑つた。

「小清さん、ちくとうかがひなさいよ、」

小清は座つて両手をきちんと膝へ重ねた。

「なかなか行儀がええ、歌妓のやうにない、安積彦太郎がほれるも無理はない、」直馬はまだ何か続けやうとしたが、氣が注いだやうにして、「そこでぢや、ちくと話をせんといかんが、君はさつき、僕達が二階へあがつた時、一ばん前につた人を知つちよるか、」

前にゐた人は板垣であると云ふことを婢の詞によつて知つてゐた。

「お梅姐さんから聞きました、」

「參議の板垣さんと云ふことをか、」

「やうでございます、」

「よし、それならええ、」

お媽さんは直馬がへんなことを云つて小清に厭な氣もちを興へては、ぶちこはしになると思つた。お媽さんが口を入れた。

「突戸さん、だめよ、女の子をくどくに、屯の旦那がおつしやるやうなことを云つちや、だめよ、」

直馬は笑ひだした。

「さうか、さうか、なるほど、こいつは、いかん、」

「さうですとも、」

婢が口を出した。

「だから、僮父には、女の子はくどけないわよ、」

「いんにや、法がある、其の法でくどけや、僮父でも、都會人でも、ころりと来る、僕が其の法でくどきや、君でも、小清さんでも、ころりと来て放れることがきんぞ、」

「そんなことがあるのですか、僮父の無伎虫に、そんなことができるのですか、」

「できたら、どうする、」

「できたら、」婢は笑ひ笑ひ右の指を左の眼の下へやつて、「此方の眼が、」と其の指を右の眼の下へやつて、「此方へ来て、」と云つて一つ鉤を押すやうな恰好をして、「此方の眼が此方へ来るよ、」と左の眼の下へ其の指を返した。

「此奴、」

直馬が冗談價を見せた時、婢の一人が入つて来た。お媽さんは銅壺の銚子に注意した。

「お媽さん、ちよつと来てくださいよ、板垣の御前がやんちやをおつしやるのですよ、」

「板垣の御前が、」

「さうですよ、ちよつと来てくださいよ、」

お媽さんは婢の云ふままに婢に跟いて室を出た。室を出るなりお媽さんは婢に聞いた。

「板垣の御前は、何をおつしやつてるの、」

「女なんかうるさいから、皆、彼方へ往けつて、おつしやるのですよ、」

お媽さんはさてはと思つたが、それは表面には現はさなかつた。

「急に女がおきらひになつたらうかね、」

お媽さんは笑つた。婢も笑ひ聲を出した。

「さうですよ、一人でたりないで、二人も三人も呼ばす時があるくせに、をかしいのですよ、」

「男つて、みんな、あんなものだよ、」

「ですけど、板垣の御前は、ずいぶんわがままですわね、」

「さうだよ、あんな方になると、己の思ふことは、なんでもできると思つてらつしやるのだから、まあね、地位があつて、金があつて、それで立派な男だと、たいていのことなら、思ひどほりになるにはなるかね、」

「さうですわ、ねえ、」

「それで、勝美さんは、どうしてるの、」

「泣いてますよ、これまであんなに可愛がられたものですからね、どうしたらいいでせう、」

「まあ、板垣の御前に伺つてからにしませうよ、板垣の御前は、一度かうと云ひだしたが最後、それをとほさずにはおかない方だからね、」

「さうですよ、ねえ、」

二人はもう退助のゐる室の前へ来てゐた。

「御免あそばせ、」

お媽さんが前にたつて入つて往つた。中には退助が行燈の傍に口を結んで座り、入口の右隅の暗い處に歌妓が崩れるやうに座つて膝で手巾を弄つてゐた。お媽さんは退助の傍へ往つて座つた。

「板垣の御前、どうあそばしましたの、」

二

退助はお媽さんの顔を見た。

「お媽か、」

「何かてまへの方に、ぶてうほうでも、」

「いや、さうぢやない、今晚は、人と物を云ふが煩さいから、皆に彼方へ往けと云ひよるところぢや、」

「でも、勝美さん一人ぐらゐ、ゐてもよろしうございませう、」

「いや、いかん、今晚はかへしてくれ、憤りもしちよりやせん、」

「さうですか、それぢや、またお氣もちのおよろしい時に、呼んでやつてくださいます、」

「さうぢや、また今度呼ぶ、今晚はかへしてくれ、今晚は煩さい、」

「では、今晚は、女の子がおきらひになりました、」

「うむ、」

退助は口もとに微笑を見せた。お媽さんは安心した。

「さやうでございませうか、ねえ、女の方でも、男が臭くて、顔を見るのも厭な時がございませうが、殿方もやつぱりさやうでございませうか、ねえ、」

「うむ、」

「それぢや、今晚は、勝美さんはかへしませうか、」

「さうしてくれ、」

「それでは、」

お媽さんは起つて歌妓の傍へ往つて何か其の耳へ囁いた。歌妓は頷づいて起ち、退助の前へ往つて顔を伏せた。

「どうもありがとうございました、」

「さうか、それでは、また今度ぢや、」

「どうかお願ひいたします、」

歌妓は淋しさに起つて出て往つたが、其の顔には手巾があつた。歌妓の後から婢が出て往つた。そして、婢の締めた襖の締つた時、微に微に女の泣く聲がした。退助はそれを聞いた。

「癡な奴ぢや、」

お媽さんは傍へ来て座つた。

「罪でございませうよ、あんなに御前を思つてをりますものを、」

「それよりお媽、彼の女子はどうなら、」

しかし、それは豫期しないことではなかつた。豫期しないことではないけれども、お媽さんはあんまりのわがままにあきれた。退助は顔を持つて來た。

「お媽、まだ安積はをるか、」

「いましたが、お歸りになりました、」

「女子は、どうなら、」

此の遅いのに女を呼んで席を新にせられてはかなはないと思つた。それも他の女を呼んでさわぐならまだしもであるが、客をとらないことが判つてゐる女を呼んで、何時までも埒のあかない交渉をさせられることはかなはなかつた。

「影計處にゐたやうでございますが、今晚は、もう遅いではございませんか、また此の次にあそばしては、」

「をるなら、呼ばうぢやないか、呼べ、お嬢、」

さうなれば呼ばないわけにゆかないが、できない交渉をさせられては困るのであつた。お嬢さんはだめをおす必要があつた。

「それぢや、ちよつとお酌をさすだけでございますよ、」

「ええとも、それでええ、」

「ほんとでございますよ、御前、彼のほうは、だめでございますよ、」

「ええとも、」

「ほんとでございますか、」

退助は苦笑した。

「いやに、だめをおすぢやないか、」

「だめをおしとかないと、御前は、直ぐ無理なことをおつしやいますから、」

「そんなに、吾輩に信用がないか、嘘、そんなことは云はんと、呼うで来い、」

「ほんとでございますね、無理なことはおつしやいませんね、よろしうございますね、」

「ぐどいぞ、ぐどいぞ、お嬢、男が云はんと云や云はんど、」

お嬢さんは笑つた。

「政府のことを隠梅なされる、人の龜鑑になられる方が、それほどにおつしやることでございますから、呼んでまゐりますが、ちよつとお待ちになつてくださいますし、勝美さんがまだゐるといけませんから、」

「さうか、」

お嬢さんは出て往つた。退助は思ひだしたやうに前にある菓子盆からカステラのやうな菓子を撮んで二つに割りながら其の一方を口にした。其處へお嬢さんを呼びに来た彼の婢が入つた來た。

「どうか此方へいらしてくださいませやうに、」

「さうか、何處なら、」

「直ぐ其處でございます、」

「さうか、」

退助は起つて婢に跟着いて往つた。婢は直ぐ隣になつた床の間附の廣い室へ案内した。其處には洋燈が暖に點いてゐた。

「突戸はどうした、」

「は、突戸さんは、影計處にゐらつしやいます、直ぐまゐります、」

婢がさう云つて起つて襖を開けたところへ、直馬が小清を伴れて入つて來た。

「小清女郎、かうおじやれ。」

直馬は狂言もどきに云つてきまりわるさうにしてゐる小清を眼でさし招きながら退助の前へ往つた。

「三拜九拜、七重の膝を八重に折つて、やつと御來臨を仰ぎました。」

「さうか、退助は鷹揚に云つて小清の方を見て、「来てくれたか、」

小清は恥かしさうに莞と笑ひながら退助の右横へ座つた。

「ありがたうございます。」

直馬は小清のあいさつの終るのを待つてゐた。

「今晚、此處へ來た時、君を見てから、どうしてもお酌をしてもらつて云うて、お待ちになつてをつたところぢや、氣もちよくお酌をしてくれ。」

小清はまた頭をさげた。

「それは、どうも、こんなふつつかものを。」

二人の婢が新らしく酒と肴を運んで來た。直馬は其の盃の一つを退助の前へおいた。

「さあ、別嬪、お酌ぢやあ。」

小清は莞と笑つて銚子を持つた。

「お酌をさしていただきます。」

「さうか、退助は盃を持つて酌をさしながら、「小清と云うた、喃。」

「は。」

「君は、何時から出ちよる。」

「やつと三月ぐらゐになります。」

「さうか、生れは何處ぢや。」

「京でございます。」

「親があるか。」

「ございません。」

「幾歳ぢや。」

「十八でございます。」

「さうか、十八、壯い、これからぢやあ、喃。」

「は。」

「なかなか、おとなしい、これから吾輩の席へ來てもらつて、賤しくない、生れがええぢやらう、なあ、実戸君。」

直馬は小清に酌してもらつて飲んでゐた。直馬はあわてて盃をおいた。

「さうですよ、舊家の生れですよ。」と云つて直馬は小清の方を見て、「別嬪は、ただの生れぢやなからう。」

「ただの、貧乏人の生れでございます。」

「そんなことはない、が、それを、さう云つて隠すところが、おくゆかしい、ねえ板垣さん。」

「さうぢや。」

お媽さんが入つて來た。お媽さんは退助の右側へ往つて微笑した。

「板垣の御前、何かおごつていただけませうね、」

「ええとも、おごるとも、」

「さあ、何をおごつていただきませう、」とわざとらしく考へて、「どうせおごつていただくからには、いいものがねえ、何かないかなあ、」

直馬が横あひから云つた。

「お媽、佐渡の土が、いつちええぞ、」

「なるほどね、佐渡の土だと、なんでもほしいものにかへられますからね、」

「さうとも、」

お媽さんは小清がぼつねんとしてゐるのに氣が注いた。

「小清さん、なにかやつたらどう、」

小清は顔をあげた。

「まづいのですもの、」

「まづいどころか、」と云つてお媽さんは退助の方を見て、「御前、小清さんは、清元がたいへん上手でございますよ、」

退助は小清の顔の動きに注意してゐた。

「さうか、一つ聞きたい、晴、」

「おやりなさいよ、小清さん、小唄でもいいよ、板垣の御前に聞いていただいたら、どう、」

お媽さんの聲がかかつたからには何かやらなくてはならないが、なんだか氣もちがこぼつて、唄ふやうな氣になれなかつた。さうして躊躇してゐる小清の耳へ其の時退助の聲が聞えて來た。

「今晚は、もう遅い、また今度にしよう、今度ゆつくり聞かしてもらふ、」

小清はほつとした。

「さうでございますわ、ねえ、今晚は、ねえ、」お媽さんはすぐ引きとつて、「御前があんなにおつしやるから、次がいいでせう、なるほど、もうおつつけ三更になりますからね、」

直馬が笑つた。

「おい、お媽、蚊いぶしをかけな、」

板垣は軽い氣もちになつてゐた。

「さうぢや、遅い、今晚は、もう歸るとせうかい、」

三三

お多喜の小清は己の家へ歸つて來た。松葉屋の了解を得てゐる小清は千歳の歸りが遅くなつたので、松葉屋へは寄らないで難波橋の袂から篋丁と別れて歸つたところであつた。

小清は篋丁から挑燈をもらつてゐた。其の晩は遅く出た月があつたが、時雨でも降りさうな空になつてゐるので巷の中は暗かつた。小清は挑燈の燈でお座敷著のままの身邊を照らしながら車井の傍を右へ折れて往つた。それは巷うちの共同井で葉の落ちた桐の木が其の屋根の上に怪物のやうに枝を張つてゐた。小清は夜遅く其處を通

るたびに不鬼魅でたまらなかつたが、其の晩は何とも思はなかつた。小清の心にはそんな悠長なことを考へる餘裕がなかつた。小清の心は混亂してゐた。小清は愛する男のために己の心に芽ばえて来る邪惡の芽を摘みとらななくてはならなかつた。

(なぜ、わたしは、こんなことを考へるだらう、ばかばかしい、わたしは、こんなけしからんことを考へることのできない身分ではないか)

小清は挑燈の燈を見た。小清は暗くなつてゐる己の心を挑燈の燈で明るくしようとするやうにした。

(なぜ、わたしは、こんなことを考へるだらう、わたしは龍吉さんと云ふ男より他に、男のことを考へることができないではないか、なぜ、わたしは、ああさんのことを、こんなに考へるだらう)

小清の眼の前にはぢりぢりと迫つて来る安積彦太郎の魂が動いてゐるやうに思はれた。小清は困つてしまつた。

(それは、板垣の御前と同格の土佐のりつばな侍で、人間としてもたのもしい人であらうが、それがなんだ、己には龍吉さんと云ふ天にも地にもかへられない人があるではないか)

小清は安積の魂を押しつけた。小清はやや軽い氣もちになつた。

(なんだ、たかがお客さんではないか、お客さんなら、板垣の御前でも、前野さんでも、本山さんでも、皆お客さんではないか、ゼンたい男と云ふものは、女を器械かなんかのやうに心えて、ろくなことをしないものだ、安積さんだつてさうだ、云ふことがすこし違つて、犬か猫かを取りあつかふやうにはしないにしても、所詮は女を玩具にするに云ふことにははりはないのだ)

小清は客に對して細かい感情を寄せることがばかしくなつて來た。小清はますます軽い氣もちになつた。

其處には三軒長屋の端になつた己の家があつた。

「ただ今」

中からは何の返事もなかつた。小清は挑燈をあげて雨戸のあはせ目を見つけ、それに一方の手をかけて開けようとした。

「もう寝たのですか、」

樞がおりてゐるのかがたりと鳴つたばかりで戸は開かなかつた。雨戸は日が暮れるなら何時も締めてあるが、樞は其のままにしてあるので小清は不審した。小清は挑燈の燈を背後へまはして雨戸の隙から中を注意した。中には行燈の燈が微に光つてゐた。それでは己の歸りが遅いのでもう寝たものだらうと思つた。小清は寝てゐる男を起すのがすまないやうに思つたが、何時までもさうしてゐられないので、思ひきつて片手で軽い拳をこしらへて、とん、とん、とんと三つばかり敲いた。

「起きてくださいよ、」

しかし、隣家の安眠を破つてはならないので大きな音はさせなかつた。

「寝たのですか、あなた、」

初めより聲も大きかつた。しかし、ほんたうに睡つてゐるのか何の音もしなかつた。寢床は右側の四疊半で其處は襪子窓になつてゐた。小清は其の方へ寄つて往つて竹と竹の間へ顔を入れて、龜裂のした雨戸の隙から覗いた。雨戸のうちには障子もあるがそれは煤けて穴だらけであるのを知つてゐる小清は、障子のことなどは念頭においてゐなかつた。行燈の弱よわしい一條の光の射した寢床の上に龍吉が座つて薄い衾をはをつてゐた。小清が

さうした龍吉の姿を認めた時、龍吉の大きな鼻が聞えて来た。小清はをかしくもあれば腹もたつた。

「まあ、」

龍吉の鼻はまた聞えて来た。それは、ぐうウ、ぐうウ、ぐうウと云ふ唸るやうな鼻で、龍吉が一生懸命になつてやつてゐる悪戯の聲であつた。

「もすこし、大きくおやりなさいよ、はつきり聞えないわよ、」

小清はさう云つて笑ひ聲を立てた。龍吉はびつたり鼻をやめて眼をきろきろさした。小清はをかしくてたまらなかつた。

「ばか、ねえ、」

龍吉ははをつてゐた鼻を放してまたきろきろと見た。人の好い龍吉の眼は鼠の眼のやうに光つたのであつた。

「まだ鼻がたりないわよ、もすこしおやりなさいよ、ばかばかしい、」

小清は隣のでまへもあるので何時までもそんなことをしてはゐられなかつた。それに風が身に沁るのであつた。

「開けてくださいよ、だめよ、そんなことをしたつて、」

それでも龍吉は眼をきろきろさすのみで起たなかつた。

「ぢれつたいわ、ねえ、早く開けてくださいよ、其處に座つてるぢやないの、鼻がとれちやつたぢやないの、」

龍吉はそれでも小清に見えるのが不思議でたまらないと云ふやうにして櫺子窓の方を見た。

「だめよ、ちやんと見えてるわよ、きよろきよろして、窓の方を見てるぢやないの、」

龍吉は苦笑して起つた。龍吉は小清の見てゐることをたしかめたのであつた。

「見えるのか、」

「見えるわよ、わたしの見てるのも知らないで、一生懸命に鼻をかく眞似をしてたぢやないの、」

「さうか、」

龍吉はずんずんと四疊半を出て往つたが、間もなく入口の戸をがたがたと開けた。小清は入口の簾下へ往つて挑燈をぶらりとさしながら立つてゐた。冷たい風が吹いて通つた。小清は思はず襟をすくめた。

「おう、寒、」

同時に雨戸ががらりと開いて龍吉が顔を見せた。

「見てたのか、」

「見たのですとも、ほんとに悪戯ねえ、」と云ふ詞の下から小清はすまなかつたと思つた。「でも、すまなかつたわね、おそくなつたものだから、」

「どつかへお客さんと往つてたかい、」

「往くものですか、宵から千歳でお酒のお對手よ、」

小清は土間へ入つて挑燈を消した。龍吉は手早く雨戸を締めた。

「やつぱり僧父か、」

「どうせ、新橋だから、薩摩や長州、土佐あたりの僧父待が来るのですよ、」

「今晚はどこだ、」

「今晚のは、小清はすぐ土佐と云ふことが云へなかつた。「へんな詞をつかふお客さんでしたよ、」

「何處だらうなあ、」

「土佐のお侍さんもあつたのですよ、彼の、それ、板垣さんと云ふ豪い方ね、参議とか何んとか、豪い官員さんね。」

二三

小清が板垣のことをむさうさに云ふことは、その陰にそつとしておきたいものがあるためであつた。小清にはつきりした意識はないが、またそれを隠さなくてはならない弱點もないが、それをはつきりとさすことを好まない氣もちが動いてゐた。小清はそれがみそかごとでもしてゐるやうで平氣であられなかつたが、心に陰翳のない龍吉には小清の氣もちの濁りなどは判らなかつた。

「板垣さんなら、後藤さんといつしよに、土佐の權臣ぢや、乃公は一度、後藤さんのお邸へ、おかみの御用で往つたことがあるのだ、」

「さうさう、なんとか云つたのですね、へんな諸生さんが酔ばらつて、あなたと角力をとつたのぢやないの、後藤さんの諸生さんと云ふのでしよ、」

「さうさ、中江つて云ふのだ、あれでなかなか學者だと云ふのだ、」

「さうですすかねえ、おかみとお八重さんの頼つべたを嘗めた時は、をかしかつたのですよ、」

二人は長火鉢を中にして何時の間にか座つてゐた。二人はあどけないお多喜と龍吉になつてゐた。

「なにしろ、へんなお邸さ、乃公は彼の時分、それ、おかみのおあがりになる蛇酒を買ひに往つて、蛇店で黄

領蛇に脚を嘗められるし、老女様には老女様で、妖氣が深いなんておどかされるし、いやなお邸だつたなあ、」

小清の眼が笑つた。

「それに、御後室様には嘗められるし、お八重さんにも嘗められるしね、」

「ばか、」

「ほんとぢやないの、ほんとにあなたは、徳なかたね、」

「なに云つてるのだ、」

「だつてさうぢやないの、御後室様とは演戲場へ往つて、かへりに山谷堀の船宿で、可愛がられたのぢやないの、」

「ばか、」

「なにがばかなの、御後室様には、まだお邸で可愛がられてるところを、お八重さんに見つかつて、たいへんなことになつたぢやないの、色男ねえ、」

龍吉は小清に云ひまくられて正直な男だけにしやくに觸つて來た。

「御後室様は、そんなつもりだつたかも知れねえが、乃公は知らねえや、それよれや、汝のはうはどうだい、お八重さんの眼を窺んで、おかみとへんなことをやつてたから、お八重さんに見つかつて、酷い目に逢はされたぢやないか、彼の時のことは、どうだい、おい、」

「そんなことないわよ、あれや、お八重さんのかんちがひよ、」

龍吉は小清の急處を衝いたと思つたので氣もちがよかつた。

「そんなことがあるものか、かんちがひで、そんなばかな目に逢はされて、黙つてる奴があるものか、何も手證

を見られないものなら、證明はどうでもたつちやねえか、それを黙つて撲られてゐるなんか、をかしいや、」
小清は龍吉の顔を見た。

「ほんとに、あなたは、それをほんとと思つてるの、」

龍吉はべつに其處に黒い影をおいてはゐなかつたが、詞のゆきがかかりでさうでないと言ふことができなかった。
「ほんとだから、ほんとと思つてるさ、なんだい、」

小清の眼がすわつた。

「あなたは、ほんとに、わたしをそんな女だと思つてるの、」

龍吉は面白かつた。

「思つたら、いけないかい、」

小清の聲は重おもしかつた。

「龍吉さん、」

「なんだい、」

龍吉は小清の詞を放ねとばすやうに云つた。

「龍吉さんは、わたしを、そんな女だと思つてるの、」

「思つてるのがわるいかい、」

「龍吉さん、あなたは、」

「あなたがなんだい、あなたがどうしたい、」

小清の歸りの遅いこともしやくに觸つてゐた龍吉は、胸がはればれとしたのであつた。小清はぢつと龍吉のうはつてうしな態度に眼を注げた。

「おい、何か云はないかい、云はないところをみると、ほんとだらう、どうだい、」

「ばか、ねえ、およしなさいよ、そんなこと、」

「なにが、そんなことなのだ、ほんとのことを云はれたから、云ふことができないだらう、」

「およしなさいよ、あなたが御後室様やお八重さんに、玩具になつたやうに、わたしや玩具になつてやしないのだから、御安心なさいよ、」

「ほ、ほ、乃公が玩具になつた、乃公は他の玩具になるやうな、そんな氣のきかねえ男ぢやねえや、」

「いくらあなたが、えらさうなことを云つたつて、ちやんと判つてるわよ、演戲茶坊へ往つたり、船宿へ往つたり、神明の待合茶坊へ往つた晩は、さんざお八重さんの室で、ふざけてたと云ふぢやないの、ちやんと見てた方があつたのだから、いくら隠したつてだめよ、」

小清の詞はしだいに熱を帯びて來た。龍吉はとほうもないことを云ふものだと言ふやうにして眼をくりくりとやつた。

「ば、ば、ばか、ばか、そんな、そんなことがあるものかい、それや、あの吉岡さんが、お八重さんの世話になりながら、お八重さんをばかにするものだから、乃公に吉岡さんの遊んでる處を探してくれと言ふのだから、乃公は吉岡さんの往つてる處をやつと探しあてて、それをお八重さんに知らしてやると、いつしよに往つてくれるつて云ふものだから、お八重さんの室からいつしよに往かうとしてると、お八重がいたづらしたのだよ、」

「間ふにおちずして、語るになにするつてね、それで判つたぢやないの、お八重さんに可愛がられたのでしょ。」
「ば、ばか、なに云つてるのだ、ただ、背後から来て抱きついたばかりなんだよ。」

「御馳走さま、ねえ。」

龍吉はふと氣が注いだ。己からよけいなことを云ふのは賢明なやりかたでないのであつた。龍吉は口をつぐんで苦笑した。小清は龍吉をからかふ口實を得たので痛快であつた。

「しよつちう、抱きついたり抱きつかれたり、お邸にゐる間は、そんなことばかりしてたのでしょ。」
「ばか。」

「お八重さんばかりでさへ、さうなのですもの、御後室様とは、たいへんだつたのでしょ、お八重さんは我がままものでも、おかみのお妾さんだから、憚るところがあるが、御後室様は、お金に不自由はないし、遠慮する人もないから、おほびらにできたのでしょ、彼の晩のことなんか、お庭で御後室様とそんなことをしてて、それをお八重さんに見つかつたからでしょ。」

「おつと待つたり、お氣の毒さま、あんなことになつたのは、おかみと汝が、とち狂つてて、それがへんなことになつたからぢやねえか、おい、己のことを棚へあげちやいけねえや、どうだい、おい、忘れたかい。」
小清は苦笑した。

「ばか、ねえ。」

二四

龍吉は小清を押へつけたと思つたので氣もちがよかつた。

「なにがばかなんだ、己のことを棚へあげやがつて、ふざけるない。」

「亂暴ねえ、そんな口のきき方をするのは、およしなさいよ。」

「汝が、己のことを棚へあげといて、ふざけたことを云ふからだよ、己がへんな眞似をしやがつて、それもちやんと證據のあがつてる、云ひわけのたたねえやうなことをやつてるくせに、それをごまかさうと思つて、他のありもしないことを云ひやがるからだよ、ふざけるない。」

「云ひわけのたたない證據つて、どんな證據なの。」

「證據。」

「さうですよ、其の證據を見せてくださいよ、何處にあるの。」

小清はむきになつてゐた。

「何處にあるものかい、此の乃公の。」と、龍吉は一方の手を胸へ觸れるやうにして、「此處にちゃんがあるのだい。」

「い。」

「それや、どんなものなの。」

「云つてやらうか。」

「云つてくださいよ、さあ、云つておくんないよ。」

チエツと龍吉は舌うちした。

「云つてくれなら、云つてやるわ。」

「云ひなさいよ、さ、早く云つてごらんさいよ。」

「云ふさ、云つてやるとも、それぢや云ふが、お邸で、お八重さんにこづきまはされたことは、あれやなんだい、云つてみる、まつ白晝、おかみとち狂つてたところを、お八重さんに見つかつたからぢやねえか。」

「それや、今云つたぢやないの、そんなこと。」

「今、云つたつて、さつき云つたつて、云つたか云はないかを云つてるのぢやねえ、したか、しねえかを云つてるのだ、どうだい、とち狂ひもなにもしないものが、いくらお八重さんだつて、雇人をこづきまはすものかい、のつびきならねえところをつかまつたらう、どうだ、返事ができるのか。」

「できるわよ、そんなばかばかしいことなんか、いくらでもできますよ、彼の時は、八幡屋さんの支配人さんがいらして、其の後で後始末に往くと、おかみが將棋をなされると云ふから、將棋盤をもつて来て、やつてるうちに、肩を揉めとおつしやるものだから、肩を揉んでると、おかみが、おふさけになるものだから、お八重さんがかちがひして、あんなことになつたのですよ。」

「かんちがひぢやねえ、とち狂つてたのだ、ただのふさげで、いくらなんでも、あんなに憤るものぢやない、お八重さんは、あれでなかなかさばけてるから、ただのふさげぐらゐで、あんなに憤るものかい。」

「憤るのですとも、かんちがひなら憤るわよ、喧嘩なんて、たいていかんちがひよ。」

「他のことは、かんちがひでも、あれやかんちがひぢやねえ。」

「ぢや、あなたが、お八重さんの室で、お八重さんとち狂つてたことも、お後室様とお庭で、とち狂つてたことも、皆ほんたうなの、ほんたう、ほんたうでせう。」

「ばか、ばか野郎、いくら汝が、乃公をへんなことの仲間に引き入れようとしたつて、さうはいけねえ、汝がへんなことをやつてるのは、乃公は皆知つてるのだ。」

「なにを、他に、わたしがやつてるの。」

「やつてるよ、今でも、汝は、やつてるぢやねえか。」

小清の眼が鋭く光つた。

「なんですつて、龍吉さん。」

「なんだい、」と云つたが龍吉は、小清のけんまくが氣になつた。「なんだ。」

小清は龍吉の顔を見たままであつた。龍吉は小清に威壓せられるのがしやくにさはつて來た。

「黙つてないで、云つたら、どうだい、云はねえのかい。」

小清の姝な紅い唇に顫へがあつた。

「わたしが、他で何をしてるのです、それを云つてください、それを聞きませう。」

出まかせに云つたことであるから、云へと云はれても云へるはずのものでない。龍吉は困つたが、其のばあひ

困つた顔をするのはしやくであつた。

「聞きたけれや、聞かしてやらあ。」

「聞かしてくださいよ、さ、早く聞かしてくださいよ。」

「聞かしてやるとも、聞かしてやるさ。」

「だから、早く云つてくださいよ、云つたらいいでせう、なにをわたしがやつてるのです。」

「なにをつて、なんでもぢやねえか、なんでもへんなことばかりやつてるぢやねえか、」

「そ、それぢや、わたしがお座敷へ出て、なにか後暗いことでもやつてると云ふのですか、」

「乃公あ、お座敷へ往つたことはねえから、後暗いことをやつてるか、後明いことをやつてるか、そいつは判らねえや、」

「判らなくつて、そんなことが云へるのですか、失らなれや、わたしがへんなことをするか、しないかが判らないぢやありませんか、」

小清は片手の端で長火鉢の縁を打つやうにした。小清は龍吉に嘗てなかつた憎しみを感じてゐた。龍吉も負けつゝゐるのが厭であつた。

「判らなくつて云へるかい、お座敷へ往つて見やしないが、汝が何をしてゐるか、それを乃公が知らないと思つてるのか、」

「そ、それぢや、わたしがお座敷でなにをしてゐるのです、」

「ろくでもねえことをやつてるのだ、ろくでもねえことを、乃公はちやんと知つてるのだ、」

「其のろくでもないことつて、なんです、」

「汝の心に問うたがいいだらう、それがいつち早いさ、」

小清の眼はつりあがつてゐた。

「いけない、あなたが、知つてると云ふから、あなたから聞きます、云つて下さい、さあ、早く云つて下さい、」と詰めよるやうな振勢を見せて「云へないですか、男が知つてると云つといて、それが云へないですか、あ

なたは男ですか、」

あなたは男ですかと云はれて龍吉はむしやうに腹が立つた。

「男だつたら、なんだい、」

「男なら、人間なら、畜生でなけれや、」

龍吉の右の拳が飛んだ。

「なにをツ、」

龍吉の右の拳は小清の左の耳に小さな音を立てた。同時に小清の體が起きあがつた。

「なにをなさるのです、あなたは、」

小清の白い手は長火鉢の上越しに龍吉の顔の方へ往つた。

「なにしやがるのだ、こいつ、」

龍吉はいきなり起つて絡はつて來た小清の手を拂ひのけた。小清の體はよろよろとなつて倒れた。

「ばか野郎、」

龍吉はたちはだかつたものの後の始末に困つた。小清は狂人のやうに起きあがつて來て武者ぶりついた。

「あ、な、たは、あ、な、たは、」

龍吉は揮りはらはうとしたが、離れないばかりか、其の兩手が體にからみついて來た。

「こ、此の、ばか、此の、」

小清の泣聲が聞えて來た。龍吉は困つてしまつた。

「此の、ばか、はなせ、はなさないか、」

二五

小清は離れなかつた。龍吉は威して屈伏させようとした。

「癡野郎、まだ放さねえのか、此のばか、」

それでも小清がしがみついて放さないで、龍吉はぐつと力を入れて、無理に右の手をもぎはなすなり、其の手で小清の頭を撲りつけた。其のへうしに釵が脱けて飛んだ。小清は唸るやうな泣き聲をたてながら口を龍吉の左の手の甲へ持つて来た。

「いた、た、た、あ、いつ、」

小清は龍吉の手の甲に齒をあてたのであつた。龍吉は噛まれて口惜しかつた。龍吉は全身の力を罩めて小清を突いた。小清はよろよろとよろめいて横倒れに倒れた。龍吉は飛びかかつて往つた。

「此の狂人、此のばか、くらひつきやがつたな、どうするか、みる、」

龍吉は小清の體に馬のりになつて、一方の手で小清の襟がみをつかみ、一方の手を揮りあげたところで、隣家の庖厨の扉ががたびと云ふ音をさして開く間もなく、此方の庖厨の扉をどんと破くものがあつた。

「龍さん、どうしたのだ、平生とちがつて、今晚はへんだが、龍さん、どうしたのだ、龍さん、」

それは壁一重の隣家に住む菊地と云ふ筆耕の老人であつた。龍吉は一日おいてゐる老人の聲を聞くとおろさうとした手を控へた。

「開けてくれないか、開けてくれ、まあ、さ、此處をちよつと開けてくれないか、」

己の家のことを心配して、遅いにもかかはらず来てくれるのであるから、其の厚意を無にすることはできなかつた。

「菊地さんですか、」

龍吉は小清から離れた。

「さうだよ、わしだよ、どうしたのだ、めうぢやないか、」

龍吉は庖厨口へおりた。

「なに、ちよつと、ふざけたことを云やがるものだから、」

がたびしやと云はして扉を開けると、小さな鬚に結うた瘦せた老人が入つて来た。

「ぜんたい、どうしたと云ふのだ、平生仲が好きに、ぜんたいどうしたのだ、」

老人はさう云ひ云ひ衝伏して嘸り泣きしてゐる小清の方を見た。龍吉は小清の齒の觸れた處へ指をやつてゐた。

「あんまり口が多いものだから、ひつぱたくと、くらひつくだすよ、」

老人はずんずんあがつて茶の間へ入つた。

「汝さんが、酷いことをしたからだらう、長屋中のものを羨ましがらせてゐたものが、ぜんたいどうしたと云ふのだ、あんまり仲が好きで、こんなことになつたのだらうが、あまり酷いことをしないがいい、」

龍吉は小清を隠すやうに小清を後にして老人と向きあつて座つた。

「あんまり、へらず口を叩くからですよ、女のくせにべらべら喋りやあがるから、わつしがぶんなぐると、かか

つてくるのですよ、こんなばかな女があるものですか、」

老人は押しとめた。

「まあ、まあ、さう云つてもいけねえ、所天の方が手あらかなことをすれや、女房だつてだまつてはゐない、後の彌八とはどうだ、媽がえらくつて、終始所天野郎をひつばたくうへに、舅をひつばたく、また所天野郎に飯を喫はさねえと云つて、飯櫃を高い處へおくぢやねえか、あんな女はうんと醜い目に逢はせてやつてもいいが、彌八があんな弱虫だからしかたがねえ、せんたい、此の比、女房殺しが流行らねえから、女房がえらくつてしかたがねえが、女は夫をもつて天とす、此の比、婦道の亂れたること何ぞ甚しきやぢやが、所天もいけねえことはいけねえ、」

龍吉はこれを遮つた。

「いや、菊地さん、女がいけねえのです、女がやくざです、わつしは、こんな女なんかもう追んだのです、」

「まつた、まつた、女房を去るには、古から七去と云つて、去るには去る法がある、」

龍吉は耳をたてた。

「法つてどんな法です、こんな女なんか叩きだすに、法もへつたくれもねえのでせう、」

老人は頭を揮つた。

「いや、ある、女房を去るには去る法がある、大戴禮の本命篇に、婦に七去あり、父母に順はざるをば去る、子なきをば去る、淫なるをば去る、妬をば去る、悪疾あるをば去る、多言なるをば去る、竊盜するをば去る、此の七つの法がある、だい一、父母に順はざるをば去ると云うて、汝さんは、両親がないさうだから、これや父母に

順はざるをば去るには、あてはまらない、だい二に子なきをば去ると云ふが、汝さん達は、まだ夫婦になつて間がないことだから、子があるやらないやら判らない、これからだ、五人できるか十人できるか、これやお媽さんが佳い女だから、出来ることは受けあひだ、だい三は、淫なるをば去る、これは中韓のことは云ふべからず、これはわしがなんとも云へないが、これや汝さんの胸にあることだ、だが汝さんのお媽さんは、行儀作法が正しくて、夫婦別あり、長幼序あり、且那の傍でじやらしやらないところをみると、賢婦人だ、そんなことはあてはまらない、今度はだい四だが、だい四は妬むをば去るぢやが、これも賢婦人のお媽さんだ、りんき嫉妬は女の謹むべきことだから、そんなことはしないだらう、わしは隣家にゐるが、まだ一度も汝さんのお媽さんが、りんき嫉妬をやつて、やきもち喧嘩をしたことを聞かない、それも本人の汝さんが知つてることだ、」

龍吉が口を挟んだ。龍吉は片手を心もちあげてみせた。

「ところで、菊地さん、まつておくんない、此奴は、やきもちでねえかも知らねえが、」と龍吉はちよと小清の方を揮りかへるやうにして、「此奴がけしからんことを云ふので、それからなんですがね、」

老人は首をかしげた。

「それぢや、なにか、そんなことがあつたのかね、なるほど汝さんは、好男子で、長屋中の女の子に騒がれるので、お媽さんがちよつびり、やくと云ふほどのこともねえが、巖石ぐらゐのところでびかりとやつたのか、」

龍吉の心がやはらいだ、清吉は莞とした。

「いや、そんなこともねえのですが、わつしが、前にゐたお邸のことを云ひだして、わつしをからかふものですか、こんなことになつたのです、」

「さうかね、さうするとやつぱり燈石だが、まあ、それぐらゐのことはいいだらう、汝さんもすこしは、やつたらうからね。」

「わつしは、そんなことはねえのです。」

「さうか、しかし、それもいい。それからぢや、」と老人は一箇所に気分を停滞さしてはいけなと思ひ出したので、「それから七去の、だい五ぢやが、だい五は、妬むをば去るの次だから、悪疾あるをば去るぢやが、お嬢さんに、癩瘡や楊梅瘡があると思へないから、これや話にならん、それからだい六だが、だい六は、多言なるをば去る、多言はおしやべりぢや、孫市とこの嬢のやうに、金棒を引いてまはることぢやが、これもお嬢さんには、あてはまらない。」

「いや、菊地さん、」と龍吉は口を入れて、「あてはまるのですよ、此奴は、其の多言のおしやべりなんですよ、だから、こんなことになつたのです、己がよいなことをべらべらと喋つといて、わつしにぶんなぐられると、くらひつくのですぞ、始末におへねえ奴なんです。」

老人は頭を揮つた。

「いや、それやわしが知つてる、お嬢さんはおとなしい、長屋中の女の龜鑑になる女ぢや、そんなことがあるものか、それや、わしが保証する、それや、汝さんが云ひがかりぢや。」

二六

云ひがかりと云はれて龍吉は面白くなかつた。菊地さんは長屋中の學者で深切な人であるけれども物がわから

ないと思つた。

「だめですよ、菊地さん、此奴は、見かけによらないがうつくばりですよ、他にはいい顔をしてるが、だめですよ。」

小清は何時の間には起きあがて俯向いてゐた。龍吉はちらと小清の方を見た。老人はまた頭を揮つた。

「いや、さうぢやない、汝さんのお嬢さんは、おとなしい、それと云ふのも、あまり仲がいいから、わがままが出るのだ、かう云つちやわるいが、此處のお嬢さんは、汝さんにはすぎた女だ、それをたくさんさうに、踏んだり蹴たりするのは、男冥利につきると云ふものだ、大事にしてやるがいい。」

龍吉は老人が女房を寶物あつかひにして、己を軽く見てゐるやうな口のきき方をするのが、ますます面白くなかつた。

「菊地さん、あなたは知らない、どうして此奴は、おとなしいやうな顔をして、何をたくらんでるか判らねえ奴ですよ、あんた達までごまかしてるのです。」

老人は老巧であつた。

「まあ、いい、後で氣もちがなほれや、判ることぢや、何も云はないがいい、云つてると詞のゆきがかりで、またへんなことになる、今晚のことは、わしが仲へ入る、もう何も云はないで、寝ようぢやないか。」と云つて小清の方へ向いて、「あんたも、もう何も云はないがいいよ、わしが仲へ入る、もう何も云はないで寝なさるがいい、西の風と女夫喧嘩は、日の入りかぎりと云ふことがある。一晩寝てしまや、すぐ仲が好くなるものだ、もう何も云はないがいいよ。」

小清はあるかないかの聲で老人の親切に感謝した。

「ありがたうございます。」

老人はそれを聞くと龍吉へ眼をやつた。

「いいかね、お媽さんも機嫌を直したから、汝さんも、もう何も云はないがいいよ、云つたらいけないよ。」

龍吉は面白くないが老人にくつてかかるわけにもいかなかった。

「ああ。」

「ほんとだらう、ね、もう云はないだらうね、だいち、寝しづまつてる時に、やかましく云つて、隣近所の眼をさましてもよろしくない、みつともない、おとなしくなるがいい、わしも、もう歸る。」

龍吉は老人に歸られるのがものたりなかつたが、ゐてくれとも云へなかつた。

「もう何も云はねえのです。」

「さうだ、さうだ、女夫喧嘩は、たとへにも、犬もくはないと云ふのだ、それに夜更けにみつともない。」

「どうもすみません。」

「よし、それぢや、わしも歸つて寝る、獨り者は、眼がさめると困るが、明日の仕事がある、無理にでも睡らなといかん」と老人は往きかけようとして小清に氣が注いだやうに、「それぢや、わしは往つて寝るから、早く寝なざるがいい、殊な衣服をめちやくちやしちや、商賣にもさしつかへるだらう、衣服も脱いで、きちんと疊んで寝なざるがいい。」

小清は顔をあげた。小清の顔は蒼くなつてゐた。

「ありがたうございます、御迷惑をかけて、すみませんでした。」

「なに、壯いうちはありがちのことぢや。」

「どうもすみませんでした。」

「それぢや、お寝み。」

老人は茶の間を出て庖厨の方へ往つた。小清はそれを見て起つて往つた。

「ありがたうございました。」

老人は足さきで履物を探り探り穿いて、とかとかと出てびしやりと後を閉めた。

「おや、月が見えるぞ、降らないですむのか、こいつはありがたいぞ、いや、まてよ、笠を着てる、月、畢に麗り、滂沱たらしむ、雨か。」

老人の空を見て云つてるやうな聲がした。龍吉は老人が例によつてちんぶんかんぶんの判らないことを云つてるなと思つた。龍吉がそれに耳をやつたところで、老人の聲が切れて續いて扉の締る音がした。龍吉は氣が注いで己の傍へ眼をやつた。其處に小清が蒼い顔を見せてゐた。龍吉はどきまきして其の眼を他へやつた。龍吉はきまりもわるければ不快も残つてゐた。龍吉はぢつとしてゐられないやうな氣がするので表の入口の方へ往つた。

そして土間の上框のところまで往つて、ちよつと土間へ眼をやつたところで、己の下駄が見つかったので、引きずりおろされるやうにおりて下駄を穿き、扉を開けて外へ出た。小清は何も云はなかつた。龍吉はそれが物たりなかつた。龍吉は獨りぼつちにされたやうに思つた。龍吉は物に拗戻るやうな氣もちになつて歩いた。外には

夜あけのやうな明るさがあつた。龍吉は見るともなしに、空を見た。空には蒸氣のやうな雲に包まれた月があつた。月はやるせない色に光つてゐた。龍吉はあてもなく巷を出て往つた。

龍吉は泣きたいやうな氣もちになつてゐた。龍吉は足にまかせて歩いた。歩いてゐるうちに小清の蒼い冷かな顔つきを思ひだした。龍吉は其處に不安を感じた。龍吉はつまらないことに腹をたてて小清と喧嘩したことを後悔するやうになつた。後悔するともにも小清が心配になつて來たので急いで引返した。その龍吉の脚下で犬が吠えだした。龍吉はびつくりして走つた。犬は優越を感じたやうに猛りたつて吠えた。龍吉は思いましかつた。龍吉はしかたなしに立ちどまつて、近ぢかと寄つて來た犬の口と思はれるあたりを力をきはめて蹴た。

「畜生！」

犬はきやんと叫んで逃げ走り、遠くへ往つて吠えだしたが、懲りたと見えてもう傍へは來なかつた。龍吉は淋しい氣もちになつて歩いた。龍吉は車井の傍を歩いてゐた。

「おい、龍さんぢやねえか、何處へ往つてたのだ！」

それは菊地老人であつた。老人は龍吉の家の表扉が開いて何人か出て往つたので、また何かはじめたではないかと思つて、起きて來て小清から龍吉の出て往つたことを聞き、探しに來たところであつた。

「ちよつと、其處いらまで往つて來たのです！」

「さうかね、それぢやいいが、お嬢さんも心配してゐるから、入つて寝たらどうだね！」

「どうもすみません、くしやくしやするものですから、ちよと歩いて來たのですが、これから寝ます！」

「それがいい、それから、決してもう何も云つてはいけないよ！」

「もう云ひません！」

「それがいい、わしは氣になつて見に來たところだ！」

「どうもすみません！」

龍吉はちよと頭をさげた。

「それぢや、早く寝るがいい！」

「すみません！」

二人は伴れだつて歩いた。老人の家の前まで往くと老人は別れて家へ入つた。

「それぢや、お寝み！」

「お寝みなさい、すみません！」

龍吉はそれから己の家へ入つて扉を締めて上へあがつた。茶の間には小清が襟に頤をうづめて座つてゐた。龍吉はきまりがわるいので何も云はないで、其のまま寢床の方へ往つて己の寢床の上へ横になつた。そして、小清の氣配を待つてゐたが、小清は寂寞として何の音もさせなかつた。龍吉は寢がへりをして、そして小さな吐息をついた。

二七

遣外便節の一行は太平洋汽船會社のアメリカ號へ乗らうとしてゐた。それは明治四年十一月十二日のことであつた。十日に東京を出發して横濱に來、十一日は裁判所で在留の各國公使及び書記官に晚餐を供して別を告げた

使節の一行は、其の朝の十時を期して波戸場から小蒸氣船に乗ることになつてゐた。

海は小春風に風いで蝸牛の這つた後のやうにぬめりを帯びてちらちらと光つてゐた。五六羽の鷗が直ぐ近くの海面を掠めて飛んでゐた。一行の乗ることになつてゐるアメリカ號は、數艘の日本の軍艦の傍に黒い大きな姿を見せてゐた。波戸場は使節の一行を見送りに來た政府の大官はじめ、使節の一行に加はつてゆくことになつてゐる留學生の見送人で埋まつてゐた。

時辰が來ると一行は波戸場に横たはつた小蒸氣船へ乗りはじめた。云ふまでもなく此の使節の首班は右大臣岩倉具視であつた。具視は特命全權大使で、參議木戸孝允、大藏卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳の四人が特命全權副使となつてゐた。使節一行の官員總數は四十八人で、其の使節に伴はれて往く留學生が五十四人あつたが、其の中に開拓使から派遣せられた五人の女性があつてゐた。上田憐子、山川捨松、益田繁子、津田梅子など云ふ女留學生の名は當時好奇的となつてゐた。

烏帽子小直衣に切袴をつけて劍を帯びた貴顯の一人が一行に前だつて小蒸氣船に乗つた。それが岩倉具視であつた。副使もそれぞれ衣冠帯劍してゐた。遣外使節はさうしてアメリカへ行き、イギリスへ行き、フランスへ行き、ベルギー、オランダを経てドイツへ往つて、歐米各國の文物制度を視察して、條約改正の準備方法を研究することになつてゐた。

見送人は帽子を揮り手をあげて知人の鹿島だちを祝してゐた。其の見送人の中には板垣退助もゐた。板垣は仲の好い西郷隆盛と並んでゐた。其の板垣にも西郷にも數人の從者が跟いてゐた。退助と隆盛は何か云つて笑ひあつてゐた。其の二人の眼の前へ小さな洋服を着た男がこのこと來た。

「やあ、板垣さん、いよいよ往てきます、」

それは片手に袂包を拵へ込んだ中江篤介であつた。篤介は司法省出仕と云ふ名目をもらつてゐた。退助ははればれとした氣もちになつてゐた。

「ああ、中江君か、うんとやつて來たまへ、家のことは心配せえでもいい、」
篤介は軽く頭をさげた。

「どうかお願ひいたします、」

「いいとも、いいから、うんと勉強して來たまへ、」と云ひさして退助は篤介の放縱を思ひだした。「そのかはり、これまでのやうに飲んではいかん、君は學問はできるが、どうも放縱でいかん、今度は千歳一週の機會ぢや、此の機會を取りはづさないやうに、うんとやつて來たまへ、」

「やります、今度は年來の志望がかなひましたから、うんとやります、それに母が年をとつてをりますから、うかうかしよられませんか、」

「さうか、それならなほさらぢや、土地がかはるから、體に注意して、うんとやつて來たまへ、」

「それでは、御機嫌よう、」

「機嫌よろに往つて來たまへ、」

篤介はそれから退助の右側にある從者の一人へ眼をやつた。

「穴戸の小父ちゃん、往てくれるぞよ、」

其處には穴戸直馬が慾望のなささうな顔を見せてゐた。直馬は破顔した。

「うんとやつて来いよ、あんまりこれをやらずに」と直馬は左の手で酒を飲む真似をしてから「パリには、今、西園寺や光妙寺が遊學しちよると云ふぢやないか、負けんやうにうんとやつて来い、ロンドンには土佐の知己ををるぞよ、」

當時イギリスには土佐藩の留學生がゐた。それは其の前年即ち明治三年に留學したもので、眞鍋改作、古澤滋、國澤新九郎、馬場辰猪などであつた。

「さうぢや、イギリスとフランスは、一衣帯水ぢや、暇があつたらイギリスへ往て、皆に逢ひたい、」

「往き往き、ロンドンの片田舎のヤソ坊主の家をると云ふが、どうしよるらう、それでも馬場は福澤塾で、イギリス學をやつちよる秀才ぢやきに、向ふの人と話もできるらうが、眞鍋は豪傑で文學に疎いから、どうぢやらう、二人はともうまがあふまい、板垣さんもわるいが、眞鍋を留學させたことは、ちくとお門違ひぢや、」

「しかし、豪傑でないといかんぞよ、おつちよこちよいがなんぼ學問しても、天下國家のことは判らん、」

篤介の眉はあがつてゐた。篤介は華かな鹿島だちに意氣の軒昂たるものがあつた。

「天下國家が判らんでもいかんが、あんまり判りすぎてもいかん、あんまりやりすぎんやうにやつて来い、酒は何時でも飲めるきに、」

篤介は苦笑した。板垣も他の従者も微笑を篤介にあつめた。

「日本の旨い酒は暫く飲めまい、戻つて来るまで預けちよく、」

「ええとも、預かつておく、」

小蒸氣船から喇叭のやうな警笛が鳴つた。篤介も早くそれに乘らなくてはならなかつた。篤介は袂包を揺り

なほした。

「それでは、御機嫌よう、」

篤介は皆に其の挨拶が判るやうに頭をさげるなり、くると體の向きをかへてちよこちよこと歩いて往つた。

其の時西郷の前にも二人ばかり留學生らしい青年が來てゐたが、これも篤介の後を追ふやうにして船の方へ往つた。

「板垣さん、豪傑が往きましたぞよ、」

直馬は一方に篤介を見送りながら一方に退助を見た。退助は笑つた。

「往た、往た、えらい奴が往た、後藤も煩い奴がをらんやうになつて、ええだらう、」

右側になつた西郷の前には後藤象二郎と三條實美が並んで立つてゐた。退助は後藤の方へちらと視線を向けた。

「さうですとも、後藤さんも煩い奴が往て、ほつとしてをりますよ、」

板垣の左側には大隈重信と黒田清隆の一行がゐた。

「さうぢや、あれにはかなはん、」

退助がさう云つた時、人聲が湧きたつた。それに交つて小蒸氣船の機關の音が聞えた。小蒸氣船はいよいよ上波戸場を離れたのであつた。見送人は帽子を揮り手を揮つて其の行を盛にし、送られる人は狭い甲板に繡眼兒おしに並んで、扇を翳し帽子をあげ手を額にして別れを惜しんだ。直馬は壯い友人を其の繡眼兒おしの旅客の中から見いださうとした。

「何處にをるぢやらう、ほつそい、眼へいれるばあな男ぢやきに、見えん、」

「中江君かよ、あれぢやないかよ、」

それは板垣に置いて遣外使の一行を見送りに来てゐた前野進であつた。前野は陸軍大尉であつた。直馬は前野の指の往つてをる方へ眼をやつた。艦の人群の中の肥つた洋服男と羽織袴の存のすつきりした男の間に猿のやうな小さな顔があつて、それが白い手帛のやうなものを片手で揮つてゐた。

「なるほど、あれぢや、中江君のしさうなことぢや、何か揮りよる、」

「どうも中江君ぢやらう、することに才氣がある、」

「さうぢや、のうし、」

直馬が前野にてうしをあはしてゐる時、右側の西郷の豹の眼が此方を見た。それは微笑を含んだ懐かしい眼であつた。

「板垣さん、たうとう出ていつきやつた、」

二八

隆盛の詞には軽い皮肉が含まれてゐた。退助は其の詞の意が直ぐ判つた。退助も微笑を見せた。

「さうですね、いよいよ出かけましたね、」

二人は微笑を送りあつた。直馬はその眼に注意した。隆盛の大きな象のやうな體が動いた。

「板垣さん、」

板垣は何か云はうとしてゐる隆盛の詞に耳をたてた。

「なんですか、」

「お歴々が揃うてをいやいが、彼の船が太平洋の真中で、ひつくいしかへつと、清濁すつぢやらう、」

隆盛はさう云つて肩を揺つて腹の底から出るやうな笑聲を出して笑つた。板垣も笑つた。

「さうですね、政府の中が清濁するばかりでなく、公平無私な政治が行へるでせう、」

それは一場の戯言にすぎなかつたけれども、二人の氣もちを云ひあらはすには十分であつた。隆盛はまた肩を揺つて笑つた。直馬はそんなことが黒田や大隈に聞えてはわるいと思つて退助のために氣を配つた。黒田と大隈は此方を見て眼を圓くしてゐた。二人は隆盛の大きな笑聲に驚かされたものであつた。直馬は其の時黒田と大隈の後の方にゐる山縣有朋などの一行の中から、山縣がこれも驚いたやうな顔をして此方を見てゐるのを見いだした。

「烏帽子小直衣で、岩倉さんがアメリカの大統領にあふやつときや、見もんごあすな、板垣さん、」

隆盛はまた笑つたが、肩を揺るほどではなかつた。退助は小栗上野が歐米を巡行したことを思ひだした。

「小栗のやうに地べたへは座らないでせうよ、皆歐米の崇拜家で、パンを喫ふことを知つちよる通譯も伴れてをるから、」

小蒸氣船は其の時アメリカ號に横づけになつて、舷梯を攀ぢてあがつてゆく一行の姿が小さく見えた。波戸場では鳴を静めた。氣をつけてみるとアメリカ號の傍にゐる二三の日本軍艦の甲板には、乗組の將卒であらう一めに軍服姿の者が出てゐた。何時の間にか退助の傍へ象二郎が来てたつた。

「板垣君、君は歸りにどうする、」

退助は其の夜東京へ歸るつもりで馬で來てゐた。

「僕は直ぐ歸るつもりだが、君は、」

「僕は久しぶりに横濱の飯を喫つて往くつもりだ、君もどうだね、」

「僕はつがふがある、歸る、」

「東京に待ちよる者があると見えるぞ、」

「そんなことぢやない、用事ぢや、」

「さうか、」

象二郎は微笑して其の眼を隆盛へやつた。

「西郷さん、お歴々がいよいよ船に乗りましたね、」

「さうでござすよ、」

隆盛は退助に對して云ひ残してあつたことを、象二郎によつて云ひつくさうとでもしてゐるやうにして話した。退助は早く船の出る時間になつてくれればいいと思つてゐた。退助は直馬に聞いた。

「突戸君、もう幾字だらう、」

「さうです、」と直馬は中天にかかつてる春の陽のやうな陽を仰いだ。「もう十二字過ぎてをりますから、おつつけ船も出ますよ、」

「さうかね、」

象二郎と隆盛の無遠慮に話す戲言まじりの話が、笑聲を交へて賑やかに聞えてゐた。退助も何時の間にか其の

話につりこまれてゐた。其の時不意に大戦争の勃發したやうな大砲の音が四邊の静寂を破つて、港の潮を包む山やまに反響して鳴りだした。陸の砲臺及び軍艦からうちだした禮砲であつた。アメリカ號は其の禮砲の間を悠揚と沖へ出て往つた。

遣外使節の一行を乗せた汽船が出帆すると、退助は後藤と西郷に別れて東京へ引返した。同行者は、前野進、

突戸直馬など五六人であつた。

東海道には小春日和の静な空がづらなつてゐた。鶴見へ來たところで、空腹を感じるうへに咽喉が乾いてしかたがないので、一行は一軒の茶店を見つけて馬をおり、其處で茶を飲み、駄菓子を買つて午食に宛てた。

時とすると鶯が巻を畫いて頭の上を飛ぶことがあつた。鮫洲まで歸つたところで日が暮れた。前野は川崎屋で夕飯を喫つて歸りたいやうな舉動を見せたが、退助が東京へ往つてやらうと云ふので、しかたなしに退助の云ふがままになつた。

空には十二日の月が冷たく光つて、品川の花から吹きあげる風は氷のやうに寒かつた。前野は其の寒いのを退助が鮫洲で夕飯を喫はさなかつたせゐにしてゐるやうに、わざと大きな聲で退助の前へ投げつけるやうに寒い寒いと云つた。退助は何かに引き寄せられるやうにして、そんなことには耳をかさないで馬を急がした。芝口へ來たところで退助はびつたりと馬を停めた。

「此處で飯を喫はう、皆、おりたまへ、」

退助は其のまま馬からおりて馬丁に馬をわたした。同行者もそれを見ると皆馬からおりて、それぞれ馬を馬丁の手にわたして、退助の後から跟いて往つた。退助は新橋の狭斜巷へ入つて往つた。退助の往く家は千歳であつ

た。千歳のお媽さんは直馬の牌を聞きつけて、そかそかと出て迎へた。

「これは、ようこそ、」

退助は領づいてみせた。直馬は幫間をつとめなくてはならなかつた。

「お媽、冷いぞ、冷いぞ、横濱から寒ざらしになつて来た、酒が急ぐ、」

「おや、横濱から、それはたいへんでございました、」

お媽さんは退助に引きそうて階段を上がり、板垣一行の騒ぐことになつてゐる室へ案内した。

「お媽、此處はええ、早う酒を持つて来い、」

直馬に追つたてられてお媽さんは、婢の一人を伴つて室を出て往つた。退助は前野に眼をつけた。

「前野君は、川崎屋でやりたかつたやうなが、あんな處ぢや、戻りが煩いぢやないか、」

前野は微笑した。

「さうですね、彼處で飲むと、戻るまでには、さめてしまひますね、」

「さうとも、」

しかし、それは退助の詭辯にすぎなかつた。退助は東京を出る時から千歳に來ることを考へてゐたのであつた。

直馬がそれに口を入れた。

「板垣さん、いちがひに東京へ戻らなくても、直ぐ途にぬくい處がありましたよ、」

退助は笑つた。

「品川か、」

「さうですよ、後藤さんが食客をしようとした家もあるぢやありませんか、」

「さうぢや、」

そこへ婢が茶を持つて来た。茶の後から酒が来た。酒の後から肴が来たが、それにはお媽さんが附いてゐた。

お媽さんは直馬の傍へ往つた。

「旦那、彼の妓は出てゐるのですが、」

「小清か、」

「さうですよ、なんとかしてもらひたいと思ひましたが、つがふがわるいのですよ、」

「そいつは、いかんぞ、あれが來ると、他のすべたが何人來ても物にならんぞ、」

「もすこし、待つてくださいよ、もすこししてもらつてみますから、」

「何處へ往ちよれや、」

「やつぱり此のあたりですよ、」

「客は何人なら、」

「それや判りませんよ、」

二九

小清と安積彦太郎は富本と云ふ待合の一室にゐた。桃の花のやうな行燈の燈を受けた小清の姿はよわよわとして力がなかつた。小清は混亂してゐる己の氣もちの一角を擱まうとしてをり、彦太郎は炎のやうに燃えあがる氣

もちをちつと押へてゐるところであつた。二人の眼は離ればなれになつてゐた。

其の時近くの室から三絃の音とともに竹枝が聞えて來た。彦太郎はふとそれを耳にした。彦太郎は己が考へこんでゐたことに氣が注いたので、其のきまりわるさをまぎらすために膳の上の盃を持つた。盃には冷たい酒がぼつちり残つてゐた。小清はあわてて銚子を持つた。

「冷たいですよ、」

「うむ、彦太郎は盃を出して銚子を持つて來た小清を見た『小清、』」

「は、」

小清はちらと彦太郎の眼を見かへしたが直ぐ視線をそらした。彦太郎は盃を持つたなりに空間の一箇所を見詰めた。それは如何にも苦しきような存在であつた。彦太郎は其の己の姿に氣が注いた。彦太郎は急いで盃を口にしなから小清を見た。

「小清、」

「は、」

二人の視線はまた離れてしまつた。彦太郎は盃をおいた。

「小清、汝は、」

「は、」

「汝は、わしの心が判らんか、」

「は、」

「はでは判らん、はつきり云うてくれんか、わしも癡ぢや、こんなことを云ふは癡ぢやが、どうしても思ひきれん、小清、わしは癡ぢや、」

小清は返事をする事ができなかつた。

「そんなことを云ふと、また汝に怕がられるが、」

小清は俯向いてゐた。

「小清、わしはよつほど癡ぢやなあ、好年輩をして、こんなことを云うて、彦太郎は苦笑して、おいてあつた盃を執つて出した『まあ、すこし、注いでくれ、此の癡は、酒がたらん、』」

「は、」

小清はあわてて銚子を持つた。銚子は冷たかつた。

「温かいのを持つてまゐります、」

小清は起たうとした。彦太郎が停めた。

「待て、いい、冷たくても、熱うても、そんなことは、どうでもええ、酒がいるなら、婢を呼べ、」

「それでも、ちよつと往つてまゐります、お話はゆつくり伺ひます、」

小清は彦太郎の傍を厭ふ心はなかつたが、それでも氣もちがいいと思はれる廊下の空気を吸ひたかつた。小清は起つて無理に笑つてみせた『いいですよ、』

小清の笑ひは淋しかつた。彦太郎も淋しきうな笑ひを見せた。

「さうか、それぢや往つて來るか、婢を呼んでもええが、」

「ちよと往つてまゐります、氣の毒ですから、」

「さうか、それぢや往つて来い、」

「は、」

小清はちよつと躡をさげながら出て往つた。彦太郎は其の後をちよつと見てゐたが、やがて眼を階の上におとし考へこんだ。

小清は無意識にすこし往つて立ちどまり、廊下の冷たい空氣の中で吐息した。小清は頭を押へつけられてゐた物の手から放されたやうな氣がした。しかし、小清は逃れることのできないやうに運命づけられてゐる環境から逃れることができるとは思はなかつた。小清の心は暗かつた。

「小清さんぢやないの、どうしたの、」

婢は銚子を持った小清の立つてゐるのを見て聲をかけた。小清は氣が注いで顔をあげた。

「お銚子の温いのをいただきに往かうと思ひまして、室を出ると、あの、ちよつと躊躇して、眩暈がするものですから、」

「さう、氣のどくだつたわね、まだ、へんなの、何かあげませうか、」

何かとは眩暈をなほす薬のことであらう。小清は出まかせを云つたことが氣になつた。

「なに、いいのです、もう癒りましたから、」

「さう、では、それをくださいよ、」婢は小清の手にした銚子の方へ手をやつて、「すぐ持つて来るよ、」小清は息苦しいやうなかんじのする室の中へすぐ引返したくはなかつた。

「わたしが、往つてまゐります、」

「いいのよ、いいのですよ、わたしが持つて来るから、あなたは、ああさんが淋しがるでせう、」

婢は小清の手から銚子を執つて引返した。小清は銚子を執りに往けないのがちよと残念であつたが、すぐそれは忘れてしまつて、室の中の客へ心をやつた。小清は其の客の榮達はしてゐないが、土佐のりつばな侍として、己のやうなもののために心を苦しめてゐると云ふことが、氣のどくでもあればすまないやうにも思はれるのであつた。小清は客の傍へ往くのも苦しかつたが、客を嫌つてなほざりにするやうに思はれることは猶ほさら苦しかつた。小清は室の中へ入つて往つた。室の中では彦太郎が膝を押しつぶさうとでもしてゐるやうに兩手を張つて考へこんでゐた。小清は胸をつかれた。小清は嬌嬌として其の傍へ往つた。

「ああさん、」

彦太郎は顔をあげた。

「小清か、」

小清は座つて苦しさうな眼で彦太郎を見た。

「酒は来たか、」

「お婢さんが持つてたのです、」

「さうか、」

「すぐまゐりますから、」

「酒なんか、どうでもええ、」

客の酒を飲むのは苦しい氣もちをまぎらすためであつた。小清はまたしても客にすまないと思つた。彦太郎の眼は小清へ來た。

「小清、」

「は、」

「汝は、わしの心が判るか、」

判つてゐてもそれをうけいれることのできない身では、判つてゐるとは明に云へなかつた。

「は、」

「どうぢや、判らんか、」

「は、」

桎梏さへなければ己の身はどうなつても厭はないのであるが、小清にはそれが許されなかつた。小清は彦太郎と龍吉の人間性を其處に並べてみた。無智に近い龍吉は彦太郎の腹をなすにも足りなかつた。小清は泣きたかつた。彦太郎は充奮してゐた。

「どうぢや、小清、」

「は、」

二人の詞はちよつときれた。婢が銚子を持って入つて來た。

「お待ちどほさま、」

小清の氣もちは硬ばつてゐた。小清は軽い氣もちになることができなかった。

「御苦勞さま、ね、」

婢はめうになつてゐる室の中の空氣に氣が注いた。

「小清さんも、一ばいいただきなさいよ、」

婢はさう云ひ云ひ彦太郎の盃へ酌をした。彦太郎は氣が注いて盃を持った。

「さうぢや、小清も一つやるがええ、彦太郎はぐいと一口に飲んで小清の前へ盃を出した。「やれ、」

小清は盃をもらふより他に其の氣もちをまぎらすものがなかつた。

「いただきます、」

小清は勢よく手を出して盃をもらつた。

「姐さん、お酌をしてくださいませ、」

婢は笑顔をして銚子を持った。

「あなたのことだもの、なみなみと注いであげるよ、」

三ばいと飲めないことを知つてゐる彦太郎は、小清の勢のいいのに驚いた。彦太郎は小清の盃へやつた銚子の

口へ注意を向けた。

「今日は豪いが、飲めるか、」

「ええ、飲めます、飲めますよ、」

「ほう、豪いぞ、」

彦太郎が淋しく笑つた時、小清は盃を口へ持つて往つて、一息にぐいと飲んでしまつた。婢は眼を圓くした。

「小清さん、強いわね、そんなに飲めるの。」

小清は微笑を見せた。

「飲めるよ、」と云つてまた其の盃を出して、「もう、一ぱいくださいよ。」

「さう。」

婢は躊躇した。平生になく飲めない酒を要求する小清の心の動きには、何かなくてはならなかつた。彦太郎は困つた。

「そんなに飲うでええか、」

三〇

彦太郎は小清がやけ酒を飲まうとするのは、己にせめつけられる苦しさからだと思つた。

「いいわよ、いいから姐さん、お酌してくださいよ。」

小清は最初の酒で眼の縁を赤くしてゐた。

「さう、それぢや、お酌しますよ、それでも豪いわ、ねえ。」

小清は酌してもらひながら重く笑つた。

「豪いわ、豪いのですとも、だから、うんと注いでくださいよ。」

「さう、それから何か云はうとして、」だけど、いいわ、ねえ、小清さんは、ああさんにおあげなさいよ、」

「さうね、」と小清は軽く云つて、其の盃をぐつとまた一息に飲んで婢の前へ出した。「姐さんにあげますよ。」

酒の匂をかぐのも嫌な婢は困つた。

「わたしだめよ、わたしの飲めないことは、小清さんも知つてるでしょ、ああさんにおあげなさいよ、」

「さうぢや、」婢の酒の飲めないことを知つてゐる彦太郎は、婢のかはりに己かもらはうと思つた。「わしがもらは

う、お松はだめぢや、」

小清はあつさりと盃を彦太郎の方へ向けた。

「さう、それぢやあげますよ、」

彦太郎も婢に陰影を見せてはならなかつた。あつさりと盃をもらつて小清に酌をさした。

「苦しくないか、」

彦太郎は小清が無理な酒を飲むのが氣になつた。小清は眼を伏せた。婢は起つた。

「おとほしものを見て來ます、もう來たのでせうから、」

婢は二人の氣もちをかきませないやうにとでもしてゐるやうにして出て往つた。彦太郎は一口飲んだ盃を持つ

たなりにちつと考へこんでゐた。小清は顔がかつかとするとともに胸がわくわくはじめた。小清は額に冷たい

脂汗がにじんだやうに思つた。小清は額へそつと指をやつた。彦太郎はそれを見つけた。

「苦しいか、」

「いいえ。」

いいえと云つたものの苦しくて座にたへられなかつた。小清は室を出て冷たい風に當りたいと思つたが、客をきらつて出るやうに思はれることは辛かつた。小清は思ひついて起つた。

「何處へ往く、」

小清は返事ができないほど苦しかった。小清は返事のかはりに頷づいておいて一方の障子を開けて縁側へ出た。其處には葉のない柳の小枝が垂れてゐて、それに西に傾いた月の光が冷たくかかつてゐた。

「寒いぞ、風をひくぞ、」

彦太郎は小清がいとしかつた。小清は黙つて柳の小枝に動く風を吸うた。風は軽い腦の故障をなでてくれた。

「苦しいか、」

彦太郎は片手を背後むきに突いて廊下の方へ眼をやつてゐた。

「もういいのです、よくなりました、」

「頭が痛いか、」

「眩暈がしさうでしたから、」

「それやいかん、無理に飲んだからぢや、無理に飲まんがええぞ、」

「ええ、」

「入つたらどうぢや、」

下の巷で足音がして三絃が鳴つた。小清は見るともなしに眼をやつた。手拭で頬冠した二人伴れのながしであつた。

「ええ、姐さん、今晚は、」

へエエと云ふやうなわざとらしい笑顔を交へて何か云つたかと思ふと、もう蘭入節。

「——あやなき空や、浮橋に、つながる縁や縫之助、ついあだばれも誠となりて、ほんの女夫になりたいと、思ふ思ひはままならぬ、今は此身に、あいそもこそも——」

小清の耳は澄んで往つた。

「——つきた浮世や、いざ鳥邊野の、女肌には白無垢や、上にはむらさき、藤の紋、中着、緋紗綾に、黒帯子の帯、歳は十七、初花の、雨にこがるるうち姿——」

小清の一方の指は柳の柳にかかつて、それが三絃の調子に解けあつた。

「男も肌は、白小袖にて、黒き輪子に、いろ浅黄うら、二十一期の色盛をば、戀と云ふ字に捨小舟——」

小清は指端で柳の枝を軽く弾いた。

「——きくたびたびにつらかりし、父母のこと思ひだし、後の嘆きを思ひやり、ここから往んでくれ竹の、ふし

沈みたる袖の露、」

彦太郎がすうと出て来た。

「おい、藝人、」

彦太郎の手から小さな紙ひねりが飛んで、それがちらちらと月の光に綾をしながら落ちて往つた。同時にながしの謠もびたりと止んだ。

「へい、まいどありがたうございます、」

ながしは大きく禮を云ひながら向前の家へさつさと往つた。彦太郎は小清に眼をやつた。

「小清、どうぢや、苦しいか、」

小清は石のやうに堅くなつてゐた。

「小清、」

「は、」

「苦しいか、」

小清は何も云はなかつた。彦太郎は強ひては聞けなかつた。齒入節が何處からともなく聞えて來た。

「小清、入つたらどうぢや、」

彦太郎は其の時、小清の炎のある眼を見た。

「小清、どうした、」

「動けないのですもの、」

「動けない、わしが入れてやらうか、」

小清は何か云つたが聞えなかつた。彦太郎の體はびつたりと小清によりそうた。小清は動かなかつた。

「小清、」

小清は仰向いたが其の眼は閉ぢてゐた。

「小清、きらうな、」

彦太郎はいきなり小清を抱きあげて室の中へ入るなり、片手にびしりと後を締めた。小清は拒まなかつた。彦太郎は小清を抱へたまま座つた。

「小清、どうした、」

小清は眼をつむつたなりで開けなかつた。

「何か云へ、どうした、」

彦太郎の火のやうに燃えてゐる腕の力が小清の體に加はつた。捕まへられてゐた孔雀が飛びたつたやうに、はつと思ふまに小清は彦太郎の腕から脱けて叫んだ。

「わたしは、わたしは、わたしは、」

彦太郎は呆氣にとられた。小清はよろよろと其の傍へ座つた。

「わたしには、わたしには、」

小清は狂人のやうにした。彦太郎は小清の片袖を捕へやうとした手を引いた。小清は大きな呼吸をした。其の胸もとは波を打つてゐた。

「小清、」

彦太郎は小清の怪しい心の激動を見た。小清の眼に涙が光つてゐた。

「小清、おちついたらどうぢや、どうした、」

「ああさん、わたし、」

「なんぢや、」

「わたし、死にます、」

己に迫られて困るからであらうと思つた。彦太郎はきまりがわるかつた。
「わしは、癡ぢや、汝に氣のどくぢや、」

「そ、そんなことは、」

「いや、わしがわるい。」

「そんなことはありません、わたしが癡だからです。」

「いや、さうぢやない、わしが癡ぢや。」

彦太郎はしかたなしに盃を持つて、それに己で酌をして飲んだ。

「ああさん、」

小清の體がしやんとなつた。それは何か云はうとする時の體のこなしであつた。

「なんぢや、」

「わたしは、ああさんの御しんせつは、判つてます、判つてますが、わたしには、それができない事情があります、」

「其の事情はなんぢや、」

彦太郎の體もしやんとなつた。

「もし、わたしに、所天があつたら、どうなさいますの、」

所天があつても何があつても彦太郎の感情はそれを押へつけることができなかつた。

「さうか、」

「それぢや、ああさんだつて困りませう、」

「あるか、」

「もし、あつたとしたら、」

「さうぢや、」

彦太郎の兩手は傍にゐる小清の體にからまつた。

「小清、」

小清は動かなかつた。

「ああさん、」

三二

其の日の夕のことであつた。龍吉は車井の傍を通つて巷を出て往つた。龍吉は近くの蕎麥店へ往くところであつた。隣へ往つてうつかり話しこんでゐて鐵瓶の下の火を消し、夕飯を喫ふには火をおこさなければならぬし、それに旨いお菜もないので蕎麥を喫つて夕食にあてることにしてゐた。

藍のほけたやうになつた空には陽光がそこはかとなく漂うてゐたが、巷の口はもう微暗くなつてゐた。遅い納豆賣の男が來て摺れ違ひながら中へ入つて往つた。龍吉はちよと納豆を温かい飯にかけて喫ふ時の味を心象に浮べた。龍吉は納豆が好きであつた。

「もし、もし、」

それはがすがすした年とつた女の聲であつた。龍吉は何人かを呼んでゐるだらうと思つて眼をやつた。小柄な老婆が其處に立つてゐた。老婆は黄昏のせいもあるが黒い乾からびたやうな顔をしてゐた。

「汝さんは、龍吉さんだらう。」

老婆は心安い人のやうに云つたが、龍吉は見知らない人であるから軽く返事ができなかつた。

「なんですか、」

乃公は龍吉だが汝さんは何人で何の用があるのかと聞いたのであつた。

「わたしを知らないの、小清さんはよく知つてるのだよ、」

小清を知つてゐると云へば書局にゐる女か、それとも料亭か待合茶坊にゐる女であらう。さうだとすれば小清の顔もあるから、大きな顔もせられないと思つた。

「さうですか、小清が厄介になつてる、」

「なに、そんなことはないのだが、小清さんは、よく知つてるのだよ、」

「さうですか、それはどうも、」

龍吉は頭一つもさげたいくらゐであつた。老婆は風でもひいてゐるのか二つ三つ咳をして、其の唾をのみこむやうにした。

「わたしは、すぐ其處の、新橋の待合だよ、小清さんとは毎晩のやうに顔をはせてるのだよ、」

「さうですか、それは、どうも、小清が平生厄介になつてるのでせう、」

「なに、お互さまだよ、それでね、今晚来たのは、是非汝さんに逢ひたいと云ふお客さんがあつてね、小清さんから頼まれて来たのだが、何かいいことがあるらしいのだよ、」

何かいい事があると云へば、己にできる仕事でもあるだらう、女に養つてもらつてゐるのが厭でたまらない龍

吉の心は動いた。

「お客さんで、どうした方です、」

「りつばな、豪い方だよ、逢つたら、すぐ判るから、往かうぢやないか、」

龍吉は往きたかつたが、そんな人に逢ひに往くに汚い平生服でも往かれまいと思つた。

「すぐですか、」

「さうだよ、早い方がいいから、すぐこれから往つたら、どうだね、」

「さうですか、」

「なにか、つがふがあるの、」

「なに、そんなこともねえのですが、こんな容ではね、」

「なに、それでたくさんだよ、それに夜ぢやないか、たくさん、たくさん、それでたくさんだよ、」

老婆がさう云へばこれでもいいだらうと思ひだした。

「さうですか、」

「では、これから往かうぢやないの、其處へいいものを持って來てるのだから、」

「なんですか、」

「お客さんの馬車を借りて來たのだよ、」

まさかこんなはつば野郎を呼びに來るに、馬車に乗つても來ないだらう、それは老婆の冗談だらうと思つた。

龍吉は笑つた。

「ほんたうだよ、乗つて來てるのだよ。」

老婆が前に立つて往くので龍吉は跟いて往つた。街路の向ふ側の柳の下に二頭立の馬車が置いてあつた。老婆は龍吉を其の傍へ伴れて往つた。

「これだよ、乗らうぢやないかね。」

老婆は開けたままで寄せかけてあつた馬車の扉へ手をかけた。馬車には小さな燈が點いてゐて、御者が馬丁かの鼻をすする音がしてゐた。龍吉はもちもちした。

「いいから、お乗りよ。」

「さうですか。」

其のうへしりごみすることもできなかつた。龍吉は大事さうに乗つた。

「乗つたね、では、わたしも乗るよ。」老婆はやつとこごと乗つて、「こんな物へ乗るのは、なんだかもつたないやうぢやないかね。」

それは龍吉も同じであつた。龍吉は腰をかがめたままである。

「さうですよ、なんだかね。」

「おかけよ、乗つたからには、おほむばりであらうぢやないかね。」

龍吉はなるほどと思つた。龍吉は思ひきつて腰をかけた。同時に老婆も腰をおろした。二人の體はくつついた。老婆の體は冷たかつた。

「年よりにくつつかれたのぢや、きみがわるいだらうがね、今になんだよ。」

老婆は何か己で心得てゐるやうに云つて笑聲を出した。龍吉は其の意が判らないので、何故婆さんは笑ふだらうと思つたが、黙つてもゐられなかつた。

「ああ。」

同時に馬車が動きだした。車體は勢ひよく走る馬のために揺れた。地を蹴る馬の蹄の音が車體の揺れにもつれあつた。龍吉は己を呼んでくれてゐる客のことが知りたかつた。

「お客さんつて、どんな方です。」

「どんなつて、豪いりつばな方だが、なに、なんでもないのだよ。」

豪いりつばな人の前へ出るからには、なんでもないことはない。どんな人か、むづかしい人か、あつさりした人か、官員か、侍か、町人か、新橋へは田舎侍や、官員が來て遊ぶと云ふから、侍か官員のいつれかであらうが、それを知つておかないと挨拶するにも困るのであつた。

「官員さんですか。」

「さうね、官員さんかも知らないよ、彼の方は。」

「どんな方です。」

「りつばな方だよ。」

「幾歳くらゐです。」

「さあ、三十ぐらゐだらうかね、姪な方だよ。」

姪なと云へば色の白いりつばな方であらう。そんな人の前へ出るに、こんな恰好をして出てもかまはないだら

るか。

「こんな恰好でいいだらうか。」

「いいとも、向ふから汝さんに逢ひたいと云つてるぢやないか、かまやしないさ。」

向ふから逢ひたいと云つたところで、もともと小清か何人かが頼んで、逢つてくれることになつたものだから、何も向ふが好んで逢つてくれるのではない。老婆の云ひかたは主客を顛倒してゐるものであつた。龍吉はをかしかつた。

「逢ひたいつて、わつしから頼むぢやねえか。」

「それや、さうだがね、老婆は氣が注いだやうに云つて、「だつて、向ふが逢ひたがれや、いいぢやないか、たとひ此方から頼んだところで、向ふが逢ひたくなつて、是非逢ひたいと云ひだしや、おほるばりぢやないか、ゐばつてるがいいよ。」

「まさか。」

「ほんとだよ、ゐばつてりやいいさ、なんにも小さくなつてゐることはないさ。」

「だつて嬭さん。」

「まあいいやね。」

車馬は平坦な途に出たと見えてあまり動搖しなかつた。龍吉は老婆からまあいいやねと云はれてちよつと口をつぐんだものの、客のことを知らないことは不安であつた。

「新橋かね。」

三三

それは客の容子を聞くために用ゐた誘ひの詞であつた。

「さうだよ。」

老婆はすましたものであつた。龍吉は客の容子をもすこし精しく知らないことには安心ができなかつた。

「何て云ふ方ですか。」

「なんと云つたつけ、あの、それ、なんとか云つたつけなあ。」

老婆は客の名なんかどうでもいいと云ふ風であつた。龍吉は呼びによこした客の名を知らないなんて、いいかげんな婆さんもあつたものだと思つて呆れた。

「はじめての方ですか。」

「なに、ちよいちよい見える方だが、名を知つたところで、なんにもならないから、名は覚えてないが、りつばな、姝な、いい方だよ。」

「さうですか。」

さうですかと云ふより他に龍吉は云ふことがなかつた。馬車は間斷なしに走つた。新橋と龍吉の住居は目と鼻の間であつて、何處からでも橋一つ渡ればすぐ往けるはずであつた。龍吉はすこし途が遠いやうに思つた。

「まだだらうか。」

「もうすぐだよ。」

すぐ往けるのはわかりきつてゐるが、馬車は勢ひよく駆けて停まりさうにもなかつた。龍吉は御者が田舎漢で路をまちがへたではないかと思ひだした。

「どうもをかしいぞ。」

龍吉は窓から外を見やうと思つた。窓には緞子のやうな黒い帷をおろしてあつた。龍吉は其の帷をまくらうと思つて手をかけた。帷は縫ひつけたやうになつてゐてまくれなかつた。龍吉は老婆のゐる方の窓へ眼をやつた。其處にも黒い緞子のやうな帷をおろしてあつた。龍吉は同じことだと思つて手をやらなかつた。龍吉は老婆の顔を見た。

「媼さん、路をちがへたぢやないだらうか。」

老婆のこすさうな眼がちかちかとした。

「路がつて、何の路だね。」

「何つて、新橋の路ぢやないか。」

「さう、さう、新橋の路だね。」

さうさう新橋の路つて、新橋の待合から呼びに来てくれて何を云つてるのだ、此の婆さんよつほど善縁をしてるのだなと思つた。龍吉はをかしくもあれば、ばかばかしくもあつた。

「新橋だらう、媼さん。」

「新橋さ、新橋のいい處だよ、汝さん、それこそ、わたしにうんとお禮を云はなくちやならないよ。」

それや仕事にありつけるやうにしてくれてゐるから、それがきまりさへすれや衣服の一枚ぐらゐは禮をしても

いいのだ。

「それは、もう、なんですよ、お禮をしますよ。」

「男に生れて、これからうへのことはないのだから、うんとお禮をしてもらはなくちや、汝さんは何と云ふ果報者だらう。」

女の腕で犬のやうに養はれてゐる男が、仕事ができ飯にありつけるところで、たかがはつば野郎のありつける仕事だ。門番か使丁か、法棒を持つてる屯の旦那までにはなれないだらう。果報者はちとおほげさではないかと思つた。龍吉は苦笑した。

「エツヘツヘツへ。」

「なにを笑ふのだね、ほんたうだよ、汝さんは果報者だよ。」

此のせちがらい世の中に、仕事の出来ることは果報者と云へば果報者だらうが、どうもすこし云ひかたがおほげさであつた。

「さうですか。」

「さうさ、汝さんは、ほんとに果報者だよ。」

果報者の連發には龍吉もあてられきみであつた。龍吉は首を縮めた。龍吉はそれから舌を出さうとしたが、それは老婆をばかにすることであるからできなかつた。

「ほんたうだよ、汝さんは果報者だよ。」

「さうですか。」

龍吉はしかたなしに老婆の詞へてうしをあはせた。

「さうとも、汝さんほど果報者はないよ、今にすぐ判るよ。」

「さてよと龍吉は考へた。婆さんがあんなに云ふところをみると、ちよつとした仕事の口でなしに、何か良い分不相應の仕事の口があるかも知れないが、しかし、それが己に勤まるだらうかと思ひだした。龍吉はもう果報者と云ふ詞をおほげな詞とは思はなくなつた。

「さうですか、どんな仕事があるのでせう。」

「仕事なんかがあるものかね、旨い物を喫つて、佳い衣服を着てさ。」

「え。」

龍吉はへんに思つて老婆の顔を見た。老婆も何か氣の注いたことがあるのか、ひよいと龍吉の顔を見て笑ひだした。そして、一笑ひして呆氣にとられてゐる龍吉の顔を見なほした。

「なにも、そんなに心配することは無いのだよ、わたしがわるいやうにはしないから、汝さんの出世になるやうにしてあげるからね。」

仕事にありつけば出世ができるやうにしなければならぬし、老婆にもさうしてもらはなくてはならないのは勿論である。

「さうですよ、何時までもまごしちやゐられませんかからね、何かしなくちや。」

「さうとも、さうとも、男は出世をしなくちや。」

「さうですよ、わつしのやうな者が、出世なんかをかしいのですが。」

「なに、汝さんだから出世ができるよ、汝さんの出世は、もう眼の前にぶらさがつて、汝さんがそれをつかまへさへすれや、それでいいことになつてゐるのだ、汝さんと云ふ人は、ほんとに果報者だよ。」

「なんだか婆さんの云ふことは、お濱さんの云つたやうなことに似てゐると思つた。龍吉は慶子の氣に入りのお濱のことを思ひだして心で苦笑した。

「さうですか。」

「さうだよ。」

馬車は休みなしに駆けてゐた。龍吉はかなり車の中にあることを思ひだした。考へてみれば老婆との話もかなり長かつた。なんぼなんでも目と鼻の間の新橋へ往くに、こんなに時間のかかるはずがなかつた。龍吉はちりちりして來た。

「あんまり手間がとれるぢやありませんか、どうしたのでせう。」

老婆はすましてゐた。

「なに、もうすぐだよ。」

「すぐだよつて、新橋ぢやねえのですか。」

「新橋さ。」

「だつて、新橋へ往くに、こんなに手間がとれるは、をかしいのぢやねえですか。」

「馬車は狭い街路が通れないから、とほまはりをするのでね、だが、もう、すぐだよ。」

なるほど狭い小さな街路は通れないだらうが、新橋へ往くにはそんなにする必要がなかつた。

「新橋の何處です。」

「往つてみれや、判るよ、それや良い處だよ、汝さんびつくりするよ。」

「料亭ですか。」

待合茶坊と云つたが待合茶坊でなしに、庭の大きな石燈籠などの數多ある料亭かも知れないと思つた。

「まあ、まあ、今に判るよ。」

「さうですか。」

三三

龍吉は老婆の云ふがままになるより他に途がなかつた。龍吉はもう路の遠近は考へなかつた。

「もうすぐだよ、そんなに、氣をもまなくつてもね。」

老婆の詞は龍吉をぢりぢりとしぼりつけた。

「さうですか。」

龍吉はひよこりと頭をさげた。それと同時に、馬車がびたりと停まつた。老婆は我が意を得たと云ふやうなひひと云ふ笑聲を出して笑つた。

「いよいよ來たのだよ、汝さんの出世の門口だよ。」

「さうですか。」

龍吉は周圍を見まはした時、己の傍の扉が音もなく開いた。

「まあ、おおりよ。」

「さうですか。」

龍吉は腰をあげたが前方が判らないので不安であつた。さうして躊躇してゐる龍吉を老婆は押しやるやうに云つた。

「さつさとおおりよ、お待ちかねぢやないか。」

龍吉はおりた。冷たい月の光は廣く執りまはした板扉の上に、椎のやうな枝葉の茂りの魔物のやうにおつかぶさつてゐるのを見せた。龍吉は何處に入口があるだらうと思つて注意したところで、口が開いたやうに眼の前の板扉に附いた耳門が開いて、裡の暗い處からほつかりした燈が射した。それは雪洞の燈であつた。

「まあ、どうかい。」

それは雪洞に白いしなやかな手をかけた女であつた。龍吉はしりごみした。後からおりて來た老婆が其のしりつべたをひつぱたくやうに云つた。

「早くお入りよ、お客様がお待ちかねぢや。」

「まあ。」

龍吉はふらふらと入つた。雪洞の主がさつと傍へ體をかはしながら龍吉に引きそらた。それは壯い小間使のやうな姝な女であつた。

「どうか、此方へ。」

「さうですか。」